

587

32



\* 0019829000 \*

0019829-000

587-32

経済学全集

改造社

第8巻

昭4

ADB



25 218



29



河上肇著

經濟學全集  
第八卷

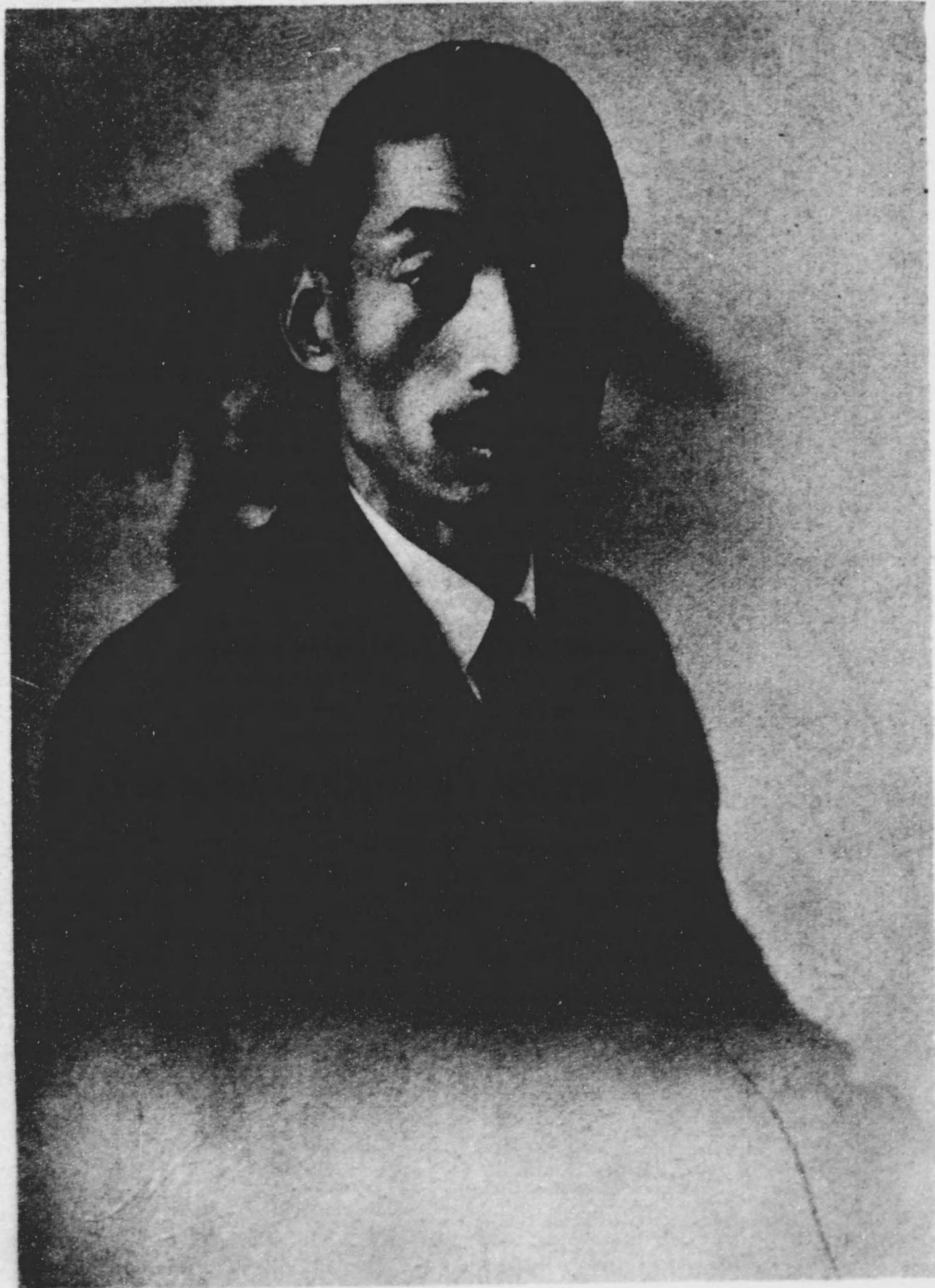
マルク  
ス主義  
經濟學の基礎理論



改造社版







法學博士 河上肇 氏



12  
1135  
1929  
4

マルクス主義経済学は、その哲學的基礎から離しては、これを正當に理解することが不可能である。本書の上篇はその趣旨から、マルクス主義の哲學的基礎を明かにするに努めた。論述の順序は、すべて抽象的なものから具體的なものへと、いふ段階を踏んでゐる。すなはち第一章においては、唯物論一般について述べた。しかる後、第二章においては、辯證法的唯物論の何物たるやを明かにせんがために、主として辯證法の特徴を論じた。更に第三章においては、辯證法的唯物論の人間社會への適用としての・史的唯物論（唯物史觀）について論述した。ところで、この史的唯物論は、人間社會の進化に關する極めて一般的な・從つてまた抽象的な・理論たるにすぎない。この一般的な理論を導きの絲となしつゝ、吾々は更に、現代社會の特殊なる運動法則の發見に進まねばならぬ。かくて吾々の研究は、全世界觀たる辯證法的唯物論から、一の史觀たる史的唯物論に進み、更に一般的な史觀たる史的唯物論から、一の歴史的社會形態たる資本主義的社會の研究に進んでゐるのであり、要するに、最も抽象的なものから、次第により具體的なものへ進んでゐるのである。

序

58732

マルクス主義經濟學は、その哲學的基礎から離しては、これを正當に理解することが不可能である。本書の上篇はその趣旨から、マルクス主義の哲學的基礎を明かにするに努めた。論述の順序は、すべて抽象的なものから具體的なものへと、いふ段階を踏んでゐる。すなはち第一章においては、唯物論一般について述べた。しかる後、第二章においては、辯證法的唯物論の何物たるやを明かにせんがために、主として辯證法の特徴を論じた。更に第三章においては、辯證法的唯物論の人間社會への適用としての・史的唯物論（唯物史觀）について論述した。ところで、この史的唯物論は、人間社會の進化に關する極めて一般的な・從つてまた抽象的な・理論たるにすぎない。この一般的な理論を導きの絲となしつゝ、吾々は更に、現代社會の特殊なる運動法則の發見に進まねばならぬ。かくて吾々の研究は、全世界觀たる辯證法的唯物論から、一の史觀たる史的唯物論に進み、更に一般的な史觀たる史的唯物論から、一の歴史的社會形態たる資本主義的社會の研究に進んでゐるのであり、要するに、最も抽象的なものから、次第により具體的なものへ進んでゐるのである。

下篇は、『資本論』における商品の分析の解説から成る。商品は資本主義的社會の細胞である。そして本來の細胞學が『生物學の基礎』であり、『生物界の現象の究極的の説明を與へるものに違ひない』のと同じやうに（山羽博士『細胞』はしがき、参照）、この商品の分析は、資本主義的社會の經濟學の基礎であり、現代社會の



あらゆる矛盾に對して究極的の説明を與へるものに相違ないのである。この下篇の内容は、私が今歳の春「資本論入門」の名において公けにしたものと、ほぼ同じである。この部分の論述は、今の私にとつては、もはやこれ以上に改善する餘地なきものと見えてゐるのである。(下篇の本文中に挿入したる引用頁のうち、書名を示さざるものは、すべて「資本論」第一卷の頁を指す。)

私が書齋で過ごしたる時間は、近頃急速度をもつて遞減しつゝある。そのため、本書の脱稿は少からず豫期に後れた上に、その上篇においては、若干豫定の計畫を實現しえざりし部分もあつた。だが、幾多の不備を免れざる本書も、始めてマルクス主義を學ばんとする人々にとつて、なほ何程か有用な手引となるであらうことは、著者の安んじて自信しうるところである。

著者は今月中にこの京都を去つて東京に移住しようとしてゐる。二十餘年間住み慣れた京都において私が筆を執りえた著作の最後のものが、すなはちこれである。今筆を擱かんとするに臨み、ひそかに多少の感慨なきことをえない。

一九二九年十二月三日、洛東古今洞

の南窓に日を受けつゝ、認む

河 上

肇

# マルクス主義經濟學の基礎理論 目次

## 上篇 マルクス主義の哲學的基礎

### 第一章 唯物論

- レ一、觀念論と唯物論……………二
- レ二、被壓迫階級の哲學としての唯物論および無神論……………七
- 三、十六世紀のオランダおよび十七世紀のイギリスにおける唯物論および無神論……………二二
- 四、十八世紀のフランスにおける唯物論および無神論……………二六
  - その一、メリエー……………二六
  - その二、ドルバック……………二七
  - その三、十八世紀の唯物論の缺陷……………二八
- 五、十九世紀のドイツに於ける觀念論の批判者としてのフオイエールバッハ……………三〇
- 六、マルクス主義における哲學上の根本的見地としての唯物論……………三三
- 七、研究にとつての唯物論的出發點……………三七
- 八、唯物論の根據……………四六



九、思惟と存在との適應關係……………八二

一〇、相對的眞理と絶對的眞理……………八

一一、眞理の基準としての實踐……………一〇

### 第二章 辯證法

一、ヘーゲル辯證法の顛倒……………一〇一

二、辯證法的思惟の本質……………一〇六

三、對立物の統一と統一物の分解……………一〇三

四、差別の相對性……………一〇五

五、事物を發展過程において(運動の流れにおいて)把握すること……………一〇四

その一、序 説……………一〇八

その二、反對物への轉化……………一〇三

その三、發展は對立物の闘争である……………一〇四

その四、量から質への轉化……………一〇四

その五、否定の否定……………一〇三

六、總括——辯證法的唯物論……………一〇四

### 第三章 史的唯物論(唯物史觀)

一、唯物論の社會(または歴史)への擴張……………一九四

二、人間の社會的生活における基本的な對立物——生産諸力と生産諸關係……………二〇〇

その一、二様の意義における生産力……………二〇三

その二、社會の生産諸力の構成分……………二〇六

その三、生産諸關係および生産の仕方……………二一一

三、生産諸力と生産諸關係との辯證法的關係……………二一八

四、社會の經濟的構造の構成分としての純經濟的諸關係および政治經濟的諸關係……………二二三

五、社會の階級別とその政治的構造(政治的および法律的上層建築)……………二四五

六、觀念的上層建築——社會的意識は社會的存在を反映する……………二五五

七、社會變革の總過程——階級闘争——經濟と權力——必然の王國から自由の王國への跳躍……………二六六

八、唯物史觀の公式の略解……………二六

### 下篇 マルクス主義經濟學の出發點

#### 序 説

一、抽象的(捨象的)なものから具體的(具象的)なものへといふ思惟の進行の一般的形式……………二八三

二、資本主義的社會の運動法則の曝露——マルクス主義經濟學の最後の窮……………二八三



極目的 ..... 二六七

三、資本主義的社會の自然史的過程の把握——辯證法的唯物論の適用 ..... 三〇〇

### 第一章 商 品

第一、研究の出発點としての商品 ..... 三二〇

一、總 說 ..... 三二〇

二、資本家的社會の最も捨象的な範疇としての商品は、思惟の前に興へられたる外的現象である ..... 三二六

三、資本を問題とするがゆゑに、商品が最も捨象的な範疇となる ..... 三三三

四、最も捨象的な範疇としての商品と、具象的な凡ゆる全體としての資本家的社會との不可分離なる同時存在 ..... 三四一

五、論理的出發點(および論理的進行)の歴史の出発點(および歴史的發展)への適應 ..... 三四八

六、出發點と到着點との間における辯證法的循環 ..... 三五七

第二、商品の分析によつて得られたる商品の二つの要素としての・使用價値および價値 ..... 三六〇

一、まへおき ..... 三六〇

二、使用價値としての商品 ..... 三七一

三、價値としての商品——その一、價値の品質 ..... 三八一

四、價値としての商品——その二、價値の分量 ..... 四二〇

第三、労働價値説に對する異論の分析 ..... 四一九

一、クレーゲルマンへのマルクスの手紙 ..... 四一九

二、マルクスの『捨象的な・人間的な・労働』を單なる抽象的概念と誤解することに基づく異論 ..... 四二四

三、觀察の對象を労働生産物に限定することに對する非難 ..... 四三六

四、價値法則と現實における商品の交換比率との不一致 ..... 四四四

五、價値法則は純粹な姿における商品交換の法則である ..... 四五二

第四、商品で表示されてゐる労働の二重性 ..... 四七二

一、まへおき ..... 四七二

二、使用價値を創造する有用的労働としての労働 ..... 四七六

三、價値を創造する人間的労働としての労働 ..... 四八三

第五、價値形態およびその發展 ..... 四九三

一、論理的進行の出発點 ..... 四九三

二、簡單なる價値形態の分析 ..... 五〇七

(A) まへおき ..... 五〇七

(B) 價値表現の對立的兩極 ..... 五一三

(C) 相對的價値形態 ..... 五一六

(D) 等價形態 ..... 五二六

(E) 簡單なる價値形態の總體 ..... 五三六

三、簡單なる價値形態の擴大されたる價値形態への變態 ..... 五三八



四、擴大されたる價值形態の一般的價值形態への變態……………五四六

五、一般的價值形態から貨幣形態への推移……………五五七

第六、商品の物神崇拜的性質とその秘密……………五六一

一、まへおき……………五六一

二、商品の物神崇拜的性質はどこから生ずるか？……………五六七

三、商品生産者の社會的存在の反映としての物體化意識……………五七一

四、商品生産社會以外の生産諸形態における勞働……………五八五

五、現實世界の宗教的反映……………五六六

六、オルテヨア經濟學の根本缺陷……………六〇一

### 第二章 交換過程……………六〇五

一、まへおき……………六〇五

二、諸商品の全面的交換に含まれる矛盾……………六一五

三、矛盾の唯一可能な解決としての貨幣の形成……………六二五

四、矛盾の展開とその同時的解決(問題はその解決の手段と同時に發生する)……………六二八

五、特殊なる商品の貨幣への必然的な轉形……………六三九

六、商品の物神崇拜性の完成……………六四二

## 上篇 マルクス主義の哲學的基礎



# 第一章 唯物論

## 一 觀念論と唯物論

辯證法と唯物論とは、後段に至つて説明する如く、本來は切り離すことのできないものである。すなはち辯證法は、事物を唯物論的に——言ひ換へれば、正しき仕方で——把握することのために、そして斯く把握される事物それ自體が辯證法的であるために、成り立つ法則であるから、それはたとひ、ヘーゲルにおける如く觀念的な神祕的な雲や霧で蔽はれても、本質的には事物に對する唯物論的把握の上に立脚してゐるのであり、従つてまた、吾々が事物に對する唯物論的な把握の仕方を眞に徹底せしめて行つたならば、そこには不可避的に辯證法的な認識が成り立つことになるのである。だが吾々は先づ分析的に吾々の考察を始めよう。すなはち最初には、辯證法的唯物論の一つの方面たる辯證法を捨象(無視)し、残れる他の一つの方面たる唯物論そのものの考察から始めよう。

唯物論とは如何なるものであるか？ エンゲルスは、次ぎの如き標準によつて、すべての哲學者を、觀念論者と唯物論者との二大陣營に分かつた。

「この問題が〔思惟の存在に對する・精神の自然に對する・關係についての問題、全哲學の最高の問題が〕



如何に答へられるかに従つて、哲學は二大陣營に分裂した。自然に對する精神の本性性を主張し、従つて結局において何等かの種類の世界創造を認容する人々は、——この創造は、哲學者にあつては、例へばヘーゲルにおける如く、往々にしてクリスト教におけるよりも遙に荒唐無稽なものであるが、——觀念論の陣營を形成した。自然を本源的なものと見る他の人々は、唯物論の種々なる流派に屬してゐる。觀念論および唯物論なる二個の表現は、本來、これ以外の何等かのものを意味するものではない。『フォイエルバッハ論』、ドイツ本、一四頁。佐野文夫氏譯本、四四—四五頁。阪本勝氏譯文、『マルクス・エンゲルス全集』第十二卷、八八九頁。

レーニン、エンゲルスの以上の説明をば「異常に正しく且つ深刻なる考察」となし、その著『唯物論と經驗批判論』の全巻を通じて、つねにこの見地に立つてゐる。

ブレハーフの『史的一元論』にも、完全にエンゲルスの意見を裏書しつゝ、次ぎの如く述べてある。

『唯物論は觀念論の正反對物である。觀念論は、あらゆる自然現象・物質のあらゆる性質を、精神の或る性質によつて説明しようとするものであるが、唯物論は正にこれと反對に行動する。すなはち唯物論は、心的現象を物質の或る性質によつて、人體あるひは一般に生物體の或るオルガニゼーションによつて、説明しようとする。物質を第一義的動因となす總ての哲學者は唯物論の陣營に屬する人々であり、精神を第一義的動因となす總ての哲學者は觀念論者である。』(川内唯彦氏譯本、二頁)。

なほ同じブレハーフは、他の機會に、同じことをや、詳しく次ぎの如く表現してゐる。

『哲學の課題は何處にあるか？ E・ツェラアは答へていふ、「意識と存在との最後の基礎を討究し、すべ、

ての實在的なものをこの基礎との連絡において把する」にあると。これは正しい。だが茲に直ちに新たな問題が起る、——「意識の基礎」をば「存在の基礎」と分離した或るものとして觀察しえられるであらうかと。これに對しては決定的な否定をもつて答へねばならぬ。吾々の「我」は自己を外界(非我)に對立せしめてゐるが、それと同時にそれは外界と自己との連絡を感知してゐる。だから、人間が哲學的思索を始めるときには、すなはち或る整つた世界觀を打ち立てようとする希望が人間に起つたときには、彼れは必ず、「我」は「非我」に對して・「意識」は「存在」に對して・「精神」は「自然」に對して・如何なる關係にあるか、といふ問題にぶつかるのである。なるほど、この問題が哲學者の問題とならなかつた時代もある。それは古代ギリシア哲學發展の初期のことである。例へばタアレスがさうである。彼れは、水が本源的實體であつて、すべてのものは之から生まれ、すべてのものは之に歸すると、教へた。だがこの場合彼れは、意識がこの本源的實體に對しどういふ關係にあるかとの疑問は起さなかつた。水ではなく空氣が本源的實體であると考へたアナキシメネスもまた、かゝる疑問は提起しなかつた。しかしその後になつて、ギリシヤの哲學者たちも、「非我」に對する「我」の存在に對する意識の問題を、どうしても避けることのできない時代が來た。かくてその時、この問題は哲學上の根本問題とされた。そしてこの問題は、現代においても依然としてさうである。

『種々の哲學體系はこの問題に對して色々の解答を與へてゐる。しかし種々の哲學體系によつて與へられてゐる諸々の解答をよく考察するならば、一瞥したときにさう思はれるほど、これらの解答が決して多種多様なものではないといふことが、分かるのである。これらすべては二つの部門に分けることがで



きる。

『第一の部門に屬するものは、思想家たちが、客體・言ひ換へれば存在・更に言ひ換へれば自然・を、その出發點とする場合に生ずる解答のすべてである。この場合には、思想家たちは、どういふ風にして客體に對して主體が・存在に對して意識が・自然に對して精神が・補足されるかを説明しなければならぬ。』ところでこの點に關する彼等の説明は決して一樣ではないのだから、その出發點は同じであるにも拘らず、必ずしも一樣でない體系が得られるのである。

『第二の部門に屬するものは、主體や意識や精神をその出發點とするすべての哲學的構成である。この場合には、どういふ風にして主體に客體が・意識に存在が・精神に自然が・補足されるかを説明することが、思想家たちの義務となるかは、容易に了解されうることである。そして彼等が自己のこの義務を如何にして果すかに應じて、この部門に屬する哲學體系も互に相違してくるのである。』

『客體から出發する人々には、——もし彼等が徹底的に思惟する能力と勇氣とを持つてゐるならば、——唯物論的・世界觀の一種類が生まれるのである。』

『主體をその出發點としてゐる人々は、——やはり彼等が徹底的に進むことを恐れないならば、——何等かの色の觀念論者となるのである。』

『しかし徹底的に思惟する能力のない人々は、中途半端に停頓して、觀念論と唯物論との混血種に満足する。かういふ不徹底な思想家たちは折衷派と呼ばれる。』(デボーリン著『辯證法的唯物論の哲學』に對する序文。川内・永田兩氏の譯本は叢文閣から、井上氏の譯本は白楊社から出てゐる。こゝでは双方の譯本を参照したた

めに、完全には何れとも一致してゐない。)

思惟と存在、精神と自然、心と物、または主體(主觀)と客體(客觀)等々、いづれの表現を用ひても、指すところは畢竟同じであるが、これら二つの關係を如何に見るかといふことが、全哲學の最高の且つ最後の問題であり、この問題に對する答への如何によつて、唯心論と唯物論との哲學上の二大陣營が區別されるのである。自然(物)よりも精神(心)が先きに存在するのであり、自然は精神から派生したものである、と考へる人は、觀念論の陣營を形成する。かゝる人々は、如何にして精神から自然が生まれ出るかを、何等かの仕方

で説明せねばならぬ。従つて、結局においては、『何等かの種類の世界創造を認容することになるのであるが、この創造は、哲學者にあつては、クリスト教におけるよりも、古代の神話等々におけるよりも、遙に荒唐無稽なものとなつてゐるのである。しかるに、これらの人々と異なり、自然(物、存在)を本源的なものと見、精神(心、意識)はそれから派生するものであると考へる人々は、——たとひ種々なる流派に分かれてゐるにせよ、ともかく——唯物論の陣營に屬するのである。』

【註】 以上の如く説明するとき、觀念論と唯物論との區別は、一見して甚だ明瞭なるが如くである。そして健全なる常識を有する人々は、——煩瑣なるアルゲオア的哲學によつて迷はされてゐない人々は、——誰でもが、心から物が生まれるとは考へず、精神作用なるものは特殊なる有機物の特殊なる機能に外ならぬことを承認するであらう。言ひ換へれば、一般的な原理的な立場においては、これらの人々は何れも唯物論を支持するであらう。だが、かゝる人々といへども、一たび吾々の實生活に觸れる問題にぶつかると、無意識的に觀念論の見地に滑り落ちる。その一例として私はこゝに國家の問題を挙げよう。これについて、レーニンが次ぎの如く注意してゐる。



「國家の問題ほど、ブルジョア科學やブルジョア哲學や法律學や政治學や操艦業やの代表者たちによつて、意識的に又は無意識的に、甚しく混亂せしめられてゐる問題は、殆ど他にこれを見ない。この問題は、今日に至るまで極めて屢々宗教問題と混同されてゐるが、しかもたゞに宗教教義の代表者たち（これらの人々からは他の何物をも期待できないことは勿論であるが）のみならず、宗教的偏見から自由だと自ら考へてゐる人々といへども、また極めて屢々、國家の特殊問題と宗教の問題とを混同し、極めて屢々觀念的、哲學的基礎づけをもつて、國家は何等かの神々しきものであり、何等かの超自然的なものであり、これによつて人類が生活し來つた或る力であり、それは人類に何等かを與へる。あるひは與ふべき力であり、人類によつて與へられたものではなく、人類のために外界から與へられたものを具備してゐる力——この力は神的本源の力である——であるといふやうな、複雑な教理を組み立てんと努めてゐる。そしてこゝに斷言しなければならぬことは、この教理は、搾取階級すなはち地主と資本家との利益と極めて密接に結びついてをり、夥しく彼等の利益に役立つものであり、従つてブルジョアの代表者たちの全習慣・全見解・全科學のなかになんか非常に深く浸潤してをり、そのためにこの教理の殘滓は一步々諸君に迫つてきて、遂にはメンシェウイキヤ社會革命黨員やの國家觀が生ずるに至つたのである。彼等は、自らは宗教的偏見に囚はれてゐるといふ思想を公然として拒け、自分たちは國家を冷靜に考察しうる、確信してゐるのである、云々。」

一たび國家の問題に觸れてくると、人々は此の如く忽ちにして宗教的偏見のなかに溺れ、唯物論的見地を棄て、觀念論的泥沼のなかに落ち込み、そこに一種の神的なるものを見るに至るのである。マルクス主義はあらゆる問題に對して常に徹底的に唯物論的見地に立つ。このことは、かく一般的に抽象的に要約すれば、何んでもないことのように見えるけれども、しかし、それが吾々の認識を科學的ならしめるために役立つ効果に至つては、これを如何に重く評價するとも、決して過重とはなりえぬほどのものである。」

## 二 被壓迫階級の哲學としての唯物論および無神論

唯物論は無神論と不可分離的に結びついてゐる。（すでに述べたる如く、觀念論は、結局において何等かの神・または何等かの神的なるものを認める。これに反し、唯物論は、それが徹底的なものであるかぎり、絶對的にかゝるものを認めない。それは絶對的な無神論を把持する。）ところで、苟くも社會が階級に分裂してゐるかぎり、従つてまた、少數者より成る搾取階級が多數者より成る被搾取階級を武力的にまたは精神的に抑壓する必要があるかぎり、その社會には、一方では××的××の××として××が××××××として生ひ立ち、他方では××的××の道具としてのイデオロギーが觀念的上層建築として維持される。いつの世においても、賤民たちが彼等の困厄の眞因について考へ始めるといふことは、支配階級にとつて極めて不安なことである。だから、昔から階級社會にあつては、これら賤民たちの注意を地上の物質的生活の考察から奪ひ去るために、何等かの種類の觀念論的哲學が必要とされ、また現世において満たされざる希望を來世に繋ぐために、何等かの形態の宗教が必要とされるのである。（吾々は、かゝる哲學や宗教をもつて、支配階級の意識的な發明に係はるとなすものではない。それらのものの起源に關する社會的根據は別として、それについては後に論ずる機会がある。——こゝではたゞ、それらのものが常に支配階級によつて利用されるといふことを、注意すれば足る。）「宗教は、他人のための永久的勞働によつて・困苦と孤獨とによつて・抑壓されてゐる人民大衆を、到るところに重壓する精神的壓迫の一種である。搾取者に對する闘争における被搾取階級の無力が、來世における・より善き・生活への信仰を呼びおこすのは、丁度、自然との闘争におけ

\* 下篇第一章第六の五



る野蠻人の無力が、神々・惡魔・奇蹟・その他のものを呼びおこすのと同じである。宗教は、一生涯働いて苦みぬく人間に對しては、地上における屈從と忍耐を教へ、天國の報の希望をもつて慰める。』(レーニン『宗教について』佐野學氏譯本、四頁)。かゝる宗教が、搾取者たる支配階級により、彼等自身がこれを信仰するためではなく、被搾取階級にこれを信仰せしめるために、甚だ有用な精神的道具として利用されうるであらうことは、賭やすき道理である。觀念論およびこれと不可分的に結びついてゐる宗教は、それゆゑに、階級社會においては決して徹底的に根絶されうるものではない。

だが、それと同時に、從來の被壓迫階級が支配階級に抗爭して新たに勢力を獲得せんとする時代にあつては、觀念論およびこれと不可分的に結びついてゐる宗教は、それらのものが之に對して精神的羈絆として機能してゐた階級の手により、いつでも何等かの程度において蹴破られる。そしてその際、かゝる舊信仰の破壊のため役立つ精神的武器は、言ふまでもなく唯物論である。だから唯物論は、いつでも、從來の被壓迫階級が新たに勢力を得んとする『變革の時代』に、勃興してゐるのである。——おおよそ從來の歴史(階級社會の歴史)における唯物論の消長は、たゞかゝる見地からのみ理解するべきものであり、それは決してそれ自身に理解するべきものではない。有名なる哲學者たちの大體の思想を、その社會的根源から切り離して、ただ編年的に叙述した哲學史が、一般的に觀念論および唯物論の起伏につき、何等その必然性を説明し能はざるは、これがためである。だが、今はそれらのことにつき、これ以上立ち入るべきではない。

唯物論の勃興がもし以上の如き社會的根源を有するものとするならば、それは今日まですでに、ブルジョア革命の際に勃興してゐたはずであり、また事實において、それは果してその通りになつてゐる。たゞブル

ジョア革命——すなはち從來の被壓迫階級たりしブルジョアジーが封建的束縛をぶち破るために行つた革命——は、階級そのものを無くするための革命ではなく、それはたゞ支配階級の地位から封建的領主を追ひのけ、それに代つてブルジョアジーが新たに支配階級たる地位を占めるための革命であつた。だから、革命はすでに終つてしまつても、社會は依然として階級社會であり、階級一般の廢止はもちろん實現されなかつた。ブルジョアジーは、自己の支配的地位を確立してそれ自身の立脚地を得るに至るや否や、それと同時に、その脚下には之を永久的に抑壓せねばならぬ多數のプロレタリアをもつものとなつた。『一七九七年には、ブルジョアジーは、彼等の新しい利益に對してたゞ不斷の脅威にすぎなかつたであらうやうな諸學説を、もはや必要としなかつた。彼等は唯物論を棄てねばならなかつた。』(榎本氏譯、プレハーフ『近代唯物史』九一頁)。昨日までブルジョア階級それ自身の解放のための精神的武器として役立つた唯物論は、この階級がすでに支配的地位に上ぼつた今日では、たゞに自分自身にとつてもはや不用なものとなつたばかりではなく、それはプロレタリア層に滲透することにおいて、ブルジョアジーの新たに得たる支配的地位への脅威たるものに轉化した。ブルジョアジー自身が被壓迫階級から支配階級に轉化し、進歩的な階級——人類の進歩に對する種々なる桎梏を打破するための革命的な階級——から保守的な階級へ轉化するにつれて、ブルジョアジーの手によつて發展せしめられた唯物論は、ブルジョアジーにより危険思想として迫害されるべきものに轉化した。一言にして蔽へば、ブルジョアジーは、唯物論の保育者からその反對物たる迫害者に轉化したのであり、轉化せざるをえなかつたのである。

だから嘗て諸國に行はれた唯物論の展開およびそれに伴ふ宗教への批判は、その時代とその程度とが恰も



ブルジョア革命の行はれた時代と程度とに適應してゐるので、すなはちそれは、ブルジョア革命の早く行はれたところでは早く起り、ブルジョア革命の後れたところでは後れて起つてをり、またブルジョア革命が不完全にしか行はれなかつたところでは不完全に、それがより徹底的に行はれたところではより徹底的に行はれたのである。

かゝるブルジョア革命は、ブルジョアの手によつて行はれたものとしては、比較的最も徹底的に、約百三十年前のフランス革命によつて實現された。しかしレーニンの指導した一九一七年の革命は、プロレタリアートの手によつて行はれたために、それは今日までの如何なるブルジョア革命も成し遂げえなかつた程度に、決定的に徹底的にブルジョア革命の任務を遂行した。それについてのレーニンの説明を、私はや、長きにわたつて、こゝに引用しよう。

「ロシア革命の直接當面せる任務は、ブルジョア民主主義の任務であつた。すなはち中世紀的殘滓の廢絶、その徹底的驅除であり、この野蠻・この汚辱から、また吾國におけるあらゆる文化と進歩とを阻止せるこの大きな制動機から、ロシアを奇麗に掃除することであつた。そして吾々は、人民大衆およびその集團に與へた効果の點から見て、百二十五年以上前のフランス大革命よりも、より決定的に、より急速に、より果敢に、より有効に、より廣汎に、かゝる掃除をやつてのけたことを、吾々の誇りとする權利をもつてゐる。……」

「革命のブルジョア民主主義的内容——それは一國の社會的諸關係(秩序と制度)から、中世紀的制度・農奴制・封建主義を一掃することを意味する。

「一九一七年までのロシアにおける農奴制の遺物・殘滓の主たる現はれは、如何なるものであつたか？

身分制、土地所有權、婦人の地位、宗教、諸民族の壓迫等と、この「アヴギエーヴの馬小屋」(汚い物の意味)のなかから、<sup>フランス大革命</sup> ~~フランス大革命~~ どれでも好きなものを取り出して見よ。——序にいふが、これらのものは、すべての進歩した國々においても、百二十五年前、二百五十年前、乃至もつと以前(イギリスでは一六四九年)のブルジョア民主主義革命の遂行に際し、完全には掃除されないで可なりの程度まで殘されてゐるのだが、——この「アヴギエーヴの馬小屋」の中から、どれでも好きなものを取つて見よ。諸君は、吾國においてそれらのものが綺麗さつぱりと掃除されてゐることに氣付くであらう。

「……吾々は長い世紀にわたる身分制の建物の一石一瓦をも殘しはしなかつた、(最も進歩的な國家たるイギリス、フランス、ドイツ等においてすら、今日まで、身分制の遺物は一掃されてゐない)。身分制の最も深い根——すなはち土地所有權における封建制と農奴制との殘存物は、吾々によつて徹底的に抜き取られた。……」

「更に宗教ないしは婦人の無權利あるひは諸民族の抑壓と不平等とを取つて見よ。これらはすべてブルジョア民主主義革命の問題である。……これらの諸問題をブルジョア民主主義の方向に徹底的に解決した國は、世界の最も進歩的な國家の中にすら一つもない。しかるに吾々はこれらを十月革命の立法によつて根本的に解決した。吾々は宗教と闘つて來た、そして將來も闘ふであらう。吾がロシアには、貪慾なブルジョアジーと曖昧な小ブルジョアとによつて修繕されつゝ、地球上いづれの國にも例外なしに存在するところの・農奴制および中世紀的制度の憎むべき遺物たる、婦人の無權利または<sup>身分制</sup> ~~身分制~~の如き、<sup>身分制</sup> ~~身分制~~の存在」



下劣な汚ららしい・野卑なものは、たゞの一つもない。

『ブルジョア民主主義的革命の内容は、すべて以上のものから成り立つてゐる。百五十年前ないし二百五十年前には、この革命（共通のタイプをもつた革命を個々の民族の姿について言ふならば、これらの諸革命）の進歩的指導者は、人類を中世紀特權から解放し、婦人の權利剝奪から解放し、ある宗教（ないしは「宗教觀念」、宗教的信仰一般）の國家的特權から解放し、種々なる民族に對する壓制から解放することを、民衆に約束した。彼等はこれを約束したが、しかも實行しなかつた。さうではない、彼等はこれを實行することができなかつたのだ。なぜならば、神聖な私有財産に對する「尊敬」がこれを妨けたからである。吾々のプロレタリア革命は、呪はれきつたこの中世紀的秩序とこの神聖な「私有財産」とに對する呪はれた「尊敬」を知らなかつた。……吾々は、吾々にとつての主要にして且つ本來の事業たるプロレタリア革命の、社會主義的の「副産物」として、ブルジョア民主主義革命の諸問題を、ついでに解決したのである。』（以上、山川均氏譯文——『レーニン著作集』第一卷、『新經濟政策』第九篇『十月革命第四週年』、三七三頁以下——および北野・河野兩氏譯文——『マルクス主義文庫』第十一卷、アドラトスキー著『レーニン主義の理論と實踐』、三七頁以下——の双方による。）」

プロレタリア革命は、同時に、その道程において、ブルジョア民主主義革命の諸内容を徹底的に實現する。なぜなれば、プロレタリア階級は、搾取一般・抑壓一般・階級一般を止揚せんとする階級であり、中世紀的な封建的束縛の一切に對する徹底的な否認者たりうるからである。それゆゑにまた、これをイデオロギーの領域について見ても、唯物論および無神論（宗教一般の絶對的否認）は、たゞプロレタリア階級の代表者たちの

手によつてのみ、はじめて徹底的に發展せしめられうるのである。かくてその發展を中斷され阻害されたままに横たはつてゐた唯物論、ブルジョアジーが未完成のまま、に棄ておいたこの唯物論、かゝる人類の精神的遺産を、ブルジョアジーから承繼し相續して、拘束するところなき發展の拍車をこれに加へうるものは、マルクスの言葉を用ふれば、『資本論』、第二版への跋文・カウツキー版、前付四二頁。河上・宮川共譯、『岩波文庫』版、二四頁。たゞ『資本家的な生産の仕方の轉覆と階級の終局的廢止とをその歴史的使命とする階級——プロレタリアート——を代表する』もののみである。嘗て生産諸力の發展のため懸命に努力したブルジョアジーは、今ではその發展の阻害者となつてをり、そしてプロレタリアートは、今日までブルジョアジーが發展せしめて來たこれらの生産諸力——しかも今日ではもはやブルジョアジーの手で始末されざる程度にまで發展したへたこれらの生産諸力——を、かゝる人類の物質的遺産を、ブルジョアジーから承繼し相續し、これに對する社會的な桎梏を打破することにより、拘束するところなき發展の拍車をこれに加ふることを、その歴史的使命とするものであるが、かゝる物質的生產の領域におけるプロレタリアートの歴史的使命は、おのづから茲に述べつゝある精神的生產の領域におけるこの階級の歴史的使命に適應するものである。かくて人類のあらゆる遺産は、——精神的なものも物質的のものも、——その合理的な形態において、且つそれがその隆盛期にもつてゐたよりもより堅固な基礎の上に充分なる發展を遂げしめられつゝ、プロレタリアートの建設する社會のうちに包攝される。プロレタリアートの哲學としての辯證法的唯物論もまた、それ以前における唯物論の合理的な諸部分を、より發展せしめ、より豊富にし、より具體的ならしめつゝ、これをそれ自身のうちに吸収するのである。



だから吾々は、唯物論の考察を、少くともブルジョアたちの手によつて建設され始めた時代から、始めねばならぬ。

### 三 十六世紀のオランダおよび十七世紀のイギリスにおける唯物論および無神論

ブルジョアジーの手で育てられた唯物論および無神論は、現代を外にしては、フランス大革命の際に、その最大の開花期を示した。それは、一九一七年のロシアにおける革命を外にしては、このフランスにおける大革命が比較的には最も徹底したブルジョア革命であつたといふ事實に、適應するものである。

吾々は今このフランスにおける唯物論について叙述する前に、先づ他の若干の諸國に於ける歴史を一瞥しよう。それについてデボリーンは次ぎの如く述べてゐる。

「オランダは、政治的および精神的自由の原理が勝利を占めたヨーロッパの最初の國であつた。この國では商工業が最も繁榮してゐたのであるから、ブルジョアジーはすでに十六世紀に政權を獲得した。オランダはスペインから解放され、そしてスペインは逸早く弱りしたが、オランダは繁榮を續けた。革命後數十年を経て、この地盤の上に、新しい生活條件に適應した新しい觀念によつて一貫されたスピノーザの體系の如き、すばらしい哲學體系が生長しえたことは、當然のことである。……オランダはこの時代に自己の諸國のヴォルテールを輩出させたのであるが、これらの人々は、自ら何等かの宗教を持つてゐるにも拘らず、僧侶階級と

執拗な闘争をしたのであつた。若きスピノーザが交際した謂はゆるコレージュ派は、一切の僧侶階級を否定した。……で吾々にとり大事なことは、懷疑的な・理論的な・および無神論的でさへある觀念、従つてまた自然主義的な觀念が、當時空氣中に動いてゐたことを強調することである。スピノーザは、これらすべての潮流やよく意識されてゐなかつた體驗をも、一の學的體系に導き入れたのである。

「イギリスは、オランダが十六世紀に經過したと同じ發展段階を、十七世紀に經過した。類似した經濟的および社會的諸條件は、大體において類似したイデオロギー形態を産み出した。

「イデオロギーの雲上においては闘争は神祕化された宗教的蓋被のもとで行はれるのであるが、この蓋被のもとには地上的な經濟的内容が隠されてゐる。この地でも、先きにオランダで行はれ、後にフランスで行はれたやうに、法王と僧侶階級との權力からの・封建的抑壓からの・國家の解放の問題が日程に上つた。かくて人間の思考はキリスト教の根柢の批判に向けられた。だがこの批判は、同じ程度に絶對主義の根柢にも觸れてゐるのである。イギリスでは、この國の獨特な發展條件のために、この闘争における射手は、他の國々においてさうであつたやうに、下層階級やブルジョアジーの代表者たちではなく、上流身分の代表者たちであつた。

「理論以上に進まなかつたところの、イギリスの「啓蒙主義」の微温的な中途半端な性質は、この事情によつて説明される。下層階級は貴族階級出身のこれらの「改良主義者」たちの手綱のまゝに進んだ。イギリスの貴族階級は、巨大な幾世紀もの政治的およびイデオロギー的經驗を有してゐて、これらの經驗が、彼等をして、現在においても、よくあらゆる危険の間を上手に立ち廻つて、自己の地位・自己の富・および自己の勢力



を著しく保持せしめてゐるのである。「序ながら言ふが」フランスの貴族は、すでに革命以前に自己の政治的破産を完全に曝露してゐた。彼等は襲ひ來る危険を適時に理解し・豫知し・豫防する能力を缺いてゐた。彼等は無關心に享樂して自分たちの王様に仕へること・言ひ換へれば容赦なく人民を搾取し・これに君臨すること・ばかりをなしたにすぎない。それで貴族階級のよき代表者たちは、自分の階級の地位の望みなきことを理解したときに、ブルジョアジーの陣容に入つたのである。イギリスではさうではなかつた。そこでは貴族階級は今に至るもなほ他の諸階級から或る封鎖性と特殊性とを保ちつゝ、同時にこれら諸階級の上に自己の勢力を及ぼしてゐるのである……

「イギリスにおいて理神論なる名稱のもとに行はれた運動の意味は、これに該當した發展段階を経験した他の諸國におけると同様に、イデオロギー的には權威に對する理性の優位の確認に歸着した。すべての「自由思想家」(Free-thinkers)——ハアバート、トゥランド、コリンズ、ブラウン、ブラウント、チュップ、シャプツベリ、ティンダル、等々——は、理性の權利をすなはち思惟と良心との自由を主張した。もちろんこれらの自由思想家は、トゥランド一人を除けば、思想の領域においてさへ大なる革命家ではなかつた。彼等の中の或るものは、理性を自由に使用することは、外ならぬ宗教のために利益である、とすら述べたのである。彼等は、宗教を合理化しようとしたので、それを破壊しようとしたのではない。(それは、現代における社會改良主義者たちが、資本主義社會を合理化しようとするに止まつてゐるのと、同じ趣であつた。)理神論者たちは、本質においては、なほも宗教のうちにある真理を見るところの信仰家として止まつてゐた。しかし彼等は、これらの真理を、理性の助けによつて解釋し是認するの權利を要求した。理性によつて是認されうる

ものは自然法則と合致し、自然的ないし理性的宗教を形成する。これらの思想家や彼等が代表したブルジョアジーは、宗教と理性との斯かる拙い妥協に満足したのである。……宗教の領域においては、イギリスのブルジョアジーは、決してフランスの急進主義にまで上昇しなかつた。漸く十九世紀の初めに、ロバート・オウエンが、フランス無神論の影響を受けて、社會主義者すなはち勞働階級のイデオログとして、宗教が謬見と人間的不幸との一源泉であることを見、その完全な否定にまで昂進したにすぎない。」(河野・永田兩氏譯、デボーリン著『哲學とマルクス主義』、三七八—三八八頁。井上滿氏譯、デボーリン著『フランス唯物論史』、一六一—一七一頁。こゝに引用せるものは双方の譯文によつてゐる。)

デボーリンはなほ續けていふ、『最も一般的な輪廓において以上吾々が特色づけた解放思想の歴史は、十六世紀に始まつて、その完成を十八世紀におけるドルバックの「自然體系」において獲得してゐる。一方ではブルジョアジーと・他方では貴族階級および僧侶階級との間の矛盾が尖鋭化すればするほど、長きにわたる紛議の革命的大團圓がより近く押しよせればよせるほど、舊世界との闘争において無二の武器となつたところの新社會階級の綱領たる・そのイデオロギーを公式化すべき職分をもつたその階級の思想家たちは、ますます勇敢になつた。革命的思想家たちは今や思想の支配者となる。彼等は第三身分の廣汎なる大衆の中に生き生きとした反響を起してゐる。ドルバックは……彼れの博識や思想の異常なる果敢さや不敵な徹底さにおいて最も優れた思想家である。……彼れは宗教的および哲學的思想の領域における一切の先驅的運動の總勘定をなすために、呼び出されたのである。』



此の如くドルバックによつて總勘定されるに至つた十八世紀のフランスにおける唯物論および無神論——吾々は次に、それに對して一瞥を加へよう。

#### 四 十八世紀のフランスにおける唯物論および無神論

##### その一 メリエー

デボーリンは、イギリスの理神論について次ぎの如く言つてゐる。「理神論は、その甚しき微温的性質と内的矛盾とも拘らず、人間的思考と科學的研究との自由を主張するために大なる貢獻をなした。だが、吾々はかゝる科學的世界觀のための闘争が、自己の著作物においてこの世界觀を把持し傳道した人々のために、常に大なる危険と結びついてゐたことを、述べねばならぬ。「戰鬪的な教會」は、有害な學說を、言葉の上で覆へすだけに止めなかつた。それはもつと現實的な手段を採つた。すなはち宗教的教理に對し敢て批判を加へんとした人々の舌を抜き、あるひはそれらの人々を薪の上で火あぶりにした。……かゝる條件のもとにおいて、自由思想家の大多數のものが、自己の本當の見解を隠さねばならなかつたのは、當然のことである。」（前掲書、河野・永田兩氏譯本、四二頁。井上氏譯本、二〇七頁）。

オランダやイギリスでは、早くから商業および都市生活の發展が他の如何なる國よりも著しかつたので、宗教に對する批判の自由も早くから確立された。現にオランダはすでに十七世紀において、政治的および宗教的亡命者の避難所となつてゐた。

フランスにおける商工業の——從つてブルジョアジー——の發展は、ずつと後れた。このフランスが、イギリスの理神論的見解のための豊沃地となつたのは、十八世紀に入つてからのことである。『教養あるフランス人が、イギリスの社會的・政治的・および智的・生活を直接に研究する目的をもつて、同國へ旅行しはじめたのは、十八世紀の二十年以後のことである。』

今日吾々は、フランスにおいて丁度前記の如き氣運が動きはじめた頃に、唯物論無神論を胸にひめながら、靜に死んで行つた一人の牧師を知つてゐる。私はドルバックの思想につき若干の言葉を費す前に、今ではその生誕の年も逝去の年も確には分かつてゐない。この一人の牧師——一六六四年ないし一六七八年に、フランスのシャンパーニュの村落マゼリの一織匠の家に生まれ、長じて後やはりその郷里なるシャンパーニュのエトレビニユの牧師となり、かくて五十五年の生涯を閉づるにあつては、その死骸を自宅の庭園に葬りくれんことを請ひつ、『生前の遺著』三冊を残して死んで行つた一人の平和なる村牧師——ジャン・メリエーにつき私が専らデボーリンの著作（前掲書、河野・永田兩氏譯本、二一五頁以下。井上氏譯本、五頁以下）から知りえたことの一部を、先づ書きとめておかう。なぜなれば、十八世紀における唯物論の先驅者たりし一人の思想家として、彼れの生涯はあまりにも吾々の心をうつものであるから。

『十八世紀の唯物論と無神論とは、その思想的內容において全くメリエーに一致してゐるといふことは、言ふまでもない。彼れは十八世紀（のフランス）において、他に先んじて唯物論と無神論の說教を始めた。さればこの點における彼れの功績は巨大である。彼れは實に十八世紀の唯物論と無神論の「父」といふことが出来る。』



メリエーは、「その死病に罹つたとき、あらゆる飲食物を拒み、少量の葡萄酒すらも拒んだ。そこで近親のもの、彼れが生を厭ふあまり、自ら饑死んだのだと、信じてゐた」といふことは、あるひは事實であるかも知れない。彼は「その全生涯を通じて、迫害を恐れるの餘り、その眞實の見解を扮飾し隠蔽せねばならなかつた。彼れは、性格的には、その思想のための受難を辭せず、眞理と人民の福祉のためには死をも辭せざるが如き、英雄ではなかつた。だが胸の中に大きな創口をもつてゐた彼れは、果して大に苦むことがなかつたであらうか。彼れは惻々として人を動かす懺悔のなかで、自分の苦惱をば次ぎのやうに告白してゐる。

「……だが私が全精神をもつて憎んでゐる信仰上の虚偽を、諸君に説教せねばならなかつたとき、如何に私は内心苦んだことか、……諸君の信頼は如何に多くの悔恨を私に喚び起したることか！ 私は實に何回となく公けに懺悔しようとしたが、私の力で打ち勝つことのできぬ恐怖が、いつも直ちに私を抑へつけて、終に死にいたるまで私に沈黙を強ひたのである。」

「彼れは人民に對して壓迫者との容赦なき闘争を遺言した。宗教的偏見に對する彼れの破壊的批判は人民自覺の啓蒙と開發とに貢獻し、人民の「解放」事業の協力者となつた。メリエーはその生存中に自己の所信を語るべきことができなかつたが、その代りに彼れはその驚嘆すべき「遺著」を遺して、その死後にこれを語つたのである。彼れは彼れの教區民のために作られた「遺著」の解題において、次ぎの如く書いてゐる。「私は、人々の罪惡と過失と貧乏と無智と怨恨とを、見もし且つ經驗もした。私はこれを卑み且つ憎んだ。私は生存中にこれらのことを語る決心がつかなかつたが、私は少くとも死後にこれを語るであらう。私はこの手記〔すなはち「遺著」〕を編み上げ、書き綴つて、人々にこれらのことを知らせるであらう。……」 同じ思想は、次ぎの

やうな人を動かす言葉をもつて始まる本文の中にも繰り返されてゐる。「吾が親愛なる友よ！ 私が人々の統治や支配について、彼等の宗教や彼等の權能について考へたことを、私の生きてゐるうちに述べるのは、私にとつて不可能であつたし、またそれは私にとつて餘り危険であつた。そこで私は、少くとも私の死後に、多くの迷妄に對する豫防手段を諸君に残しておかうと決心したのである。これは私が諸君に贈りうる最も貴い贈物である。諸君もこれを諒とするであらう。」

「彼れは、人民に對する物質的および精神的の搾取に關心をもつてゐる一切の坊主や權力者たちが、極力彼れを讒謗するだらうことを、豫知してゐた。だがそれも、今や彼れが生涯の最終決算をなす時にあたつては、もはや彼れを動かさなかつた。彼れにはもはや暴君の慘忍の前に恐怖を感じる理由はなかつた。いま彼れを捉へてゐるものは、たゞ一つ次ぎの・最後の・思想である、——すなはち今世を去るにあたり、彼れがその全生涯のうちに何度も考へ、何度も感じたことについて、そのすべての眞理を人民に語るといふことであつた。今は何ものも彼れを抑へつけることはできない。眞理・正義・および社會的福祉に對する欲求と、宗教のあらゆる欺瞞を見て感じた憎惡と反抗とは、一切の個人的な懸念にうち勝つてゐる。

「もちろん世を去らうとしてゐる人にとつては、その隠してゐる考を公然と表白するために、別に英雄主義を必要としない。だが問題は、この英雄主義にあるのではなく、メリエーの心に溢れてゐた被抑壓人民に對する火のやうな熱誠にあり、また深刻な透徹した思想にあるのであつて、その思想こそ、靜に流れでる言葉のなかに稻妻のやうに閃いて、革命的な雷雨を豫報しつゝ、歴史的地平線を明るく照してゐるのである。」



「メリエーその人は人間としては暴君を極度に恐怖する平和な村牧師であつたが、彼れの頭腦の中では支配階級にとつて實に危険な思想が駆け廻つてゐたのである。生けるメリエーは何人にも危険ではなかつたが、死せるメリエーは僧侶たちや支配階級にとつて極度に危険なものとなつた。……かくてメリエーは、死をもつて自己の恐怖を克服し、そして墓石の下に横たはりつゝ、人民に一切の眞實を語らうとしたのである。……」

「メリエーは、世界を支配してゐる悪と不正を指摘してその「遺著」を結んだのち「智慧あり分別ある人々や、學識あり雄辯な人々、——正義と眞理の仕事に進出すべきこれらの人々」に對し、次ぎの如く呼びかけてゐる。「彼等は私とは比較にならぬほど之をよくするであらう。正義と眞理に對する愛、社會的福祉に對する愛、呻めきつゝ、ある人民の一般的解放に對する愛は、彼等をさうさせずにはおかぬであらう。そして彼等は、私が語つたあらゆる嫌ふべき迷妄、あらゆる嫌ふべき欺瞞、あらゆる嫌ふべき暴政を、非議し、斷罪し、追求し、打ち殺して、これらを完膚なきまでに辱め廢滅させずにはおかぬであらう。」

「このメリエーの最後の遺言は、ある程度までは、その後實行された。彼れの死後數十年を経て、フランスの少くとも當時のインテリゲンチヤの間には、唯物論および無神論の運動が廣汎に發展して、その運動は部分的には大衆の中へも滲透した。「智慧あり分別あり」「學識あり雄辯な」人々の世代が勃興して、宗教的偏見および暴政に對し、僧侶階級および貴族階級の支配に對し、組織的な闘争を實際に行つた。この闘争はフランス大革命をもつてその終りを告げた。」

だが、メリエーの理想は、決して實現されなかつた。何故なれば、彼れはその究極理想を共產主義的社會改造のうちに見てゐたが、かゝる理想は、ブルジョアジイが自己の權力の確立に向つて準備しつゝ、あつた

十八世紀のフランスにあつては、その實現のための如何なる物質的前提をも缺いてゐたから。従つてメリエーが斯かる共產主義的思想を展開してゐた「遺著」の一部分は、完全に黙殺された。ヴォルテールは、メリエーの遺著の「拔萃」において、全くこれを無視した。またメリエーがあれほど熱烈に闘つたところの宗教の「嫌ふべき欺瞞」も、——それに對してはフランス唯物論者の側から無神論の傳道があつたにも拘らず、——遂に地上から消滅し去るには至らなかつた。何故なれば、すでに述べたやうに、權力を握つた後のブルジョアジイは、人民を欺瞞し壓服する手段としての宗教に自ら復歸してしまつたから。

「唯物論・無神論・および共產主義は、現代プロレタリアートの世界觀の内容を形成してゐる。無神論を完全に實現することは、たゞ共產主義社會においてのみ可能である。だから現代の辯證法的唯物論またはマルクス主義が、如何にメリエーの世界觀から隔つてゐるやうとも、この天才的な牧師は、その唯物論・無神論・および共產主義の思想を楔として、ある程度まで、マルクス主義の旗の下に共產主義實現のために闘つてゐる現代プロレタリアートに合流するものである。」（前掲、河野・永田兩氏譯本、二二五頁。井上氏譯本、一五頁。）

以上述べたるメリエーの不幸なる生涯は、ブルジョアジイが未だ勢力を得るに至らざりし以前の時代に、唯物論・無神論を提唱することが、如何に困難であつたかの事情を、推測せしめるに足るであらう。此の如きは、たゞメリエー一人の運命ではなかつた。先驅者の或るものは、自己の信念のために、殉教的な死によつて身を亡ぼした。十八世紀の思想家たちの多くのものも、なほ困難な事情のもとに、勞作し且つ闘争せねばならなかつた。權力と僧侶階級との側からの迫害は、未だやまなかつた。だが、そのうちに狀勢は根本的に



變化してゐた。以前には異教者たちが焚刑に處せられたが、今は著者そのものではなくて彼等の著書が焚刑を受くるに止まることとなつた。しかも著者それ自身と異なり、多くの身代りを有する著書は、徹底的なる焚刑を免れて、何程か世に流布する機会をもちえた。

かくて革命思想は、十八世紀においては、イデオロギーの領域においても、政治の領域においても、その頂點に達して、最大なる革命の一つへと迸り出た。すでに述べたる如く、この革命は全世界史的意味をもつものであり、或る意味においては全ヨーロッパのその後の發展を豫め決定したのである。先行せる諸世紀のすべての潮流は、十八世紀の末葉に及んで、一切の舊社會をその贅肉や上層建築と共に押し流すところの、力強い流れに合流したのである。吾々は次ぎにその有力なる代表者としてのドルバックについて見よう。

## その二 ドルバック

「ドルバックは、十八世紀におけるブルジョアジーの最も偉大なる思想家・指導者の一人であつたが、今はブルジョアジーに忘れられて呪咀されてゐる。フランスのブルジョアジーは、この二百年の間に政權を獲得し、ドルバックや彼れと同じ思想をもつてゐた人たちの確立してくれたプログラムを自分のために實現させ、存分に生を享樂し了へたばかりでなく、また青年の情熱を忘却して、老衰し果て、己れの没落へと近づき了せた。青年にとつては健康があり、老年にとつては死がある。青年に固有なものは情熱である。それでブルジョアジーが歴史の舞臺に登場したときには、彼等が力強い熱情に興奮して、先驅的な諸思想によつて鼓舞されてゐるのは、當然のことである。しかるに、老年になると、世界は之とは似ても似つかぬ暗黒な光において表

象される。現在のブルジョアジーは老病に罹つてゐる。それは前途に、自己の終局・自己の没落・自己の墓場を見てゐる。そして同時に、いつの瞬間においても己れの歴史的使命の遂行のために自分の力を行使しようとしてゐる力強い「墓掘人」が、彼等の眼前で生成し強くなつてゆく。

「世界のプロレタリアートは、現在、フランスのブルジョアジーが十八世紀末に在つたと同じ状態にある。封建的組織の倒壊とブルジョア的組織による之が置替とは、全世界史的事件たるの意義をもつてゐた。フランス革命は後進諸國にそれらの國々の未來の發展を豫言した。それは將來の諸變革の全系列にとつての雛型となつた。フランスの革命的思想および實踐の觀念的武庫から、一切のヨーロッパ諸國における次の世代は、その闘争の武器を引き出した。そしてイギリスのブルジョアジーの闘争の産物であり、また武器であつたところのイギリスの「啓蒙主義」が、フランスのブルジョアジーのために支持點として役立つと同じやうに、より徹底的なラヂカルなものとしてのフランスの啓蒙哲學は、十九世紀の四十年代のstuhl・ウント・ドラック明に築き上げられたプロレタリア世界觀にとつての出發點である。」（テホーリン、前掲書、河野・永田兩氏譯本、三三七―八頁。井上氏譯本、一九九―二〇〇頁。）

吾々は今、かゝるものとしてのフランスの啓蒙哲學のために、宗教的および哲學的思想の領域における一切の先驅的運動の總勘定をなすべく呼び出される、ドルバックの思想につき、數言を費さう。

【註】ドルバックについては、前掲テホーリンの著書『哲學とマルクス主義』（河野重弘・永田廣志兩氏譯）三三七頁より四四三頁に至る間に、三篇の論文を収む。井上滿氏の『フランス唯物論史』は、前掲書の部分譯である。ドルバックに關する三篇の論文は、殘らず同書一七七頁以下に收められてゐる。プレハーノフの『唯物論史への寄與』は、概



本譯輔氏により『近代唯物論史』の名のもとに譯出されてゐるが、三篇より成る同書第一篇は、ドルバックのために獻げられてゐる。以下の叙述は、専ら右テポリンおよびプレハーフの二書に據つたものである。

『このブルジョア新人(ドルバック)は、神によつて創造された中世紀人——無形不滅な靈魂をもち、彼岸世界に眞實の生活を見、地上世界をその反影であり陰影であると考へてゐた中世紀人——と、截然と區別されてゐる。人間は神の創造物である、斯様に舊世界の代表者たちは見てゐた。人間は自然の創造物である——これが新しき眞理である。』(前掲テポリン著書、河野・永田兩氏譯本、三五〇頁。井上氏譯本、一三二頁。)

ドルバックはいふ、『もし吾々が自然を死せる・特質なき・全く受働的な・素材の堆積と解するならば、吾々はたしかに運動の原理をこの自然の外に求めることを餘儀なくされるであらう。しかしもし吾々が自然をそれが現實にある通りにすなはち一の全體として・理解するならば、——その全體の種々なる部分は種々の特質を有し、かゝる特質に照應して活動し、相互に不斷の作用および反作用をなし、重力を有し、ある共通なる中心に向つて引きつけられ、また他方では、外圍に向つて動かながために互に離れようとし、かくて互に吸引し、衝擊し、結合し、分離する、そしてこれらの絶えざる離合集散によつて、吾々が見るところの一切の物體を生産し分解するのである、——吾々が見るところの構成および現象を理解するために、超自然的諸力に訴へることを何物も強制しないであらう。』(前掲プレハーフ著書、榎本氏譯本、三頁に引用するところ。すなはちドルバックによれば、自然とは種々なる特質を有し従つて種々なる運動をなせる多様な物質の結合と運動とから成り立つた偉大なる全體である。そして斯かる全體を構成してゐる個々のものについて見れば、それは、それをば他のものと區別するところの一定の性質・結合・運動または運動方法から出来てゐる全體

である。人間もまた、特殊の性質を賦與された或る物質の結合から出来てゐる或る全體であり、その統一においてそれは有機體と呼ばれ、且つその本質は感覺し思惟し行動することに存するところの全體である。これら個々の體系は偉大なる全體系の一部を形成するものであり、それらはこの一般體系と不可避的に關聯してゐる。かくて人間は、偉大なる全體を・宇宙を・構成する自然の一部である。

此の如く、自然または人間を神の創造物となさず、従つて自然または人間の創造者として觀念的な神なるものを認めず、かゝる觀念的なものをもつて物質的なものの本源となさざるところに、唯物論の根本的見地が確立されてゐる。

しからば、吾々人間は如何にして、以上述べたるが如き種々の物質を認識しうるに至るか？ ドルバックはいふ、『吾々は物質をたゞ知覺・感覺・および物質が吾々に與へるところの觀念によつてのみ知る。だから吾々は、善かれ悪かれ、吾々の五官の特別の性質に従つてこれを判斷するのみである。』『吾々は、物質が吾々に働きかける仕方に従つて、その特質ならびに性質の或るものを認識することはできても、物質の本體やまたその眞の性質を知ることにはできぬ。』『吾々にとつては、物質は吾々の五官を何等かの仕方で刺戟するところのものである。そして吾々が種々なる物質に屬せしめてゐるところの諸特質は、物質が吾々のうちに生み出すところの種々なる印象もしくは變化にその基礎をもつてゐるのである。』(プレハーフ前掲書、譯本七頁に引用するところ。)

此の如きがドルバックの認識論である。吾々は、外界の物質が吾々の感覺器官に與へる刺戟によつて、外界の物質についての一定の感覺をもつ。かゝる感覺によつて吾々は外界の物質を認識する。この認識はもち



ろん完全なものではありえない。吾々はたゞ、外界の物質の「特質ならびに性質の或るものを認識する」にすぎない。その意味において、吾々は「物質の本體やその眞の性質」を知りつくすことはできない。だが、此の如く吾々の感覺を通して認識しうるところのもの以外に、何等かのものを想定することは、一の觀念的な宗教的な虚構である。彼れはいふ、「人は絶えず繰り返していふ、吾々の感覺はたゞ吾々に物の外殻を示すにすぎない、吾々の有限な精神で神を把握することはできない」と。よろしい、だがしかし、吾々の感覺は一度も吾々に神の外殻を示してくれないのである。……それが如何なる性質を具へてゐるようとも、吾々がそれについて何等の觀念をも有たないところの物は、つまり吾々にとつては存在しないものである。」外物は感覺を通して始めて吾々のために、現象となるのである。』もしも吾々の感覺器官が對象から何等の作用をも受けなければ、吾々はその對象につき何等の感覺・知覺・觀念をもちえない。對象が吾々のうちに生産するこれらの第一次的作用から、想像・判斷・反省・能働性の如き他の知的機能が發生し發展するが（それら總ての基礎には感覺が横たはつてゐる。）（テポリーン前掲書、河野・永田兩氏譯本、三五三頁。井上氏譯本、一五五頁。）

『人間は、自己の欲求と關りなく且つみづから意識することなくして、一定の體系に入り込み、彼れの行動を規定する諸原因により不斷に變化せしめられてゐる。彼れは有機的全體——彼れの本質を成すところの彼の諸性質を規定する・種々なる物質の獨特の結合——である。自然は理性をもたないが、しかしそれは、諸物質の結合からして叡智的と呼ばれるところの獨特の活動または能力を發展させることにより、自己の母胎から理性的本體を産み出すことができる。』かくて自然の母胎から生まれ出たところの「人間なる有機體は、感覺能力をもち思惟し行動するところの獨特の機械である。人々の一切の誤謬は、彼等が、人間は自然法則

から、獨立であるかの如く、彼れの肉體には非物質的な本體——靈魂——なるものが存在するかの如く、人間とは肉體と精神とから成るものの如く、想像してゐることから生じる。ドルバックはいふ、「人間は、彼れのうちに、彼れ自身からは異なつてゐるところの・神祕な力を賦與された・或る實體があると想像した。彼れは、彼れの諸器官に作用する眼に見ることのできる諸原因の性質とも異なり・またこれら諸器官そのものの性質とも全然異なるところの・諸性質をば、その實體なるものに歸屬せしめたのである。」だが、事實においては靈魂なるものは、たゞ或る能力に關聯して觀察される肉體そのものに外ならぬ。それは肉體と同時に變化を蒙るものであり、これを肉體と區別することは、たゞ抽象においてのみなしうるにすぎない。靈魂について云々するとき、吾々は腦髓または腦髓活動を、腦髓そのものから・従つてまた身體から・抽象するのである。哲學者たちはこの抽象物を獨立の實體にまで高めるのである。』（テポリーン前掲書、河野・永田兩氏譯本、三五—三五二頁。井上氏譯本、一三三—一三四頁。）吾々は後に至つて、これと同じ考がフョイエルバッハによつて高調されてゐることを、見るであらう。

『ドルバック自身は好き日まで生き延びることができなかつた。彼れは一七八九年に大革命の戸口で死んだ。だがこの革命の準備のために、彼れは恐らく他の何人よりも多くをなしたであらう。ブルジョアジーは自己の敵——貴族社會・僧侶社會・および彼等の×××を撃破した。しかしながら、ブルジョアジーは唯物論をばただ自己の敵との闘争において使用したにすぎない。それで政權にありつくや否やブルジョアジーは唯物論と無神論を投げ棄て、人民壓迫のために自ら教會と同盟を結んだのである。現在ではフランスのブルジョアジ



！は、世界的反動の支柱である。唯物論と無神論の旗幟の如き革命的傳統は、今やプロレタリアートに移つてゐる。そして恰もプロレタリアートの物質的解放が階級社會の完全なる止揚を意味する如く、彼等の精神的解放は宗教的および觀念論的偏見の完全なる清算と連絡してゐるのである。』(同上、河野・永田兩氏譯本、四一四頁。井上氏譯本、一九八—一九九頁。)

### その三 十八世紀の唯物論の缺陷

エンゲルスは、『反デューリング論』のなかでドイツの觀念哲學から近代唯物論への轉向を説ける際、次ぎの如く言つてゐる。

『從來のドイツ觀念論が全くの不合理だといふことに對する洞見は、必然的に唯物論へ導いた、だが注意せよ、それは十八世紀の全く形而上學的な専ら機械論的な唯物論へではなかつた。近代唯物論は、すべて從來の歴史を素朴革命的に、簡單に排斥することは反對して、歴史のうち人類の發展過程を見、かゝる發展過程の運動法則を發見することをその任務とする。十八世紀のフランス人にあつても、またヘーゲルにあつても、自然をもつて、ニュートンの教へた如き恒久的な天體や、リンネの教へた如き不變な種類の有機體や、から成るところの、狭い環のなかで循環運動をしてゐる不變的な全體として考へることが、自然に關する支配的な考であつたが、これと異なり、近代唯物論は、自然科学における近時の諸進歩を包括してゐるのであつて、それによれば、自然もまたその歴史を時間のうちにもつてをり、天體でも、また適當な條件のもとでそれらの天體の上に生活してゐる各種の有機體でも、何れも發生したり

消滅したりしてゐるのであり、假に循環といふ言葉が許されるにしても、それは無限にその外延を擴大しゆくものと考へられてゐる。二つの場合「歴史と自然との二つを指す——河上」の何れにおいても、近代唯物論は本質的に辯證法的であり、それはもはや他の諸科學の上に立つ哲學なるものを必要としないのである。』(『反デューリング論』、ドイツ本、一〇——一一頁。)

讀者の見られる通り、エンゲルスはこゝで十八世紀の舊唯物論を『全く形而上學的な専ら機械論的な唯物論』と特徴づけ、それとの對立において、近代唯物論(マルクス主義の唯物論)を『本質的に辯證法的』であるとしてゐる。すなはち前者は形而上學的であり、後者は辯證法的であるといふ點に、兩者の本質的な差異が横たはるのであり、そしてこの根本的な差異が、それらのものの歴史觀および自然觀の上に著しき相違を生みつけてゐるのである。私はこゝでその一斑を述べよう。

『一般にマルクス以前のすべての唯物論がさうであるが、十八世紀の唯物論の明白な弱點は、どのやうな進化的觀念をも全然もつてゐないといふ點にある。自然、道德あるひは歴史、これらものに向つて、哲學者たちは、同じ仕方で、同じ缺陷をもつて、非辯證法に、形而上學の見地から近づいた。こゝにドルバックが、地球および人間の起源についての信じうべき假説を見出すために、どんなに苦んでゐるかを見るのは、興味あることである。今日では進化論的自然科學によつて決定的に解決されてゐる諸問題も、十八世紀の哲學者たちにとつては解決不可能のものと見えたのである。』(プレハーフ『近代唯物論史』、榎本氏譯本、一〇——一一頁。)

私はこゝにドルバックが地球および人間の起源について試みた假説を引用することを控へよう。何故なれば、



自然科学の著しく進歩した今日から見れば、それらの假説の内容は吾々にとつて全く無意味であるから。ただ吾々は、ドルバックが、或る前提のもとでは、「人は矛盾を犯すことなく、種は不斷に變化すると信じていることができる」と言つてゐると同時に、また他の前提のもとでは、人間は「自然の突發的産物」と看做することもできると言ひ、かくて「一切を知ることが人間にはできない、人間の起源を知るといふことも人間にはできない」と言つてゐることを、附記すれば足るであらう。「すべてこれらのことは、今日の吾々には、殆ど信じられぬことのやうに思はれる。だが人は自然科学の歴史を忘れてはならぬ。「自然の體系」の公刊よりすつと後に、大學者キュービエが、自然科学における如何なる進化思想をも、熱心に攻撃したことを想起せねばならぬ。」

吾々にとつてより興味ある問題は、十八世紀の唯物論者の歴史観である。(吾々は今、たゞに自然に對してのみならず、歴史——人間社會——に對してもまた、徹底的に辯證法的唯物論を適用することにおいて成り立つたところの、マルクスの唯物史観を究明することを、本來のテーマとしてゐるのであるから、十八世紀における唯物論の弱點を吟味するにあつても、その歴史観に重きを置かねばならぬ。)

フランスの唯物論者は、その歴史観において、一の解決すべからざる矛盾に出喰はした。それは、彼等が一方においては、(唯物論者にふさはしく)人間をもつてその環境の産物であるとなすと同時に、他方においては(むしろ觀念論的な立場に轉じつ、)「世界を——すなはち人間の環境を——支配するものは意見である」となしてゐたためである。

彼等が人間をもつてその環境の産物であるとなしたことは、理解し易きことである。既に述べたやうに、

「フランスの唯物論者は、人間のあらゆる心的活動を、感覺の變形物と看做した。かういふ見地から人間の心的活動を觀察することは、人間のあらゆる表象・概念・および感情を、人間に對する環境の作用の結果として見ることである。彼等は、極めて熱心に、全く定言的に、絶えず次ぎのことを聲明した。曰く、人間およびその總ての見解および感情は、環境によつて、すなはち第一に自然・第二に社會によつて、造り出されるものである。」「教育」といふ言葉を斯かる環境からの影響の總體の意味に解釋して、エルベチウスは「人間は全く教育に依存する」と言つた。人間を環境の成果として見るこの見解は、フランスの唯物論者の改革的要求の主要なる理論的基礎であつた。事實、もし人間がその環境に依存するものであるならば、また人間が自己の性格のあらゆる性質を環境に負ふものであるならば、彼れはなかんづくその缺點を環境に負ふことになる。従つてもし吾々が、人間の缺點と闘はんとするならば、吾々は人間の環境を・特にその社會的環境を・適當な方法で變へなければならぬことになる。」(ブレイハノーフ『史的一元論』、川内氏譯本、五、六頁。)

しからば、この社會的環境——人間の社會的存在——は、如何にして變革されうるか？ この問題になると、フランスの唯物論者たちは、全く無力であつた。何故なれば、彼等は人間の社會的存在の變革に對してその唯物論的見解を徹底せしめることができず、歴史のうちに人間の意識的活動のみを見て、かゝる人間の意識から獨立して形成される社會的存在を把握せず、従つてそれが如何なる物質的動力によつて自然史的な變革過程を経つ、あるかを理解することができず、その當然の結果として、彼等は彼等本來の立場とは逆な觀念論的見地から、この問題に向はざるをえなかつたからである。例へばドルバックによれば、歴史は、何等の法則によつても規定されてゐないところの、多くの場合極めて悲むべき・出來事の無限の系列であつた。

強論  
と唯物論者  
のた。

人間の社會的存在が人間の意識活動を決定するのだから、意識活動は人間の社會的存在を決定する。



かくてエンゲルスの言葉を借れば、すべて従來の歴史は誤謬の歴史として「簡單に排斥」された。人間が斯かる不幸な歴史を描き來つた原因は、その誤謬、その偏見、その無智である。「人類が自分たちにとつて最も關係ある對象について有つてゐる甚しき無智……これが恐らく吾々の政治的および宗教的諸制度の不完全さの眞實の根源である。」今日まで「人類はその誤謬のため不幸にされてゐた」のである。かくてドルバックはいふ、「殆どすべての人は、勸善懲惡の神を信じてゐる。だが吾々は、どこの國においても、惡人の數が善人の數を遙に凌駕してゐるのを見る。今吾々が、かくも一般的な墮落の眞の根源を究めようとするならば、吾はそれを神學的觀念、それ自身のうち、「すなはち人間の意見のうち」——河上補見出すであらう、そして地上の様々の宗教が人間の墮落を説明するために發見した假裝的原因のうちには、それを見出さぬであらう。人間が墮落してゐるのは、殆どどこでも人間が惡しき政治に支配されてゐるからである。彼等は人間にふさはしい統治を受けてゐない、それは宗教が主權者を神として尊敬したからである。この責任解除を保證されそして自から墮落した主權者たちは、必然的に彼等の國民を不幸にしました惡人にせざるをえなかつた。人間は、不合理な主人のもとに服従してゐるかぎり、理性によつて導かれることは決してない。人間の理性は、欺瞞的な僧侶によつて曇らされては、何の役にも立たなくなる。」（ブレハーフ『近代唯物論史』、榎本氏譯本、七三—七四頁に引用するところ。）

此の如くにして、フランスの唯物論者は、すでに述べたる如く、一の解決すべからざる矛盾に出喰はした。すなはち、一方においては、人間は社會的環境の産物である。このことから、極めて論理的に、輿論は世界を支配するものでない、といふ結論が生まれてくる。他方において、社會的環境は輿論によつて、すなはち

人間によつて作られる。このことから、極めて論理的に、輿論は世界を支配するものであり、人間はその謬見のために不幸にされた、といふ結論が生じる。

かくの如く相對立した・外見上互に矛盾した・二つの命題を、一個の全體に統一することは、形而上學的見地からは絶対に不可能である。従つて「社會生活の様々の側面の交互作用、これこそが當時の哲學者たちが高翔することのできた・最高の最も哲學的な立場であつた。」だが、かゝる交互作用の認容のみをもつてしては、歴史は決して根本的に把握されえない。鶏は卵から生まれる、しかし卵はまた鶏から生まれる。卵が悪いから悪い鶏が生まれた、しかし悪い卵が出来たのは鶏が悪いからである。此の如くにして問題はいつまでも循環する。説明さるべき問題は、その問題の説明を他の問題へ移譲することにより、外見上一應は解決されるかに見える。しかし實際においては、解決さるべき問題が、たゞその姿を變へたにすぎない。

『だが、——ブレハーフはいふ——これよりも一層不愉快な事柄がしばしば生じる。人間は彼れを圍繞する社會的環境の産物である。ところで、この社會的環境の性質は、「政府」の行動によつて規定される。しかもその政府の行動・立法的活動は、人間の意識的・活動的領域に屬するものである。この活動はまたこの活動でそれを活動さすものの「意見」に依存する。かくて知らず識らずのうちに、「二律背反の一項(指定)が變化した。それはその昔の敵手すなはち反指定と全く同じものになつてゐる。』何故といふに、人はこの場合、「人間は社會的環境の産物であり、従つて意見は世界を支配するものでない」との命題から出發しつゝ、一定の迂路を経て、「意見は世界を支配する」との反對命題に到達してゐるからである。かくて「この二律背反の外見上の解消は、唯物論からの徹底的分離に外ならぬ。人間の頭腦は——周圍の社會的環境によつて與へられる印



象に從つて自らを構成するこの「白蠟」は——彼れがそれから印象を受取るころの環境の創造者に斷乎として改造される。』(ブレハーフ『近代唯物論史』、榎本氏譯本、八三頁)。かゝる意味において、十八世紀の唯物論者は、その唯物論を歴史——人間社會——の上に徹底せしめることができず、知らず識らずのうちに觀念論に逆戻りしてゐたのである。かくて彼等は、人間をば彼れを圍繞する社會的環境の成果と看做しながら、その環境の可變的性質を人間性の不變的性質によつて説明しつゝ、一の空想に陥る。ただし「人間性がもし不變的なものであり、そしてまた人間の根本的な性質を知つて、その中から倫理および社會科學の方面における數學的に確實な命題を導き出しうるならば、人間性の要求に完全に適應するところの・從つてまた理想的な社會組織となるところの・一定の社會組織を案出することは困難でなくなる」からである。後の空想的社會主義は、かゝる唯物論の基礎の上に生まれたものである。例へば、十九世紀の初頭イギリスに現はれた偉大な空想的社會主義者ロバート・オウエンの如きは、(たとひ彼れ自身は彼れの總ての意見を自己の獨創に屬すと意識してゐたとはいへ)、思想的には全く以上述べ來りたるが如きフランス唯物論の系統を引けるものである。

かくて唯物論の今後における發展のために残されてゐる主なる問題は、次ぎの如くである。

一、何よりも先づ形而上學的な立場が正揚され、それに代つて辯證法的な見地が採用されねばならぬ。それによつて、十八世紀の唯物論者たちを苦めた矛盾は、辯證法的に統一に齎らされるであらう。形而上學的な立場からは、たかく社會的環境(人間の社會的存在)と人間の意識との間の交互作用が認識されるに止ま

る。これら二つのもの——人間の社會的存在と人間の意識と——を動かす歴史の根本動力を(從つて人類の發展過程の運動法則を)發見することは、辯證法的唯物論の任務として残された。

二、唯物論は、歴史の上に、——人間社會の上に、——徹底的に押しひろげらるべきである。人間の社會的存在はそれ自身の運動法則によつて發展するものであり、それは人間の意識・意圖等々に依存せず、むしろ逆に人間の意識・意圖等々を規定する。不變なる人間性なるものは存在しない、それは社會的な歴史的な産物として、絶えざる變化を閱しつゝある。問題は、人間の社會的存在の發展過程を唯物論的に理解することにより、舊唯物論の自然主義的・個人主義的・機械論的・見地の代りに、歴史的・社會的・生物學的・見地を導入することである。

以下吾々は、順序を追うて、これらの諸問題が如何に解決されゆくかを見るであらう。

## 五 十九世紀のドイツにおける觀念論への批判者としての

### フォイエルバッハ

「自然および歴史における進化の問題に對するフランス唯物論の無力は、その哲學的内容を甚だ貧弱なものにした。……フランスの唯物論者は、その歴史觀においては、純然たる觀念論の見地——すなはち意見が世界を支配するとの見地——に立つてゐた。極めて稀には、歴史觀の上にも唯唯物論を徹底せしめようとする企が行はれたが、しかしそれは、或る氣まぐれな原子が「立法者」の頭腦の中に這入りこんで腦機能の錯亂を生ぜしめることにより、全世紀を通じての歴史的過程を變化せしめうる、といふやうな論題に没頭したもの



であつた。かゝる唯物論は、その實、宿命論であつて、しかも事件を豫見する餘地を言ひ換へれば思惟する個人の意識的な歴史的活動のための餘地を認めざるものであつた。そこで、社會的諸勢力の闘争に——この闘争においては唯物論が極左翼の恐るべき理論的武器であつたが——巻き込まれなかつた有能な人士にとつては、この學説が、無味乾燥な・曖昧な・失望に値する・學説に思はれたのも、無理はない。例へばゲーテの如きは、この學説にさういふ批評を下したのであつた。斯様な非難を受けないやうにするためには、唯物論は無味乾燥な抽象的議論をかなぐり棄て、自己の見地から「生きた生命」を具體的諸現象の複雑なる多種多様の連鎖を・理解し説明せねばならなかつた。が當時の状態では、唯物論には、この大問題を解決する力はなかつた。そこで觀念論的哲學がこの大問題を横取りしたのである。觀念論的哲學の發展における主要なる最後の環は、ヘーゲルの體系である。』(ブレハーフ『史的一元論』、川内氏譯本、一〇三—一〇五頁。)

このヘーゲル哲學は、プロシア王國の官學として、ドイツに繁榮した。そのことをエンゲルスは次ぎの如く叙述してゐる。『『イェルバハ論』、佐野文夫氏譯本、三頁。]

『十八世紀におけるフランスの場合と同じく、十九世紀におけるドイツの場合も、哲學上の革命が政治的崩壊を誘致した。だがこの兩の場合、どんなに遠つて見えたらう！ フランス人は、公認されてゐた學問全體と・教會と・時には國家とも公然の戦ひを行つた。彼等の著書は國外のオランダやイギリスで印刷され、それにまた彼等自身がしばしばいつバスチーユ牢獄にぶち込まれるか分からなかつた。これに引きかへドイツ人の場合は、大學教授で、國家から任命された青年の教師で、彼等の著書は公認の教科書で、おまけに全發展の終極的體系をもつて自負せしヘーゲル哲學は、謂はばプロシア王國の國有哲學の地位に經上がつ

てゐたのだ！』ところが、かゝる哲學のうちこそ、——當時の政府も、またこの哲學に最も頑強なる反對をなしてゐた自由主義者たちも、全く見抜くことのできなかつた——革命的哲學の萌芽が含まれてゐたのである。ヘーゲル哲學の體系は瓦解したが、謂はばその廢墟の中から、——ヘーゲル哲學の方法が唯物論と結びつくことにより、——プロレタリア哲學としての辯證法的唯物論が生まれた。觀念論的辯證法は、顛倒されることにより、唯物論的辯證法として更生したのである。

もちろん斯かる轉廻は一朝一夕に行はれたのではない。ヘーゲル哲學の流行は『數十年續いた一の凱旋行列であつた。しかもこの凱旋行列は、ヘーゲルが死んでも少しも靜まらなかつた。それどころか、一八三〇年から一八四〇年の間といふものは、「ヘーゲル風」が獨占的にはびこつて、ヘーゲル反對者すら多かれ少かれこれに感染したのである。まさにこの時代には、ヘーゲルの思想は、あるひは意識的にあるひは無意識的に、ありとあらゆる科學に侵入し、謂はゆる教養ある人たちの思想の糧となつてゐる通俗本や日刊新聞の中にも充滿してゐたのである。だが、全線にわたる斯かる勝利は、やがて内部における闘争の序曲に外ならなかつた。元來ヘーゲルの總學説は、實際問題に關する種々様々な黨派の見解を包容するに充分な餘地を存してゐた。そして當時のドイツ理論界において、實際的問題といへば、何よりも先づ宗教と政治との二つであつた。ヘーゲルの體系に主點をおいたものは、宗教および政治の兩面において可なり保守的である理由があつた。これに反し、ヘーゲルの辯證的方法を主要と認めたものは、宗教上にも政治上にも極度の反對派に屬する理由があつた。一八三〇年代の終りにあたつて、ヘーゲル學派における分裂が益々明瞭になつた。一八四二年の「ライン新聞」時代になると、青年ヘーゲル派は扮装を棄て、赤裸々に新興急進ブルジョアジ

その後の哲學は、これに反し、ヘーゲルの辯證的方法を主要と認めたものは、宗教上にも政治上にも極度の反對派に屬する理由があつた。一八三〇年代の終りにあたつて、ヘーゲル學派における分裂が益々明瞭になつた。一八四二年の「ライン新聞」時代になると、青年ヘーゲル派は扮装を棄て、赤裸々に新興急進ブルジョアジ



一の哲學たる正體を現はし、たゞ檢閲官を瞞着するためのみ哲學といふ隠れ蓑を用ひたにすぎなかつた。しかし當時は、政治といへば荆棘だらけの原野だったので、勢ひ主要闘争は宗教に向けられた。それにまたこれは、特に一八四〇年以降は、間接に政治的闘争でもあつたのである。』（エンゲルス『フョイエルバッハ論』、佐野文夫氏譯本、二九―三三頁）。この場合吾々にとつて重要なことは、『最も斷乎たる青年ヘーゲル派の一團が既成宗教に對する戦ひの實際上の必要に迫られて、英佛の唯物論に逆轉したことである。』と、ここで、一たび唯物論の見地に立たんか、彼等は彼等自身の學派の體系と矛盾せざるをえざることになつた。何故といふに、唯物論は自然を本源的なものとなし、觀念を派生的なものとなすに反し、ヘーゲルの體系にあつては、謂はゆる絶対觀念が本源的なものであり、自然はかゝる絶対觀念の「外化」によつて生ずる派生的なものに外ならずとされてゐるから。かういふ矛盾の中を彼等は右往左往してゐた。

『この時にあたつてフョイエルバッハの「キリスト教の本質」が現はれた。』——エンゲルスはいふ——『この書は唯物論を文句なしに再び王座に据ゑることによつて、右の矛盾を一舉に粉碎したのである。……當時この書が齎らした救ひの力がどんなものであつたかは、自らこれを體驗したものでなければ想像がつかぬ。世を擧げてこれに感激した。吾々はみな一時フョイエルバッハ信者だつた。如何にマルクスが熱情的にこの新しい見解を迎へたか、そして如何に甚しく彼れが——これに對する批判は保留したに拘らず——この見解に影響されたかは、「神聖家族」を見れば分かる。』（エンゲルス前掲書、佐野氏譯本、三六―三七頁）。

【註】 フョイエルバッハの『基督教の本質』は、今年（昭和四年、一九二九年）五月に木暮浪夫氏によつて譯出された。なほ彼れの『哲學の改革に關するテーゼ』については、早くから恒藤恭氏の良譯がある。

フョイエルバッハの唯物論は、吾々が先きに見た英佛唯物論の成果を承繼せるものである。そしてマルクスおよびエンゲルスの唯物論は、直接には、このフョイエルバッハの唯物論の深化から生まれた。ブレハーノフのいふ如く、『マルクスおよびエンゲルスの唯物論的見解は、フョイエルバッハの哲學の内面的論理によつて規定された方向に發展したものである。』これ吾々が先づ順序として、こゝにフョイエルバッハの唯物論に關する根本的見解を一瞥せんとするゆゑんである。

【註】 フョイエルバッハがマルクス主義の發展に寄與した影響については、恒藤恭氏が、大正十二年（一九二三年）二月發行の『同志社論叢』にフョイエルバッハの『哲學の改革に關するテーゼ』を記載された際、その前置きとして次ぎの如く述べられた。

フョイエルバッハがマルクス主義の發展に對して與へた深い影響については、次ぎのやうなブレハーノフの言を用するに止めたい。——『マルクスがヘーゲルの法律哲學の批判と共に唯物史觀の精練に着手したのは、全くフョイエルバッハがすでにヘーゲルの思辨的哲學をば批判的に説明しておいたからである。』（恒藤譯、ブレハーノフ『マルクス主義の根本問題』一九―二〇頁）。——『一八四二年に刊行されマルクスに強い感化を及ぼした「哲學の改革に關する提言」において、フョイエルバッハは論じて曰く、「實有は主語であり、思惟は客語である。思惟は實有から出るが、實有は思惟から出ない。實有は自己から出て、自己によつて存する……實有はその理由を自己の裡に有つ」。實有と思惟とに關するこの見解は、マルクスおよびエンゲルスにより彼れらの唯物史觀の根柢に据ゑられた。それはすでにフョイエルバッハが要點においては完了してゐたところの・ヘーゲルの唯心論の批判の・最も重要な結



果である。『同上、一一一—一三頁』。『マルクスの認識論が、眞直ぐにフイエエルバッハのそれから由來せること、または、マルクスによりて天才的な仕方て深められたフイエエルバッハの認識論を提示せることは、これをみとめなければならぬ。』同上、二二頁。『『さればフイエエルバッハの哲學の中から如何に顯著なる部分が科學的社會主義の創設者の世界觀のうちに移入されたかを知らない人々には、マルクスやエンゲルスの唯物論的見解は不分明なものと考へられたのであつた。』同上、二七頁。』

思惟の存在に對する關係についてのフイエエルバッハの提言は、『哲學の改革に關するテーゼ』にあつては、主としてその終りの部分に掲げられてある。私は茲にそのうちの一二句を先づ引用する。『『著作集』、一八四六年版、ドイツ本、二六二、二六四、二六三頁。恒藤恭氏譯『マルクス主義の根本問題』、大正十三年版、附録三六、三九、三七頁。』

『ヘーゲルの哲學を棄却しないものは、神學を棄却しないものである。自然は實在は觀念により定立される、といふヘーゲルの理説は、——自然は神により物質的なるものは非物質的なる即ち抽象的なるものにより創造された、といふ神學の理説の合理的表白に外ならぬ。』

『自然は存在から別たれない本質(Wesen)であり、人間は存在から別たれた本質である。別たれない本質は、別たれた本質の基礎である、——だから自然は人間の基礎である。』

『思惟の存在に對する眞正の關係は、存在は主語であり、思惟は客語であるといふにある。思惟は存在から出るが、存在は思惟から出ない。』(恒藤恭氏譯文による)

なほレーニンは、その著『唯物論と經驗批判論』のうちに、次ぎの如く述べてゐる。

『ルードキヒ・フイエエルバッハは、周知の通り、唯物論者であつた、そして彼の諸著作を通じて、マルクスとエンゲルスとは、これまた周知の通り、ヘーゲルの觀念論から彼等自身の唯物論的哲學に移つたのである。R・ハイムへの反駁のうちにフイエエルバッハは書く、——

『人間の、ないし意識の、對象とならない自然は、いかに、思辨哲學にとつて、ないし少くとも觀念論にとつて、カント的物それ自體であり、現實性なき抽象であらうが、しかしこの自然が取りも直さず觀念論の破綻を齎らすものである。自然科学は、少くともその現在の見地からは、必然的に吾々を導いて、次ぎの點にまで——すなはち人間存在の諸條件がまだ備はらなかつた當時、自然すなはち地球がまだ人間の眼や人間の意識やの題目でなかつた當時、自然はまさしく絶対に非人間的な存在であつた、といふ點にまで——到達させるのである。……』

見よ、フイエエルバッハは、唯物論と觀念論とに關して、人間以前の自然の視點から、かくの如く考察してゐる。『『唯物論と經驗批判論』、ドイツ本、六八、六九頁。『レーニン著作集』、白揚社版、六八、六九頁。』

右に引用されたるフイエエルバッハの言葉を分かり易くすれば、つまりかうである。——自然科学の教へるところによれば、地球には最初から生物が存在してゐたわけではない、長い、長い進化の過程を経て始めてこの地球上に生物が発生し、その生物がまた長い、長い進化の過程を経て、そのなかから人間が発生したのである。だから人間も居らず、従つて人間の精神なるものも存在してゐない遙に以前から、地球そのものは存在してゐたのである。このことは、地球そのものが決して人間の精神から生まれ出たものでないことを、簡單明瞭に、争ふ餘地なく證明する。すなはち物質は精神から派生したものでなく、物質から精神が派生したの

大分なこは、思惟行(ていこうが) (ていこうが) 諸君(しよくん) 本(ほん) 方(かた) 大(だい) 分(ぶん) な(な) こ(こ) は(は)、 思(し) 惟(い) 行(こう) (ていこうが) (ていこうが) 諸(しよ) 君(くん) 本(ほん) 方(かた)

大分なこは、思惟行(ていこうが) (ていこうが) 諸君(しよくん) 本(ほん) 方(かた)



である。——かういふのが、フイエールバッハの説明である。それについて、レーニンは、更に次ぎの如くにも述べてゐる。

『自然科学は、嘗て地球が、人間もまた一般に如何なる生物もその上に棲息せずまた全然棲息しえなかつた状態で、存在してゐたことを、實證的に主張してゐる。有機的物質(生物)は、より後代的な現象であり、長期にわたる進化の結である。……物質は第一次的のものであり、思想・意識・感覺は極めて高度なる進化の産物である。此の如きが唯物論的認識論であり、この土臺の上に自然科学は本能的に立つてゐる。』(『唯物論と經驗批判論』、ドイツ本、五九頁。河上譯『レーニン・辯證法的唯物論について』、一二頁)。

しからば思惟(意識、精神)は如何にして存在(自然、物質)から生まれるか?

フイエールバッハはこれに答ふるに、脳髓の人間學的解釋をもつてする。彼れはいふ、『唯物論も(フイエールバッハ)心理學も、眞理ではない、眞理はただアントロポロギー(人間學)である、感覺の・直觀の・見地のみが眞理である。何故なら、たゞ此の見地のみが余に全體性と個性とを齎らすから。靈魂が考へたり感じたりするのではなく、——何故なら、靈魂とは、人格化され且つ實在化され、一の本體(Wesen)にまで轉化されたところの、思惟の・感じと意欲との・機能または現象に外ならぬから、——また脳髓が考へたり感じたりするのでもない、——何故なら、脳髓とは一の生理學的抽象であり、全體性から引き裂かれた・頭蓋や顔や肉體一般から分離された・それ自身に固定された・器官だから。けだし脳髓は、それが人間の頭および身體と結合されてゐる

間のみ、思惟器官である』。(『肉體と靈魂との二元論に抗して』、前掲著作集、第二卷、一八四六年版、三六二頁。最後の傍點のみ新たに加ふ)。思惟は、一個の物としての人間のからだの屬性である。人間のからだは『その部の多様性に拘らず「一つの物」であり、一つの個性的な有機的な統一である。かゝる有機的統一が表象および感覺の原理である。もちろんそれは分解されうる、だが斯かる分解と共にそれは有機的な生きた身體たることを已め、それはもはや、ありしところのものではなくなる』。(同上、三五七—三五八頁)。また「もちろん私は想像力によつて私の脳髓を客體と觀念し、かくて之を私から區別することはできる、だがこの區別は單に論理的であり、またはむしろ想像的であり、決して實在的ではない』(『私自身から區別された脳髓は、たゞ考へられたもの、觀念されたもので、現實の脳髓ではない』。そんな生理學的抽象物が、考へたり感じたりするのでない。思惟するものは、思惟の機關としての脳髓をそれ自身のうちに不可分離的に包有するところの・一個の統一された物質的存在としての・人間である。尤も心理的には、すなはち思惟する常人にとつては、思惟は脳髓活動ではない。『私は、私が脳髓をもつといふことを全く知らずに、思惟することができ』。『吾々の意識と感情とに齎されるものは、たゞ結論であつて、前提ではなく、たゞ結果であつて、有機體の過程ではない』。だから私は當然に、思惟を脳髓活動から切り離すことになる。『だが、思惟が私にとつて脳髓活動でなく、むしろ脳髓から切り離された獨立の活動だからと言つて、それがそれ自身においてもまた脳髓活動でないといふわけにはゆかぬ。否な、逆である。私にとつてまたは主觀的に、一の純粹に精神的な・非物質的な・非感覺的な・活動たるものは、それ自身にはまた客觀的には、一の物質的な・感覺的なものである』。かくて主體と客體との同一性は、特に脳髓活動と思惟活動とに妥當する。『脳髓活動は吾々自身



に基礎づけられ条件づけられてゐる最高の活動である、——それゆゑにそれは、もはや吾々から區別しては知覺されえないところの一活動である。かゝる最高の活動としての腦髓活動においては、『恣意的な・主觀的な・精神的な・活動と、恣意的ならざる・客觀的な・物質的な・活動とが、同一であり、區別されえない』。かくて吾々の意識にとつては、思惟における主觀的活動と客觀的活動との對立が消失するがゆゑに、『正にそれゆゑに、それは絶対に主觀的である』。(同上、三四九—三五二頁)。

かくてフョイエルバッハの意見に従へば、余は余に對しては『我』であり、同時に他人に對しては『汝』である。余は主體であり、同時に客體である。『我ではない、否な！ 區別されてゐながら而かも不可分離的に結合されてゐるところの・我と汝、主觀と客體とが、思惟と生との・哲學と生理學との・眞の原理である』。(Ueber Spiritualismus und Materialismus. 前掲著作集、第十卷、一八九〇年版、一七六頁)。「思惟は實在の原因ではなくてその結果であり、または、より精密には實在の一屬性である。余が感覺し思惟するのは、客觀に對向する主觀としてではなく、主觀—客觀 (Subjekt: Objekt) としてであり、實在的・物質的・存在としてである。『客觀は余にとつて感覺の對象であるのみでなく、また感覺の基礎、條件、前提である』。客觀世界はひとり吾々の外部にのみ存在するものではない、『皮膚の内部にも』また客觀世界がある。人間は單に自然の一部分であり、實在の一部分である、されば人間の實在と思惟とは、決して相對立することをええない。空間および時間は思惟にとつてのみ存在するものではない。兩者はまた實在の形式である。兩者は余の直觀の形式であるが、それは「余がそれみづから空間的および時間的存在であり、且つ斯かるものとしてのみ感覺し・直觀し・思惟するの故をもつてのみ」である。一般に實在の法則はまた思惟の法則である』。(プレハーンノフの説明)。

『マルクス主義の根本問題』、恒藤恭氏譯本、一八一—一九頁による)。

## 六 マルクス主義における哲學上の根本的見地としての唯物論

吾々が前節において見たるところは、意識と存在との關係についての・フョイエルバッハの根本的見解である。吾々はそこで、『思惟は存在から出るが、存在は思惟から出ない』といふこと、觀念哲學によつて一の獨立的存在にまで高められてゐるところの・靈魂または精神なるものは、人間の肉體と不可分離的に結合されてゐる腦髓の諸機能を抽象して之を人格化したものに外ならぬといふこと、これらのことがフョイエルバッハによつて主張されてゐるのを見た。しかもこれらの主張は、すでに吾々が第三節および第四節で述べたやうに、十六世紀のオランダ、十七世紀のイギリス、および十八世紀のフランスにおいて、ブルジョア革命(封建的束縛の打破)の進行につれ嘗て勃興した——そしてブルジョア革命の徹底的完成への進行の中断と共にその發展を中断された——思想であり、それを今フョイエルバッハは、ドイツにおける觀念哲學への反抗に際し、再び手に取り上げることにより、唯物論のプロレタリア的發展への端緒を啓いたわけである。

これらフョイエルバッハの根本的見解が、そのまゝ、マルクスおよびエンゲルスによつて採用され、『それが彼等の哲學の根柢となつたことは』——プレハーンノフの言へる如く、『エンゲルスの「フョイエルバッハ論」および「反デューリング論」の兩著述に徴して、最も明瞭に證示することができる』(『マルクス主義の根本問題』、前掲譯本、一二頁)。しかもこのことが、正に彼等をして——後に述べるであらう如く——ヘーゲルの辯證法

読者！フョイエルバッハの  
哲學の最後の意味を



を顛倒するをえせしめた前提である。「けだし思惟が存在を制約するのではなくて、存在が思惟を制約するのである」といふフイエエルバッハの命題を、正當と信するものでなければ、ヘーゲルの辯證法を顛倒せしめることは、できないからである。(同上譯本、四五頁)。唯物史觀の根本的命題たる「人間の意識が彼等の存在を規定するのではなく、むしろ逆に、人間の社會的存在が彼等の意識〔社會的意識〕を規定するのである」といふことも、フイエエルバッハの「思惟は存在から出るが、存在は思惟から出ない」といふ一般的命題の特殊な場合を形成するものに外ならぬ。今吾々が本節において明かにせんとするところは、前節において述べた限りにおけるフイエエルバッハの根本的思想が、如何にマルクスおよびエンゲルスによつて承繼されてゐるかといふ點である。なほマルクスおよびエンゲルスの主張した唯物論的見解は、すべてまたレーニンによつて承繼され闡明された。吾々は本節の終りにそのことをも附言するであらう。

【註】フイエエルバッハとマルクスおよびエンゲルスとの關係につき、プレハーノフは次ぎの如く述べてゐる。(同上譯本、三六一三七頁。傍點は新たに加ふ)。

「マルクスおよびエンゲルスは一時はフイエエルバッハの追隨者であつたといふ場合に、往々これによつて、彼等の世界觀はその後變化して、フイエエルバッハのそれから全然分離したといふことを、言ひ表はさんと欲するものがある。……かくの如きは甚しき謬見である。マルクスおよびエンゲルスはフイエエルバッハの追隨者たることを止めたとは云ふものの、彼等は以前と同じくフイエエルバッハの哲學の極めて重要な部分に共鳴してゐたのである。……思惟が實在を規定するのではなくて、實在が思惟を規定するのであるとの思想は、フイエエルバッハの一切の哲學的根思想の根柢に存してゐるのであるが、同一の思

想は、マルクスによつて唯物史觀の基礎に捉えられた。マルクスおよびエンゲルスの唯物論は、フイエエルバッハのそれよりは遙に發達せる理論を提示してゐるけれども、彼等の唯物論的見解は、フイエエルバッハの哲學の內面的論理によつて規定された方向において發達したものである。されば、フイエエルバッハの哲學のなかから如何に顯著なる部分が、科學的社會主義の創設者の世界觀の裡に移入されたかを知らない人々にとつては、マルクスやエンゲルスの唯物論的見解は不分明なものと考へられたのであつた。」なほ右に引用したるプレハーノフの文章中に指摘してあるやうに、マルクスおよびエンゲルスの社會に關する唯物論的見解(唯物史觀)は、「フイエエルバッハの哲學の內面的論理によつて規定された方向において發達したものである」。存在と意識との關係についてのフイエエルバッハの見解は、マルクスおよびエンゲルスによつて、そのまゝ、社會の上に移された。フイエエルバッハが意識から獨立せるものとして存在を認めたと如く、マルクスおよびエンゲルスは社會的意識から獨立せるものとして社會的存在を認めた。そしてそこに唯物史觀の核心が存するのである。吾々はそのことを後に至つてなほ委しく見るであらう。こゝにはレーニンの次ぎの言葉を引用するに止めておく。

「唯物論一般は、人間の意識、感覺、經驗、等々から獨立の客觀的に實在的な存在を(物質を)認める。史的唯物論〔唯物史觀〕は、人間の社會的意識から獨立の社會的存在を認める。意識は、この場合、前の場合と同じやうに、たゞ存在の反映にすぎない、よく行つては正しい(適當な、理想的に正確な)反映である。人々は、客觀的眞理から遠ざかることなしには、ブルジョアの反動の虚言の抱擁に陥ることなしには、この渾一的に出來てゐるマルクス主義の哲學から、たゞの一つの根本的前提をも、たゞの一つ



の本質的部分をも、取り去ることはできないのである。』(『唯物論と經驗批判論』、ドイツ本、三三二頁。河上譯『レーニン・辯證法的唯物論について』、六三—六四頁)。

レーニンは次ぎの如く言つてゐる。『マルクスおよびエンゲルスも……一般的には進歩的な知識階級の間に・特殊的には勞働者の圈内において・唯物論が優勢だつた時代に、哲學の領域に踏み込んだのであつた。それゆゑに、マルクスおよびエンゲルスが、その全注意を、舊いものの繰返しではなく、唯物論の眞剣な理論的發展に・歴史へのその應用に・すなはち唯物論哲學の建築を頂上まで完成することに・向けたのは、極めて自然である。彼等が認識論の領域において、フイエエルバッハの誤謬を訂正し、……勞働者の圈内に最も廣く讀まれてゐる通俗的な著述家たちに特に缺けてゐるところのもの、すなはち辯證法を強調することに、自らを限つたのは、全然自然である。』(『唯物論および經驗批判論』、ドイツ本、二四〇頁。河上譯『レーニン・辯證法的唯物論について』、五九頁)。此の如く、マルクスおよびエンゲルスは、その全注意を舊いものの繰返しに向けはしなかつた。彼等はフイエエルバッハの誤謬を訂正する等々の仕事に、自らを限つた。しかし彼等の唯物論的見解のなかへは、實際のところ『フイエエルバッハの哲學のなかから極めて顯著なる部分に移入された』のである。だが、以上の如き『歴史的條件を多少でも具體的に思ひ浮べる』ことをしない人々にとつては、『マルクスやエンゲルスの唯物論的見解は不分明なものと考へられた』のである。私は今その點をフイエエルバッハとの連絡において明かならしめようとするのである。

私は引川文の殆ど大部分をエンゲルスの『反デューリング論』および『フイエエルバッハ論』から取るであらう。第一にエンゲルスの『反デューリング論』は、(それには一八七八年七月十一日づけの第一版への序文が附せられてゐる)、マルクス主義の全體に關する纏つた著述として最も注意すべきものの一つである。その點については、エンゲルス自らが、一八八五年度の序文において、次ぎの如く述べてゐる。

『この書で批評したデューリング氏の「體系」は、非常に廣汎な理論的領域に擴がつてゐる。私はそれをどこまでも追うて行つて、彼れの見解に私の見解を對立せしめることの、必要を感じた。そのために消極的な批評は積極的な内容をもつものとなつた。論戰は、マルクスおよび私によつて主張された辯證法的方法および共產主義的世界觀の・多かれ少かれ纏つた叙述に變はつた。しかもそれは可なり多くの領域においてである。かゝる吾々の觀方は、最初マルクスの「哲學的貧困」において、また共產黨宣言において、世に問はれて以來、それが「資本論」の出現このかた加速度的な速度をもつて絶えずその勢力範圍を擴大し、今や遙にヨーロッパの限界を乗り越えて、苟くも一方にはプロレタリアがをり他方には顧慮するところなき科學的理論家がをる限りの總ての國々において、承認と支持とを見出すに至りしまでに、優に二十ヶ年にわたる潜伏期(Inkubationstadium)を經過したのである。かやうなわけで、今では多くの關係において無對象となつてゐるデューリングの文章に對する論戰をも、それに關聯して述べられてゐる積極的な説明が欲しいために、これを我慢しようとするほど、この問題に大きな興味をもつてゐる公衆があるらしいのである。』(ドイツ本、前付、一二頁。河野・林兩氏譯文、『マルクス・エンゲルス全集』第十二卷、二〇〇頁參照。私の譯文は、『二十ヶ年にわたる潜伏期』に重きをおく點において、兩氏の譯文と、少し



意味の取り方が違つてゐる。

こゝにエンゲルスがいふところの『優に二十ヶ年にわたる潜伏期』のために、『マルクスやエンゲルスの唯物論的見解は不明なものと考へられた』ことがありうるのである。だが吾々がもしこの『反デューリング論』を注意深く讀むならば、マルクスおよびエンゲルスの唯物論的見解はそこに充分に明かにされてゐることを發見するであらう。

なほエンゲルスは、前掲の言葉に續いて、更に次ぎの如き注意をしてゐる。『因にいふ、こゝに述べられた考へ方は、その大部分はマルクスによつて樹立されたものであり、極めて少部分が私によつてなされたのであるから、この私の叙述もマルクスに知らさずして爲したのではないことは勿論である。私はすべての原稿を印刷前に、マルクスに讀みかかせた、云々』。(河野・林兩氏譯文、前掲書、二〇一頁)。

マルクス主義の哲學的根柢を知るために、『反デューリング論』が如何に重要な價值を有するかは、以上の引用によつて明かであらう。なほ吾々は、これと同様なことを、エンゲルスの『フイエルバッハ論』(全體の原名は『ルードキッヒ・フイエルバッハとドイツ古典哲學の終末』)について言ひえられる。それはまた、エンゲルス自身が、その序文(一八八八年)において、吾々のために注意せるところでもある。彼れは一八四五年にマルクスと共同して筆を執つた哲學上の論文が遂に公刊の運びとならなかつたことを述べた後、——その論文は近年ロシアで編纂された『マルクス・エンゲルス全集』第一卷のうちに收めてある『ドイツ・イデオロギー』を指すのである、——次ぎの如く言つてゐる。

『爾來、吾々兩人のうちの何れもこの題目に立ら戻る機會なくして、四十有餘年の歲月が流れ、そして

マルクスは死んでしまつた。ヘーゲルに對する吾々の關係については、所々で發表してきたが、今まで遂に總括的に説いたことはなかつた。それにまた、實に幾多の點でヘーゲル哲學と吾々の見解との中間點を成してゐるフイエルバッハには、爾來一度も立ち戻つて論じてはをらぬ。

『しかるに、その間に、マルクスの世界觀は、ドイツおよびヨーロッパの境界をはるかに越えて、文明世界のあらゆる國語のうちにその代辯者を見出してきた……

『かういふ事情のもとに、予はヘーゲル哲學に對する吾々の關係、ヘーゲル哲學からの吾々の出發と分離とを、簡單に纏めて述べる必要になつたと思つた。同様にまた、後期ヘーゲル派哲學者の中でも、取り分けフイエルバッハが、吾々兩人のストルム・ウント・ドラング時代(青春期)にわたつて吾々に與へた影響を充分に承認することが、まだ果されずにある名譽のやうに思へた。かくて予は「ノイエ・ツァイト」編輯部が、フイエルバッハに關するシュタルケの書物の批評を予に請うたとき、よゝこんでその機會を捉へた、云々』。(以上、佐野文夫氏の譯文による。同氏譯『フイエルバッハ論』、四一六頁参照。阪本勝氏の譯本は『ルードキッヒ・フイエルバッハと獨逸古典哲學の終末』と題し、『マルクス・エンゲルス全集』第十二卷、八七七頁以下に收む。)

さて「誰でも」反デューリング論」や「ルードキッヒ・フイエルバッハ論」をほんの少し注意して讀むものは、エンゲルスが、物と人間の頭腦、吾々の意識、思惟等におけるその映像とについて、語つてゐる夥しき實例を見出すであらう。(レーニン)。



私はこゝにその二三の例を挙げて見よう。

『物およびその思想的映像たる概念……』。『反デュリング論』、ドイツ本、六頁。河野・林兩氏譯文、『マルクス・エンゲルス全集』、第十二卷、二二二頁。

『世界全體の・世界の發展および人類の發展の・ならびにかゝる發展の人間の頭脳内に於ける映像の・精確なる叙述は云々。』(同上、八頁。同上譯本、二二二頁)。

『思惟はこれらの原則(こゝで問題とされてゐるのは、すべての認識の根本原則である)を何處から得るのか? 自分自身からか? 否な……これらの諸形態(思惟によつて吾々の認識するところの存在の・外界の・諸形態)は思惟が決して自分自身から創造し導き出し得るものでなく、まさしく外界からのみ創造し導き出しうるにすぎない。……原理は自然や人間の歴史やに適用されるのではなくして、それらから抽出されるのである。自然や人間世界が原理によつて律せられるのではなくして、原理はそれが自然および歴史と一致するかぎりにおいてのみ正しいのである。これが事物の唯一の唯物論的な観方であり、これと反対なデュリング氏の観方は觀念論的である。それは、事物を全然顛倒して、現實の世界を思惟から世界以前から永劫に存在してゐるとされる何等かの圖式、計畫、もしくは範疇から構成するのである——恰もヘーゲルの如くに。』(同上、二二頁。同上譯本、二二二—二二三頁)。

およそ以上例示したるが如き諸表現を見るならば、エンゲルスが存在を根源的なものとなし、思惟を派生的なものとなしてゐることは、すでに明かである。そしてそれは、フォイエルバッハが『思惟は存在から出るが、存在は思惟から出ない』と言つてゐるところのものと、全く同一の見地である。私はそのことを更に確める

ために、『フォイエルバッハ論』から若干の言葉(先きに引用したものと一部分重複するが、こゝにはその前後を一纏めにして)引用しておかう。

『この書(フォイエルバッハの「キリスト教の本質」を指す——河上)は、唯物論を文句なしに再び王座に据ゑることによつて、右の矛盾(ヘーゲルの觀念論的哲學に含まれてゐた矛盾——河上)を一舉に粉碎したのである。自然は一切の哲學から(一切の意識からと言ひ換へても可い——河上)獨立に存在する。それは、それ自身自然産物たる吾々人間が、その上で發育してゐるところの基礎である。自然と人間とを外にしては何物も存在しない、そして吾々の宗教的空想が創造した人間以上の本質なるものは、吾々自身の本質の空想的な反射に外ならぬ。かくて咒縛は解かれた、「體系」は粉碎されて拋棄され、矛盾はたゞ構想の中のみ存在するものとして解決された。——この書が吾々を矛盾から解放した力がどんなものであつたかは、自身でこれを経験したものでなければ想像がつかぬ。世を擧げて感激した、吾々はすべて一時フォイエルバッハ信者だつた。マルクスが如何に熱心にこの新たな見解を迎へたか、そして彼れが如何に甚しく——一切の批判的保留にも拘らず——これに影響されたかは、「神聖家族」を見れば分かる。』(『フォイエルバッハ論』、ドイツ本、一〇—一一頁。佐野文夫氏譯本、三六—三七頁。阪本勝氏譯文、『マルクス・エンゲルス全集』、第十二卷、八八七頁)。

フォイエルバッハ哲學の如何なる部分がマルクス主義のうちへ導入されたかは、右によつて明かであらう。なほエンゲルスは同じ著作において、次ぎの如く言つてゐる。(これも前すでに引用したところであるが、こゝでは前に引用した部分よりもより多くの部分を、重ねて引用する。)



「すべての哲學の・殊に近代哲學の・基礎的大問題は、思惟と存在との關係に關する問題である。……思惟の存在に對する・精神の自然に對する・關係についての問題、全哲學のこの最高問題は、すべての宗教に劣らず、その根柢を野蠻時代における狹隘無智な諸觀念のうちには有つてゐる。だがそれが初めて充分の明確さで提供され、初めてその全意義を獲得するに至つたのは、ヨーロッパの人類がキリスト教的中世の永い冬眠時代から醒めた時であつた。存在に對する思惟の位置に關する問題、……精神と自然と何れが本源的であるかとの問題、——この問題は、教會の意に逆らつて、神が世界を創造したのか・それとも世界は永劫の昔から存在してゐるのか・といふ點にまで尖鋭化した。

『この問題が如何に答へられるかに従つて、哲學は二大陣營に分裂した。自然に對する精神の本性性を主張し、従つて結局において何等かの種類の世界創造を認容する人々は、……觀念論の陣營を形成した。自然を本源的なものと見る他の人々は、唯物論の種々なる流派に屬してゐる。』(ドイツ本、一三一—一四頁。佐野氏譯本、四一—四五頁。阪本氏譯文、前掲書、八八—八九頁)。

この場合エンゲルスがマルクスおよび彼れ自らを、自然を本源的なものと見る唯物論の流派に屬せしめたことは言ふまでもない。彼れは同じ著書の後の節において、ヘーゲルの辯證法が事態を逆立ちせしめてゐたのを彼等の手によつて顛覆せしめたことを述ぶるにあたり、更に次ぎの如く言つてゐる。

『吾々は、(ヘーゲルの如く)現實的な物を絶對的觀念のあれやこれやの段階における映像と觀る代りに、吾々の頭の觀念をやはり唯物論的に現實的な物の映像と觀た。……これと共に、觀念の辯證法そのものは、現實世界の辯證法的運動の意識的反射にすぎざるものとなり、頭で逆立ちしてゐたヘーゲルの辯證

法は再び脚で立つやうにされたのである。』(同上ドイツ本、三八頁。佐野氏譯本、一一〇頁。阪本氏譯文、前掲本、九〇六頁)。

私は先きに『反デューリング論』の中にある『物およびその思想的映像たる概念』といふ言葉を指摘しておいたが、吾々はこの『フェイエルバッハ論』の中にも、例へば『吾々の頭脳内における物の思想的映像たる概念』なる言葉を見出す。(同上、ドイツ本、三九頁)。

エンゲルスによれば、『生活とは蛋白質の存在の仕方であり、そしてその存在の仕方は斯かる物體の化學的構成要素の不斷の自己更新をその本質とする。』(『反デューリング論』、ドイツ本、七四頁。河野・林兩氏譯文、『マルクス・エンゲルス全集』第十二卷、二六四頁)。そして『感覺なるものは、今日までまだ充分に知られてゐない一定の蛋白質の一屬性である。この問題につき、レーニンは次ぎの如く言つてゐる。『この見解(唯物論者の眞實の見解)の本質は、吾々が感覺を物質の運動から導き出したり或ひは物質の運動に還元したりすることなく、むしろ感覺が自己運動をなせる物質の諸屬性の一つとして認められることである。この問題においてエンゲルスは……「俗學的」唯物論者ななくづくフォークト、ビュヒネルおよびモンシヨットらが、吾々の腦髓はあたかも肝臓が胆汁を分泌すると同じやうに思想を分泌するかの如き見解に迷ひ込んだがゆゑに、正にそのために彼等から自らを區別したのである。』(『唯物論と經驗批判論』、ドイツ本、二九頁。河上譯、前掲書、五頁)吾々はこゝで、フェイエルバッハが思惟をもつて、實在の原因ではなくて、その結果であり、またはより精密には實在の一屬性である、となしたことを、思ひ起すべきである。

かくてエンゲルスは、フェイエルバッハがこゝで停頓したところの・そしてマルクスおよびエンゲルスが之

成實論に於ける物質の存在は  
待つ外はない



を承繼してその内面的發展の進行を實現せしめたところの見解を、次ぎの如く規定してゐる。

『フイエールバッハの發展の道行は、一個のヘーゲル主義者が——もちろん決して完全に正統派的ではないが——唯物論に到るまでの道行であり、その發展は、一定の段階において、その前行者の觀念論的な體系と全く絶縁することを必要とするものである。遂にフイエールバッハは抵抗すべからざる力に迫られて次ぎの如き見解を探るに至つた。曰はく、……物質的な・感覺的に知覺することのできる・世界が——かかる世界に吾々自身も屬してゐるのだが——唯一の現實的なものである、また吾々の意識と思维とは、如何に超感覺的なものに見えてゐようとも、それは一の物質的な・肉體的な・器官たる頭腦の産物である。物質は精神の産物ではない、むしろ精神そのものが物質の最高産物たるにすぎない。かういふ思想は言ふまでもなく純然たる唯物論である。ところでフイエールバッハは、こゝまで来て、停頓してしまつた。云々。』(同上、ドイツ本、一八頁。佐野文夫氏譯本、五四—五五頁)。

なほ以上述べたる諸問題につき、レーニンがマルクスおよびエンゲルスの見解をそのまゝ、完全に承繼し、なかんづくその著『唯物論と經驗批判論』において、マルクス主義の哲學的根柢からのあらゆる逸脱に對し容赦なき攻撃をなしつゝ、正統的立場の擁護に努めてゐることは、すでに周知のことである。私は次ぎに代表的な二三の章句を引用するであらう。

『知らぬ人なきマルクスの協働者であり・マルクス主義の協同創設者である・唯物論者フリードリヒ・エンゲルスは、あらゆる彼れの著書において、常に且つ専ら、物とその思想的映像または思想的反映について語つてゐるが、この場合、あらゆる思想的映像は感覺以外からは決して出て來ないことが、自明である。』(『唯物論と經驗批判論』、ドイツ本、二二頁。河上譯『レーニン・辯證法的唯物論について』、二頁)。

『唯物論は自然科学と全然一致して、物質を本源的所與のものとなし、意識・思维・感覺を第二次的のものとなす。けだし感覺は、明白に露現した姿においては、たゞ物質の最高形態(有機的物質)とのみ結びついてをり、そして「物質の建物の土臺石」の中には、吾々はたゞ、感覺に類似してゐる或る能力の存在を推測しうるにすぎないのであるから。』(同上、ドイツ本、二七頁。譯本、五頁)。

『もし色彩がたゞ網膜に依存してのみ感覺であるならば、(これは自然科学が諸君に承認を強むるところであるが)、それは、光線が網膜に落ち來ることによつて色彩の感覺を作り出すといふことを意味する。すなはちそれは、吾々の外部に、吾々および吾々の意識とは獨立に、物質の或る運動が例へば一定の長さと速力とを有するエーテルの波が存在してゐて、それが網膜に作用しつゝ、人間に一定の色彩の感覺を作り出すといふことを意味する。自然科学においてもまたそうだといふことになつてゐる。また様々な色彩に關する種々な感覺は、人間の網膜の外部に・人間の外部に且つ人間に依存せず・存在してゐるところの、光波の様々な長さによつて説明されるのである。それがまさしく唯物論である。——物質は吾々の感覺器官に作用して感覺を生む。感覺は、腦髓や神經や網膜等々に・すなはち一定の仕方

で組織されてゐる物質に・依存してゐる。〔此の如き一定の仕方

で組織されてゐる最高形態の物質の一屬性が感覺である。——河上補〕物質の存在が感覺に依存してゐるのではない。物質が第一次的のものである。感覺・思想・意識は、一定の仕方

で組織されてゐる物質の最高の産物である。これが一般的には唯



物論的見解であり、特殊的にはマルクスとエンゲルスとの見解である。」(同上、ドイツ本、三七頁。譯本、七五頁)。

『物質は第一次的のものであり、思想・意識・感覺は、極めて高度なる進化の産物である。これが唯物論的認識論であり、この土臺の上に自然科学は本能的に立つてゐる。』(同上、ドイツ本、五九頁。譯本、一二頁)。

『精神と肉體との二元論の唯物論的排除(すなはち唯物論的一元論)は、精神は肉體から獨立には存在せず、精神は二次的なものであり、頭腦の一機能であり、外的世界の反映であるといふことを、その本質としてゐる。』(同上、七五頁。譯本、一三一―一四頁)。

## 七 研究にとつての唯物論的出發點

マルクスおよびエンゲルスは、フイエールバッハの唯物論を深化することによつて、辯證法的唯物論をうち立て、史的唯物論をうち立てた。フイエールバッハの哲學から合理的なものを承繼しつゝ、フイエールバッハの弱點に對しては一切の批判を怠らなかつた彼等の仕事は、だから、レーニンの表現『唯物論と經驗批判論』、ドイツ本、三三六頁。河上譯、前掲本、六五頁)を借れば、『辯證法的唯物論よりも辯證法的唯物論を強調し、史的唯物論よりも史的唯物論を主張した』のである。今吾々の目標は、マルクス主義において實現されてゐる斯かる『唯物論の哲學の上部への竣工』過程を、その隠れたる土臺との連絡において、できうるかぎり順序正しく且つ残る限なく追跡することにある。そしてそのためには、辯證法の問題はしばらく後に廻はし、吾々は

こゝでは先づ、唯物論そのものを——この最初の土臺石を——できうるかぎり鞏固に建設しておくことに注意せねばならぬ。もちろん後に至つて述べるであらうやうに、唯物論と辯證法とは本來離るべからざる連絡を有するものであり、辯證法は唯物論的基礎の上に立つことによつて始めて合理的な姿をとりうると同時に、唯物論そのものはまた辯證法によつて深化され強化される。従つて吾々は、こゝで唯物論そのものを説明するにあたり、吾々の考察を進めれば進めるほど、次第に辯證法に觸れることを、否應なしに強制されるに至るであらう。それは極めて自然的なことであり、避けうべからざることである。だが、それにも拘らず、吾々は、こゝでは暫くの間、唯物論そのものの闡明を論述の主眼となしつゝ、なほ之に關する二三の論點を明かにするであらう。

かゝる見地から私の先づ問題にしようとするところは、研究にとつての唯物論的出發點である。——今、唯物論の見地からすれば、研究にとつての出發點は、外的現象であり、經驗的事實である。吾々は進んでそのことを明かにしよう。

すでに述べたやうに、唯物論者にとつては、存在が本源的なものであり、意識は存在から派生したものである。意識は存在によつて規定されるが、存在が意識によつて規定されるのではない。そこで唯物論者にとつて先づ自明なことは、存在は根本的には意識から説明されるべきでないといふことである。何故といふに、本源的なものが派生的なものから説明されるはずはないのだから。(この見地を、人間社會——社會現象——の上に移せば、『人間の社會的存在は彼等の意識によつて規定されるのではなく、逆に彼等の意識が彼等



の社會的存在によつて規定されるのである。だから、彼等の社會的存在は彼等の意識から説明されるべきではなくむしろ逆に、彼等の意識が彼等の社會的存在から説明されるべきである」といふ史的唯物論の根本命題が生まれる。だが斯かる特殊な問題に立ち入ることは、なほ後の段階における仕事である。

ところで、これについては次ぎの如き問題が起りうる。なるほど、存在は吾々の意識に依存することなく吾々の意識からは獨立に存在してゐるのであるから、かゝる存在が吾々の意識から説明されるべきはずはないであらう。だが、もし存在なるものが此の如く吾々の意識から獨立してゐるものとするならば、それは何等かの仕方において吾々の意識内容となるのでなければ、總じて意識にとつての問題となりえないはずである。それは如何にして吾々の意識内容となりうるのであるか？

これに對する唯物論者の答へも、吾々がすでに前節において見たところである。すなはち、それによれば、吾々の意識から獨立してゐる外的世界を吾々の頭脳内へ反映することにより、外的刺激のエネルギーを吾々にとつての意識事實に轉化せしめるものは、吾々の感覺(吾々の感官の一屬性としての感覺)の外にはないのである。そのことをレーニンは次ぎの如く力説してゐる。

『教授的哲學に迷はされてゐない一切の自然科学者にとつても、また總ての唯物論者にとつても、感覺は事實上、意識の・外界との・直接の連絡であり、外的刺激のエネルギーの・ある意識事實への・轉形である。かゝる轉形は、各人が幾百萬回となく見て來たのであり、且つまた現に歩一歩毎に見てゐるのである。(レーニン『唯物論と經驗批判論』、ドイツ本、三三頁。河上譯『レーニン・辯證法的唯物論について』、六頁。)

『彼等〔主觀主義者および不可知論者〕は、吾々の感覺の源泉として、人間から獨立した・客觀的な・實在

を認めない。彼等は感覺のうちにこの客觀的現實の忠實な描寫を見ない。彼等は自然科学との直接な矛盾に陥り、信仰主義のために有らゆる扉を開く。唯物論者にとつては之に反し、世界は、その外觀よりも、より豊富で、より生きくとしてをり、より多様である。けれど科學上の發展はその一歩毎に、世界のうちに新たな方面を發見するから。唯物論者にとつては、吾々の感覺は、唯一の・且つ最後の・客觀的實在の映像である、——こゝに最後の實在といふのは、それがすでに窮極まで知りつくされたといふ意味においてではなく、それ以外に他のものが存在せず、また存在しえないといふ意味においてである。』

(同上、一一六頁。——同上譯本、三二頁。)

吾々は、吾々の外部に吾々から獨立して、客觀的實在の存することを認める。かゝる客觀的實在が、吾々の感覺の源泉である。例へば、一定の長さと速力とを有するエーテルの波といふが如き、一定の物質の或る運動が存在すれば、かゝる外的刺激のエネルギーが吾々の感官(例へば網膜)に作用して、それが吾々に一定の色彩の感覺を起すのである。かゝる感覺は、決して客觀的實在の完全なる映像ではありえない。だが、吾々は斯かる感覺を外にして客觀的實在の存在を知覺しうる方法をもたぬのである。

今此の如き感覺を媒介とすることにより、外界の事物が吾々の頭脳内に反映したるまゝの最初の姿、それが謂はゆる外的現象なるものであり、經驗的事實なるものである。そして唯物論者がその研究にとつての最初の出發點となすものは、かゝる意味においての外的現象である。それは外的世界が人間の頭脳に反映することにより、思惟の素材として人間に提供されるところのものである。唯物論者は、かゝる思惟の素材の上に構成された何等かの思惟的產物をその思惟の出發點とすることなく、かゝる思惟のための素材そのものを



最初の出発點となさんことを、要求するのである。

そしてこのこともまた、フョイエルバッハが、すでにマルクスおよびエンゲルス以前に、力をこめて主張したところである。フョイエルバッハは、『哲學』の出発點を『非哲學』に求めた。彼れの意見によれば、理論は抽象的な理論から出發さるべきでない。それは、最初に且つ本源的には、理論以上の・また理論以前の・現實的な具體的な事實から出發せねばならぬ。彼れはそのことを、『哲學の改革に関するテーゼ』のなかに、次ぎの如く規定してゐる。

『哲學の始點は神でなく、絶對的なものでなく、絶對的なものから實在的なものへ・または觀念の・客語としての存在でもない、——哲學の始點は有限的なるもの、規定されたるもの、現實的なものである。』、『哲學の改革に関するテーゼ』——恒藤恭氏譯文による。

『抽象的なものから具體的なものへ・觀念的なものから實在的なものへ・の思辨哲學の進路は、顛倒してゐる。かゝる進路をとるときは、到底眞實の客觀的實在性に到達することはなく、いつもたゞその抽象の實在化に到達するのみであり、そのために遂に精神の眞正なる自由に到達しえないであらう。』(同上)

『あるところのものを、そのあるがま、に——すなはち眞なるものを、眞實に語ることは、淺薄なやうに見える。あるところのものを、そのあるがま、にでなく、——すなはち眞なるものを、不眞實に・逆に・語ることは、深刻なやうに見える。』(同上)

『哲學は自己みづからを始點とせず、その反對を・非哲學を・始點とすべきである。この思惟から區別さ

れた・非哲學的な・絶對に非スコラス的な・本質は、感覺論の原理である。』(同上)

凡そこれらの提言において、哲學の出發點たるべきものを、あるひは『有限的なるもの、規定されたるもの、現實なるもの』といひ、あるひは『具體的なもの、實在的なもの』といひ、あるひは『あるところのものを、そのあるがま、に』といひ、あるひは『思惟から區別された非哲學的なもの』と言つてゐるのは、みな同じことを指す。それは一言にして蔽へば、畢竟、思惟は思惟から出發さるべきではない、それは思惟の素材として與へられてゐる外的現象——經驗的事實——をその出發點とせねばならぬ、といふことに歸するのである。

哲學の出發點に関する・フョイエルバッハの斯かる見地は、そのまゝ、マルクスおよびエンゲルスによつて承繼されたものである。現に彼等は一八四〇年代において、すでに次ぎの如く述べてゐる。

『吾々がそれをもつて始めるところの諸前提は、……現實的な前提である。これらの諸前提は、純粹に經驗的な仕方で確められる。』(Mark-Engels Archiv. Bd. I. S. 237.)

『吾々の觀察の仕方は無前提なものではない。それは現實的な諸前提から出發し、瞬時といへども之を見失はない。その前提は、何等か空想的な閉鎖性と固定性における人間ではなく、一定の諸條件のもとにおける・その現實的な・經驗的に見ることでできる・發展過程における人間である。』(同上、二四〇頁)。かゝる見地よりして、唯物論的認識に関するエンゲルスの次ぎの規定——前に引用したる・哲學上の二大陣營に関する・表現とは、おのづから異なる表現を有つもの——は、理解さるべきである。



「なほヘーゲル學派の解體から、本統に果實を結んだ唯一のものたる、他の一傾向が出てきた、そしてこの傾向は主にマルクスの名を頂くものとなつた。

こゝでもまたヘーゲル哲學からの分離は、唯物論的見地への復歸によつて行はれた。すなはち此の一派は、現實の世界——自然および社會——を、先入となれる觀念論的妄想なしに之に對するところの、何人にもそれが映するがまゝに、(wie sie sich selbst einem Jedem giebt, der ohne vorgefasste idealistische Schranken an sie herantritt) 捕捉しようとして決心した。それ自身の聯絡において——決して空想的な聯絡において——なく——捕捉されたる事實と調和しない有らゆる觀念論的妄想を、容赦なく犠牲にしようとして決心したのである。そして唯物論なるものは總じてそれ以上を意味するものでない。『フョイエルバッハ論』、ドイツ本、三七頁。佐野文夫氏譯本、一〇五—一〇六頁。傍點は新たに加ふ。

要するに、原理は研究の出發點ではなく、逆に研究の結果として原理が生まれるのである。フョイエルバッハの『哲學は哲學を出發點とすべきでない』とは、そのことである。エンゲルスはまた言つてゐる。——

「どこから思惟はこれらの原理を取り來たるか？ それ自身からか？ 否な……思惟はこれらの諸形態〔存在の・外的世界の・諸形態〕を決してそれ自身からでなく、全く外的世界からのみ之を創造し引きだし、それが自然および歴史と一致するかぎりにおいてのみ正しいのである。これが事物に對する唯一のありるのである。」

「原理は研究の出發點ではなく、その終局的結果である。それは自然および人類史の上に適用されるものでなく、むしろそれから抽出されるのである。自然や人類世界が原理に従ふのではなく、むしろ原理は、それが自然および歴史と一致するかぎりにおいてのみ正しいのである。これが事物に對する唯一のありるのである。」(『反テューリング論』、ドイツ本、二二頁)。

マルクスが『資本論』において採用した見地もまた全くこれに外ならない。周知の如く、『資本論』第二版への跋文の中には、ロシアの「ヴェーストニク・エヴロプイ」の評言が引用されてをり、そしてそれについてはマルクス自身が「この筆者は、彼れがマルクスの眞の方法と呼ぶものを、かくも美事に叙述し云々」と言つてゐるのであるが、その評言のうちには、例へば次ぎの如き言葉がある。

「マルクスにとつては、たゞ一つのこと、すなはち彼れがその研究に従事しつゝ、ある現象の法則を發見することが、重要である。……それゆゑにマルクスは、正確なる科學的研究によつて社會關係の一定の秩序の必然性を證明すること、および彼れのために出發點および基點として役立つべき諸事實を完全無缺に確認すること、たゞこの一事のために努力する。……マルクスは、社會の運動をば、——たゞに人間の意志・意識・および意圖から獨立してゐるばかりではなく、むしろ逆に、その意欲・意識・および意圖を規定するところの、諸法則に支配されてゐる——の自然史的過程として考察した。……すでに意識的要素が文化史において斯程までの從屬的役割を演ずるものとすれば、文化そのものを對象とする批判が、意識の何等かの形態あるひは何等かの結果をその基礎となしえざることは、おのづから明かである。すなはち、觀念ではなく、たゞ外的現象のみが、かゝる批判のため出發點として役立つ。」(カウツキー版、前付四六頁。河上・宮川共譯、岩波文庫本、二七—二八頁)。

右の章句のうちには、マルクスのために「出發點および基點として役立つ」ものが、『事實』であり『外的現象』であるといふことが、充分明白に言ひ現はされてゐる。そしてこのことは、マルクスの經濟學における



唯物論的出發を特徴づけるものとして、極めて重要であるが、それを詳述することは後の段階における仕事に屬するがゆゑに、こゝにはたゞそのことを一言するに止めておく。

## 八 唯物論の根據

何等かの觀念や原理ではなく、與へられたるまゝの外的現象——經驗的事實——を、その研究の出發點とする唯物論は、それ自身が、經驗的事實の上に立脚する。

自然に對する精神の本性性を主張し、觀念から外的世界が生まれるとなすものは、觀念論であり、これと逆に精神に對する自然の本性性を主張し、觀念をもつて外的世界の映像となすものは、唯物論である。このことは吾々の既に述べたところであるが、しからば今、かゝる唯物論的見解そのものは何に立脚するかといふに、やはりそれは各人が日々幾百萬回となく繰り返す經驗に外ならぬのである。物に對する吾々の知識は吾々の感覺を通じて得られるものであるといふ吾々の認識論は、これを徹底せしめるときは、かくて不可避的に、吾々を唯物論に導くといふ哲學的結論を生じるのである。

吾々は直接に吾々の感覺によつて、山や川や木や石やの外物が吾々の外に存在することを、古くから知つてゐる。また遠望鏡や顯微鏡やが發明されてからは、それらの器具を利用して吾々の感覺機能があるひは擴大しあるひは精緻にすることによつて、今までその存在に氣付かなかつた種々なる天體や種々なる微菌やが存在してゐることを、知るに至つた。しかし吾々がもし眼を閉づるならば、今まで吾々にとつて存在してゐた山も川も現象として消滅し、また望遠鏡や檢微鏡やを取り去つてしまへば、それによつてのみ見られえ

たところの多くの天體や微菌やも、吾々にとつての現象ではなくなる。それは、吾々の感官がそれらの外物から刺戟を受けなくなつたために、外物は依然として元のまゝに存在するに係らず、吾々はそれらの物の存在を感知することができなくなつたに過ぎないのであつて、外物そのものが存在しなくなつたのではない。吾々の健全なる常識は外物を常に此の如くに認識するのであり、また總ての自然科学は斯かる唯物論的認識をその研究の前提としてゐるのである。それは何人もがその日々の生活における幾百萬回の經驗によつて、不可避的に到達するところの、哲學的結論——唯物論的見解である。だからレーニンは言つてゐる。

『まだ精神病院に入つてゐないか又は哲學的觀念論者の弟子になつてゐないところのあらゆる健全な人間の『素朴的實在論』は、物、環境、世界が、吾々の感覺や吾々の意識に、吾々の「我」および人間一般に、依存せず存在するといふことの認容を、その本質とする。吾々に依存せず他の人々がまた高低黄硬等々の余の諸感覺の單なる合成物にあらざるものが存在するといふ極めて確乎たる確信を、吾々のうちに造り出すところの經驗、この經驗こそが、物・世界・および環境は吾々に依存せず存在するといふ確信を、吾々の間に造り出す。吾々の感覺・吾々の意識は、外界の映像たるにすぎないのであつて、映像は映されるものなしに存在しえないが、映されるものは映像に依存せずして存在することは、自明のことである。』(『唯物論と經驗批判論』、ドイツ本、五五頁。河上譯『レーニン・辯證法的唯物論について』、二二—二頁)。

「一たび吾々が、人間の認識は無知から發展するといふ立場に立つならば、……たゞに科學および技術の歴史からばかりではなくまた各人の日々の生活からの幾百萬の觀察が、吾々に「物自體の」「吾々にと



つての物」への轉化を・吾々の感官があれやこれやの對象によつて或る外的刺戟を受けるときは、「現象」の發生を・また吾々がその存在を知つてゐる對象から吾々の感官への作用の可能性が、何等かの障害によつて奪はれたときは、「現象」の消滅を・示すといふことを知るであらう。それから生じる唯一の且つ避くべからざる結論——萬人が日々の生活から引きだすところであり且つ唯物論が意識的にその認識論の根柢とするところの結論——の本質は、吾々から獨立して對象・物・體が存在するといふこと、および吾々の感覺は外界の映像であるといふことである。(同上、ドイツ本、八九頁。同上譯本、二〇頁)。

すでに述べたる如く、「思惟の實在に對する・精神の自然に對する・關係の問題」は、エンゲルスの言葉によると、「全哲學の最高問題」であり、「すべての・殊に最近の・哲學の根本的大問題」であるが、吾々の見地からすれば、この問題に對する唯物論的見解それ自身が、以上説明せる如く「各人の日々の生活からの幾百萬の觀察」に立脚してゐるのであり、この「全哲學の最高問題」は、極めて簡単に吾々の經驗がこれを解決するのである。マルクスおよびエンゲルスが「ドイッチェ・イデオロギー」において、「一切の深奥な哲學的諸問題は、極めて單純に一個の經驗的事實のうちに解消する」と言つてゐるのは、(Marx-Engels Archiv, Bd. I, S. 242)そのためである。

だから、ブルジョア哲學の極端なる煩瑣と難解とのために、哲學とは總じて斯かるものとのみ思ひ込んでゐる人々は、マルクス主義哲學の平易明快なるを見て、却て狐につまされた感を抱くのである。だが、眞理は此の如く簡單なのである。前に引用したる如く、レーニンは「吾々の感覺・吾々の意識は、外界の映像たるにすぎないのであつて、映像は映されるものなしに存在しえないが、映されるものは映像に依存せずしてつてゐるのである。」

## 九 思惟と存在との適應關係

この項の改訂は不允分

人間は自然に對立する。すなはち人間と自然とは對立物である。だが人間は同時に自然の一部であり、人間そのものが自然の産物である。すなはち人間と自然といへる對立物は同一である。今かゝる對立物の同一性を把握することは、辯證法的思惟の主要なる特徴の一つであるが、これが詳細なる説明は後の段階に譲り、こゝでは人間と自然との斯かる同一性に向つて讀者の注意を促すに止めておく。

さて人間そのものが自然の一部に外ならずとするならば、かゝる人間の頭腦内における思惟過程もまた一の自然過程に外ならぬ。だから「自然を反映する意識と・意識のうちに反映される自然と・間の一致の問題」は、「或る物體を撮影した寫真と・その寫真に撮影された物體と・間の一致の問題」と、何等本質的の差異を有するものではない。このことから、思惟にとつての諸範疇は自然にとつての諸範疇に適應するといふことが、また眞實に把握された思惟はいつも同じものでありうるといふことが、かくて科學の成立は可能であるといふことが、理解されうる。



この點につきエンゲルスは嘗て次ぎの如く説明した。

『もし吾々が、思惟および意識とは何であるか、それらは何處から出てくるかを問ふならば、吾々は、それが人間の頭腦の産物であるといふこと、しかも人間そのものがまた、その環境の中で且つその環境と共に發展した一の自然産物であるといふことを、發見する。さすれば、人間の頭腦の産物——それは結局においてやはり自然産物であるところのもの——が、爾餘の自然關聯と矛盾することなく之に適應するといふことは、自明の理である。』(『反テューリッゲ論』、ドイツ本、二二頁)。

またマルクスは、價值論に關する問題につき、リーゲルマンへ與へた手紙(一八六八年七月十一日づけ)の中で、次ぎの如く述べてゐる。

『もちろん他方においては、(價值論に關して色々な謬見が行はれてゐるにも拘はらず——河上補)あなたが正當に想定したやうに、學說史は、價值關係の理解が——明瞭なものと不明瞭なものと・幻想で飾られたものと科學的に規定されたものと・の差異はあれ——いつも同一であつたといふことを、示してゐる。思惟過程そのものが關係から(價值論について言へば現實の價值關係から——河上補)生ひ立つのであり、それ自體が一の自然過程であるから、眞實に把握した思惟はいつも同一たらざるをえないのであり、たゞ發展の・從つてまた思惟のために用ひられる器官の・成熟に應じて、漸次的な差異を呈するだけのことである。』(Briefe an Kugelmann, S. 45.)

だから思惟が現實に當てはまることは、何の不思議でもない。現實そのものが思惟の基礎であり、思惟の諸形態は現實の諸形態から抽出されたものであるから、それらはもちろん現實の自然に當てはまる。だが、

ここに引用したマルクスの手紙の最後のところにも述べてあるやうに、思惟のために用ひられる器官の成熟の程度に應じて、思惟の産物が外界の事物を反映するに際しての忠實さの程度に差異を生じる。私は更にそのことを述べよう。

吾々が『意識は存在によつて決定される』とか、『意識は存在の反映である』とか云ふとき、これに對して次ぎの如き疑問を提出するものがある。すなはち、もし意識が存在の反映であるならば、何人も一定の存在に對して同一の意識をもつべきはずであるが、事實においてさうなつてゐないのは何故であるか? 嘗て土ナ博士がマルクスの價值論に對して發せられた次ぎの疑問も、本質的には之と同じものである。氏はいふ、

『私は蒸溜法、マルクスが商品價値の實體を求むるために商品の使用價値を捨象することを指す』はマルクスが考へた思考の結果を表現するものかと思つたら、決して單なる個人の頭腦による抽象ではないさうである。一體誰の頭腦による抽象なのであらう。特定の社會的歴史的事實の結果であり、その反射たものであると云はれることから想像すると、何人も社會的事實の結果として斯く思はざるを得ないと云はれるらしいが、かく思はない人も多數あり、現に私の如きもその一人である事實を如何にするか。』(『マルクス價值論の排撃』、七二頁)。

外物は感覺を通して人間の頭腦に反映する。だがその反映は決して常に正確なものではありえない。また總ての人にとつて同一のものでありえない。簡單な例を取つて説明しよう。例へば寫眞がフィルムの上へ反射された外物の映像であることは、何人も承認するであらう。だがフィルムの善悪や技術の巧拙によ



つて、同じ外物から得られた映像も決して同一ではありえない。

この點につき、アドラトスキーは次ぎの如く述べてゐる。

『思惟は存在によつて決定される。そのことは、物質的現實性のうちに事實上存在する人間の現實的な關係は一の事態であり、それに關する意識は別個の事態であることを意味する。……この二つの事柄が異なるものだといふ事實は、吾々が歴史の一步々々に見るやうに、一定の社會關係が成熟し且つ實在してゐても、それに對する意識はなほ缺けてをり、人々は未だ彼れ自身のなすところの總てを明細に理解しないといふことでも明白になる。最初に關係が成立し、然る後意識が生じ、人々はそれを理解し始める。ロシアにおける八十年代には、資本主義はすでに疑ふべからざる事實であつたにも拘らず、その頃において、ロシアの資本主義とは無意味のことだと論證した「學者たち」の著述が現はれた。更にまた九十年代においても、ロシアに資本主義ありや否やについての・ナロードニキとマルクス主義者との論争が續けられてゐたのである。』

『産業資本主義はすでに百五十年以上も世界に存在してゐる。だが多くの經濟學者は今に至るもなほ、資本主義的關係の本質とその法則とを自得することができずにゐる。思惟は存在によつて決定される。だが、こゝに見る如く、思惟がかゝる決定へ従ふのは、時として極めて緩慢に行はれる。』(アドラトスキー『レーニン主義の理論と實踐』三四頁)。

吾々の感覺は決して客觀的實在の完全に正確なる映像ではありえない。だから吾々は決して客觀的實在を知りつくすことはできない。そのことは科學の進歩が證明してゐる。科學的發見の行はれる毎に、吾々は、

吾々の外界世界が、その外觀よりも、より豊富であり、より他面的であり、従つて吾々の研究が進むにつれ、吾々が今まで知つてゐなかつた方面が顯はになることを、經驗するのである。意識が存在の反映であるといふのは、意識がいつでも残る限なく且つ正確に存在を反映しつくしてゐるといふ意味ではない。

カメラやフィルムの如何によつて、同一物體の寫眞でも様々の差異を呈しうると同じやうに、同じ場所・同じ時代に棲息してゐる者でも、その意識内容を異にしうる。殊に社會的存在に關する意識(社會的意識)に至つては、人々の屬する階級を異にするによつて、著しくその内容を異にするであらう。だから、例へばマルクスがあれほどまで丁寧に説明してゐる勞働價值論でも、ブルジョア學者たちは到底これを理解しえないのである。土方博士がマルクスの勞働價值論を指して、それは『特定の社會的歴史的事實の結果であり、その反射たるものであると云はれることから想像すると、何人も社會的事實の結果として斯く思はざるを得ない』と云はれるらしいが、かく思はない人も多數あり、現に私の如きもその一人である事實を如何にするか』と質問されてゐるのは、つまりカメラやフィルムに色々な種類のあることを理解されざるがためである。カメラやフィルムを異にするによつて、外物の映像はもとより同一とはなりえないであらう。だが、そのことは、かくして得られる寫眞が外物の映像であるといふことの反證とはなりえないのである。

なほ一定の意識は種々なる媒介を通して他の意識へ傳染する。だから、意識は存在の反映であると云つたところで、それは單に過去における存在の反映を傳承してゐるに過ぎざる場合もある。『變化する實際と同行しえない意識は、「昨日」の實際を反映する。その意識はまた、それが遠い將來に對しても力あるものだと空想しつゝ、昨日の實際によつて決定される。』(アドラトスキー『レーニン主義の理論と實踐』前掲譯本四頁に引用)



せるレーニンの言葉。だが如何なる場合においても確かなことは、意識は結局において存在によつて決定されてゐるといふことである。意識内容を規定するものは、最後にはいつでも客觀的實在であり、それを外にしては他に何物もありえない。かくて唯物論者にとつては、——レーニンの言へる如く、——「吾々の感覺は唯一の・且つ最後の・客觀的實在の映像である——最後の實在といふのは、それがすでに究極まで知りつくされたといふ意味においてはなく、それ以外に他のものが存在せず、また存在しえないといふ意味においてである。」〔唯物論と經驗批判論〕、ドイツ本、一一六頁。前掲譯本、三二頁。

## 一〇 相對的眞理と絶對的眞理

同一なる客觀的實在の意識への反映は種々の相をとりうるにも拘らず、結局において吾々の意識内容を規定するものは吾々の頭腦の外に存在する客觀的實在であるといふことから、こゝに客觀的眞理の把握の可能性が生まれる。だがこの場合、吾々にとつて更に必要なことは、かゝる客觀的眞理の存在を承認することと、吾々が現實に把握してゐる眞理はすべて相對的であるといふことを承認することとの區別を明かにすることである。レーニンはボグダーノフに對する批判のうち、區別せねばならぬ此等二つの問題を、次ぎの如く表現してゐる。

『(一)客觀的眞理なるものは存在するか？ 言ひ換へれば、主體に依存してゐないところの・人間や人類に依存してゐないところの・ある内容が、人間の表象のうちに在りうるか？

(二)もし然りとすれば、客觀的眞理を反映するところの人間の表象は、この眞理を一度に・全部・無條件

的に・且つ絶對的に・表現しうるか？ それとも近似的に且つ相對的に表現しうるにすぎないか？』

〔唯物論と經驗批判論〕、ドイツ本、一〇九頁。前掲譯本、二四頁。

今これらの問題に對する唯物論者の解答は、すでに述べ來つたところによつて、おのづから明かであらう。吾々は、主體に依存しないところの・人間の意識からは獨立して存在してゐるところの・客觀的實在の存在を認め、且つ斯かる客觀的實在が人間の感官に何等かの刺戟を與へることにより、人間の頭腦のうちにある意識を發生せしめることを認める。かくて吾々は、吾々の意識が客觀的實在の映像たることを認める點において、客觀的眞理の存在を認めるのである。だが吾々の感覺は、吾々の外部に存在するところの客觀的實在を、一度に残る限なく且つ完全に正確に寫し取ることはできない。外界の事物は無限の方面をもつてゐる。それらの限りなき方面を一舉にして盡く汲みつくすといふことは、吾々にとつて現實的には不可能である。現に科學的發見の一步々々は、かゝる無限の方面を一方面づゝ顯はにしてゆくのであり、それはいつも昨日までの認識が決して完全なものでなかつたことを證明してゐる。かくてあらゆる科學上の命題は、一定の限界(領域)においてのみ妥當性をもつ。知識の進歩は、かゝる限界を或ひは狭め或ひは廣める。しかるかぎりにおいて、眞理はすべて相對的である。

客觀的實在の

だが、すべての知識は此の如く相對的であるにも拘らず、それは吾々の意識から全く獨立してゐるところの客觀的實在の或る方面を捉へてゐる。それは斯かる客觀的實在のあらゆる方面を残る限なく捉へてゐるものでないといふ點において、絶對的眞理ではないが、しかしそれは斯かる客觀的實在の何等かの方面を捉へ



てゐるといふ點において、絶對的真理の一部を構成する。相対的真理は全部ではない。だから相対的真理は絶對的真理ではない。だが、部分を外にして全體はない。絶對的真理は相対的真理の總和から成るものに外ならぬ。

更にこれを發展過程の見地より見んか、與へられてゐる現實の知識は相対的真理を表現するものに外ならぬ。だが、新たなる科學的發見の行はれる毎に、吾々は一步づ、絶對的真理に近づくのであり、斯かる近接は無條件的である。すなはちその現實について云へば、吾々の認識能力は制限されてをり一定の限界をもつてゐるけれども、その可能性について云へば、それは無制限であり無條件的である。

以上のことを、エンゲルスは、『反デュリング論』において、次ぎの如く説明してゐる。

『自然の出來事の全體は一個の體系的關聯を成してゐる。……だが、かゝる關聯の適當な・遺漏なき・科學的な敘述、吾々がそのうちに住する世の體系の精確なる思惟映像の作製は、吾々にとつてもまた如何なる時代にとつても一個の不可能事である。……だから人間は次ぎの矛盾の前に——すなはち一方においては、世界體系をその全關聯において遺漏なく認識せんとしながら、しかも他方においては、人間自身の性質ならびに世界體系の性質上、かゝる問題を決して完全には解決しえないといふ矛盾の前に——置かれてゐるのである。』(ドイツ本、二四頁)。

『思惟の至上性は、最も非至上的に思惟する人々の系列のうちに實現する。無條件的な真理權をもつ認識は、相対的誤謬の系列のうちに實現する。前者も後者も、人類の無限の存続による以外には、完全に實現されえない。』

『吾々はこゝで再び、必然に絶對的として考へられる人間の思惟の特質とこの思惟が明かに制限的に思惟する個々人のうちに實在するといふこととの間における、すでに先きに述べたると同じ矛盾を——すなはち無限の道程においてのみ、吾々にとつて少くとも實際的には無限である人類の連續においてのみ、解決せられうる矛盾を——もつ。この意味において、人間の思惟は至上的であると同樣に非至上的であり、その認識能力は無制限であると同樣に制限的である。素質・傾向・可能性・歴史的の究極目標・よりすれば、至上的であり無制限である。個々の實行やその度毎の實現性よりすれば、非至上的であり制限的である。』(同上、七九頁)。

吾々が現にもつてゐる知識は相対的である。すなはち人間の思惟は、『個々の實行やその度毎の實現性よりすれば、非至上的であり制限的である。』だが吾々の知識の進歩と擴大には際限はありえない。それは無限の過程において、吾々にとつて少くとも實際的には無限である人類の連續のうちに、窮極はその絶對性を獲得しうる。すなはち人間の思惟は、その『素質・傾向・可能性・歴史的の窮極目標・よりすれば、至上的であり無制限である。』

レーニンはその著『唯物論と經驗批判論』において、エンゲルスの前掲の言葉を引用し、それに續いて次ぎの如く言つてゐる。そこには問題がこの上もなく明瞭に説明されてゐるから、私は長きにわたる引用を敢てしよう。

『この考察は、相對主義の問題、すなはち總てのマッハ主義者により口を極めて力説される吾々の認識の相對性の原理の問題に對して、異常に重要である。……ボグダーノフにとつては、すべてのマッハ主



義者におけるが如く、吾々の知識の相對性を承認することは、絶對的真理の如何に些細なる承認をも排除するのであるが、エンゲルスにとつては、絶對的真理は相對的真理から構成される。ボグダーノフは相對主義者であり、エンゲルスは辯證論者である。……

『要するに、人間の思惟は、その素質からすれば、相對的真理の總計である絶對的真理を吾々に與へる能力をもつてをり、また現に與へてゐるのである。科學の發展の各段階は、絶對的真理を構成すべき總計に對して新しき粒を追加する。しかし各々の科學的命題の真理の限界は相對的であつて、知識のより以上の増大によつて或ひは狹められ或ひは擴大されるのである。』

『辯證法的唯物論にとつては、相對的真理と絶對的真理との間に何等越えがたき深淵はない。……』  
『近代的唯物論すなはちマルクス主義の立場からは、客觀的絶對的真理への吾々の認識の接近の限界のみが歴史的に條件づけられてゐる、しかしかゝる真理そのものの存在は無條件的であり、吾々がこれに近づくことは無條件的である。ある繪の素描は歴史的に條件づけられてゐるが、この繪が客觀的に存在してゐる一モデルを寫してゐるといふことは無條件的である。……諸君は言ふであらう、相對的真理と絶對的真理との間のこの區別は不決定的であると。私はこれに答へて言ふ、この區別は、科學が悪い意味のドグマへ・すなはち何等か死んだもの凝固したものへ・轉化することを防ぐに足るだけ、正に「不決定的」である、しかし同時にそれは、信仰主義や不可知論から・カントおよびヒュームの追隨者たちの哲學的觀念論や詭辯から・最も決定的に最も斷定的に自らを區別するに足るだけ、「決定的」であると。……』

『辯證法は、すでにヘーゲルが説いたやうに、相對主義の・否定の・懷疑主義の・一要素を含むが、しかし相對主義に歸着するのではない。マルクスおよびエンゲルスの唯物論的辯證法は、もちろん相對主義を含むが、しかし相對主義に歸着しはしない。すなはちそれは、あらゆる吾々の知識の相對性を認容するが、しかしそれは客觀的真理の否定の意味においてではなく、客觀的真理への吾々の知識の接近の限界が歴史的に制約されてゐるといふ意味においてである。』(ドイツ本、一二二—一二五頁。河上譯『レーニン・辯證法的唯物論について』、三四—三八頁)。

吾々は今期せずして辯證法の問題に少からず深入りしつゝある。前にも一言した如く、唯物論と辯證法とは本來切り離すべからざる關係にあるのだが、このことは到底避けがたい。私はなほ事の序に、前記の如きレーニンの見解について、一二の人の加へた若干の註釋を、なほこゝに抄録しておくであらう。

デボーリンは『辯證法に關するレーニンの遺稿について』のなかで、前記の論點に關するレーニンの見解について、次の如く述べてゐる。

『懷疑主義および詭辯論は、例へば相對を絶對から切り離し、これを主觀的のものたらしめることにおいて、相對をたい専ら相對的なものとしてのみ觀察してゐる。これに反し、辯證法論者にとつては、相對と絶對との區別がすでに相對的である。……主觀主義者および懷疑主義者は、たゞ有限と相對とのみで認識されうると主張してゐる。彼等は有限と相對とが無限と絶對とに對して有する聯絡を見ない。だから彼等はあらゆる相對的の認識を主觀的認識となし、これを客觀的認識となさない。けれども、根本的にいへば、あらゆる眞實なる相對的の認識は絶對と無限との認識であり、客觀的世界過程の認識である。』



レーニンは斯の如く言つてゐる。なほ彼のいふところによれば、辯證法の總てのエレメントの胚種は、すでに任意の定言のなかに含まれてゐる。何故なれば、辯證法は總ての人間の認識に固有なものであるから。絶対はたい相對の媒介によつてのみ近づきうるものであり、それ自身が相對的な有限的な契機から建設されてゐるゆゑに、吾々はたゞに絶対を相對において認識するばかりでなく、また普遍はたい個別によつてのみ存在するがゆゑに、吾々は個別において普遍を認識するのである。個別と普遍との間における相互關係は、やはり對立物の同一性を形成し、相互的な聯絡と一のものから他のものへの推移とを形成する。(河上譯『レーニンの辯證法』七六一七七頁)。

なほ最近に入手したルプルの『レーニンおよび哲學』には、同じ問題について次ぎの如く述べてある。

『一部分は全體ではないのだから、相對的眞理は絶対的眞理ではない、だから各々の部分は全體を前提する。全體は諸部分ではない、だが諸部分は全體を形成する。絶対的眞理は相對的眞理ではない、だが前者は後者の總和から成る。』

『辯證法唯物論にとつては、現象と物との間に・現象と本質との間に・橋渡しすべからざる深淵がないのと同じやうに、相對的眞理と絶対的眞理との間にも何等越えがたき裂目はない。』

『世界における一切のものは相對的である！これは間違ではない。だがこの命題はまだ總てを言ひつくしてゐない。『相對性』そのものがまた單に相對的である。極端なる相對主義者は全く論理的な地盤に立脚してゐない、何故なら彼等自身の原理に忠實でなくなるから。一切のものは相對的であるといふ主張によつて、彼等はこの『相對性』を一個の絶対的なものにする。一切のものは相對的であると彼等は言ふら。』

が、さうすると、彼等にとつては、相對性は絶対的である！だから彼等の見地は矛盾に充ちてゐる、しかもこの言葉の最も悪しき意味において、何故なら、かゝる矛盾は止揚も克服もされ得ないのだから。

『マルクス主義の見解はこれと異なる。一切のものは相對的である、かくてまた「相對性」そのものが相對的である、だからまた相對と絶対との間の關係や區別も相對的であるに止まり、決して絶対的ではない。その結果吾々は一定の意味においては絶対について語ることもできる。相對性を見地を眞に徹底的に貫徹すると、それは不可避的に斯かる見地の否定へ導くのである。』

『レーニンは、以上のことを、一の一般的な・従つて必然的に抽象的な形態で、次ぎの如く定式化してゐる。(主觀主義(懷疑主義、詭辯論、等)と辯證法との區別は、なかんづく次ぎの點に、すなはち(客觀的)辯證法においては相對と絶対との區別そのものが相對的であるといふ點に、存する。客觀的辯證法にとつては、相對のうちにも絶対が含まれてゐる。主觀主義および詭辯論にとつては、相對はたゞ相對的であつて絶対を排除する。1)』(河上譯『レーニンおよび哲學』ドイツ本、五六―五八頁)。

(1)この句は、レーニンの『辯證法の問題について』から引用されたものである。河上譯『レーニンの辯證法』、九五頁参照。

## 二 眞理の基準としての實踐

吾々はすでに吾々の表象が客觀的眞理の反映であること——たとひそれは絶対的に正しい反映ではなくと



も、ともかく吾々から獨立に存在してゐる客觀的實在の何等かの方面の反映以外のものではありえない、といふこと——を述べて來た。吾々は更に、かゝることが如何にして立證されるかを述べよう。

實踐の基準は唯物論的認識論の基礎である。このことは、レーニンのいへる如く、マルクスがすでに一八四五年に、またエンゲルスは一八八八年と一八八九年とに、問題としたところである。私はここにそれらを次ぎ／＼に紹介し、最後にレーニンの見解を紹介しよう。

一八四五年、マルクスは『フイエエルバッハに關するテーゼ』の第二において、次ぎの如く述べてゐる。

『人間の思惟が對象的眞理を受取るか否かの問題は、何等理論の問題ではなく、一の實際的 (Praktisch) な問題である。實踐においてこそ、人間は眞理を・すなはち彼れの思惟の現實性と力を・その此岸性 (Diesseitigkeit) を・證明せねばならぬ。思惟——實踐から遊離してゐる思惟——の現實性乃至非現實性に關する爭論は、一の純然たる煩瑣哲學的 (scholastisch) 問題である。』 (Marx-Engels Archiv, Bd. I, S. 297.) (傍點は原文による。)

ここに對象的眞理といふのは、客觀的眞理といふのと同じである。今かゝる客觀的眞理が果して人間の思惟に反映するものであるか否かの問題は、——マルクスによれば、——何等理論の問題ではなく、一の實際的問題であるといふのである。理論の問題でないといふのは、單なる理論では解決されえない問題だといふ意味である。私はそれについて嘗て次ぎの如く述べた。眞理の基準を思想そのものに求むるならば、その基準とされた思想の眞理性が更に問題となり、かくてそれは際限なきに至るであらう。そして懷疑論や不可知論はそこから生まれるが、それらはたゞ手を拱いて世界を傍觀する遊民等にふさはしき哲學であつて、人類の

歴史的實踐には何の役にも立たぬのである。吾々は眞理の規準をたゞ人間の總實踐に求める。(ここに人間の總實踐とは、研究室における顯微鏡下の實驗から、産業上に於ける一切の諸活動を含む)。例へば、水は酸素と水素とから成るといふ理論と、否なそれは酸素と窒素とから成るといふ理論とある場合に、その何れが正しきかは、たゞ實驗によつて最後の確證を得るの外はない。また例へば、或る醫藥が一定の疾病を治療するの效果ありや否やの問題も、最後の確證はたゞ之を臨床上の總實踐に徴するの外はない。更にまた、或る天體の運動に關する理論等にも、その最後の確證は望遠鏡による觀察に訴ふるの外はない。要するに、一切の理論は窮極みな斯の如くにして驗證され取捨され訂正されてゆくのである。「實踐においてこそ、人間は眞理を證明せねばならぬ」とは、そのことである。吾々はそれ以外に證明の道をもたぬ。だから、斯かる實踐を離れて思惟の現實性乃至非現實性(それが客觀的眞理を反映してゐるか否か)を爭論するのは、「一の純然たる煩瑣哲學的問題」である、といふのである。』 (一九二七年三月發行『社會問題研究』、第七十八冊、通冊二七〇—二七頁)。

エンゲルスは、一八八八年に彼れの公けにした『フイエエルバッハ論』において、この問題を次ぎの如く説明してゐる。

『思惟と存在との關係に關する問題は、もう一つ別な方面をもつてゐる。すなはち、吾々を取り巻いてゐる世界に關する吾々の思想は、かゝる世界そのものに對して、どういふ關係をもつてゐるか、といふのがそれである。吾々の思惟は現實の世界を認識する能力をもつてゐるか？ 吾々は、現實の世界に關



する吾々の諸表象および諸概念のうちに、實在の正しい映像を作り出すことができるのであるか？ この問題は哲學上の言葉では思惟および存在の自同性 (Identität von Dingen und Sein) と稱され、廣く大多數の哲學者によつて肯定されてゐる。たとへばヘーゲルにあつては、この問題の肯定は自明のことである……

『だがこの外に、世界の認識の可能性・少くともその餘蘊なき認識の可能性・を認めない一系列の他の哲學者がある。これに屬するものは、新しいところでは、ヒュウムおよびカントであつて、彼等は哲學の發展の上に甚だ重要な役割を演じて來た。この見解の反駁に關する決定的な點は、それが觀念論的な見地から可能であつた限りにおいては、すでにヘーゲルによつて述べられた。フイエエルバッハがそれに附け加へたものは、深刻といふよりもむしろ器用である。斯の如き「ヒュウムやカントやの」哲學上の幻想に對する最も確な反駁は、その他のあらゆる哲學上の幻想に對するそれと同じやうに、實踐すなはち實驗と産業とである。もし吾々がある自然事象に關する吾々の理解の正しさをば、吾々が右の事象そのものを作り出し、それをその條件によつて發生させ、あまつさへそれを吾々の目的に役立たしめることによつて、證明することができるとするならば、カントの把握すべからざる「物自體」なるものは、それでおしまひである。動植物の體中に生ずる化學的物質は、有機化學がかゝるものを次ぎ／＼に説明し始めるまでは、いつまでも斯かる「物自體」であつた。有機化學がこれらのものを説明するに至つて、「物自體」 (Ding an sich) は吾々のための物 (Ding für uns) となつた。例へば茜草の色素アリザリンがさうであつて、吾々はもはやそれが原野の茜草の根に生ずるのに委せておかすに、遙に廉價に且つ簡單に

これをコールタールから製出してゐるのである。コペルニクスの太陽系は三百年もの長きにわたつて一の假説であつた。それは百のうち九十九まで、千のうち九百九十九まで、萬のうち九千九百九十九まで確かであつたが、しかしそれでも依然として一の假説であつた。ところがルヴェリエが、この體系によつて與へられた事實から、たゞに未知の一遊星が存在してゐるといふことの必然性のみならず、かゝる遊星が天體のうちに占むべき位置をも算定し、ついでガレがこの遊星を現實に發見した時に、その時コペルニクスの體系は確證されたのである。』 (スワットガルト版、一五—一六頁。佐野文夫氏譯本、四五—五〇頁)。

眞理の基準は「實踐すなはち實驗と産業と」であるといふことが、こゝにこの上もなく明白にされてゐる。吾々がある自然事象そのものを作り出し、それをその條件によつて發生させ、あまつさへそれを吾々の目的に役立たしめることによつて、それに關する吾々の理解の正しさを證明するとは、例へば色素アリザリンに關して得たる智識に基づき、一定の條件のもとに之をコールタールから製出せんと試みるとき、果して豫期の如き色素が出來、且つそれは染料として元と茜草の根から得てゐた色素と同じやうに役立つならば、しかる限りにおいて、それは取りも直さず色素アリザリンに關する吾々の智識が、正確に客觀的實在を反映してゐる證據であるといふのである。色素アリザリンは、吾々がそれを發見する以前から、茜草の根にも、コールタールの中にも、存在してゐた。すなはちそれは、吾々の意識から全く獨立して存在してゐるのである。だが吾々は先づ吾々の感覺を通して、それが茜草の根に存在することを認識し、これを茜草から採取してゐた。しかしアリザリンそのものに對する吾々の認識が進むにつれ、それは必ずしも茜草から得られるばかり



ではなく、コルタアルからも製造さるべきはすのものと云ふことが分かる。斯の如くにして、アザリーンそのもの『物自體』としてのアザリーンに關する認識が進むにつれ、その程度に應じて、『物自體』としてのアザリーンは、『吾々のための物』となるのである。『物自體』と『吾々のための物』との間には、何等超えがたき深淵があるのではない。「カントの時代においては、自然物に關する吾々の智識は、その背後になほ特殊な神祕的な物自體を想像せしめるに足るほど、甚だしく断片的であつた。しかしながら、其後これらの把握すべからざる物は、科學の長足の進歩によつて、段々に把握され・分析され・進んでは再生産されるまでに至つたのである。吾々の作ることでできる物を、吾々は、確かに、認識すべからざるものと云ふことはできない。』（後に引用するところのエンゲルスの『唯物史觀について』の一節）。一定の外物に關する吾々の認識が確かであるといふことは、その認識に従つて吾々が現實にその物を再生産しうるといふことによつて、かかる實踐によつて、證明される。

エンゲルスはまた彼れの『空想的社會主義と科學的社會主義』（『反デューリング論』の一部を獨立させたもの）のイギリス版に載せた序文『唯物史觀について』（一八九一年）の中において、再び同じ問題を取り上げてゐる。

『わが不可知論者は、吾々の智識はすべて吾々が吾々の感官を通して受けた報告に基づくものであることを、認めてゐる。しかしながら、と彼等〔不可知論者〕は更に附け加へていふ、吾々は、吾々の感官がこの感官によつて知覺されたる事物の正しい映像を、吾々に與へるものであるか否かを、何によつて知るのであるかと。更に彼等は吾々に教へていふ、人が物あるひはその屬性について語る場合には、彼れ

⑤

は實際においては此等の物およびその屬性自身を言つてゐるのではない。それらについて彼れは何等確實なものを知りえずして、たゞそれが彼れの感官に與へたる印象を知りうるに過ぎないのである。かかる種類の理論は、確に、單なる論議によつて打ち破ることの困難であるかに見える一の見方である。しかし人間は、論議する以前に行動する。「初めに行ひありき」。そして人間の行爲は、かかる困難を、人間の才智がこれを發見する遙か以前に、すでに解決してゐるのである。ブディングのよしあしは之を食つて見たら分かる。（The proof of the pudding is in the eating.）吾々は、これらの物を・それについて吾々が知覺するところの屬性に従つて・吾々自身の用に供する其の瞬間に、吾々は、吾々の感官知覺を、決して間違ひのない試験にかけて、その正否を決するのである。これらの知覺が正しくなければ、かかる物の利用性に關する吾々の判断もまた正しくないはずであつて、これを利用せんとする吾々の企ては失敗せざるをえない。しかしもし吾々が吾々の目的を達するならば、すなはち物がその物についての吾々の表象に適應し、吾々の期待したことを果してゐることが明かになれば、これは、この範圍内で、物およびその屬性についての吾々の知覺が、吾々の外部に存在してゐる現實と一致することの實證的な證明である。』（字野弘藏氏の譯文は『マルクス・エンゲルス全集』第十二卷、五八三頁以下に載す）。

レーニンは以上の言葉を引用した後、次ぎの如く言つてゐる。『唯物論的理論が、思想による對象の映寫の理論が、こゝに最も完全なる明瞭さをもつて述べられてゐる。物は吾々の外部に存在する。吾々の知覺および表象はその映像である。この映像の吟味、その正否の決定は、實踐が行ふ。』（『唯物論および經驗批判論』、ドイツ本、九六頁。河上譯『レーニン・辯證法的唯物論について』、二二頁）。『だが更にエンゲルスの言ふところを聞



かう、——かく言ひつゝ、レーニンにはエンゲルスからの引用を續けてゐる。

『これに反して、吾々が過誤を犯したことが明かとなれば、多くの場合また久しからずして、吾々はその原因を發見する。吾々は吾々の企ての基礎となした知覺がそれ自身不完全であつたか皮相的であつたか、それともまた、その場合の事態によつては是認されないやうな仕方であるが他の知覺の結果と連絡されてゐるか、その何れかであつたことを發見するのである。吾々が吾々の感官を正しく育て上げて之を正しく使用し、且つ吾々の行動の仕方を、正規に作られ正規に使用された知覺によつて設けられた限界内に留めおくかぎり、吾々は、吾々の行動の結果が、吾々の知覺と・知覺されたる物の對象的性質と・の一致に對する證明を提供することを、見出すであらう。今日までのところでは、科學的に統制された吾々の感官知覺が、吾々の頭腦のうちに、外界に關して、その性質上現實から懸け離れてゐる表象を作り出すとか、あるひはまた、外界とそれについての吾々の感官知覺との間には、先天的不一致性があるとか、といふやうな結論には、吾々はたゞの一度も押しやられるやうなことはなかつたのである。』(レーニン、前掲書、九六頁。河上譯『レーニン・辯證法的唯物論について』、二三頁。宇野氏譯文、前掲書、五八七—八頁)。六、五、八。

## 第二章 辯證法

### 一 ヘーゲル辯證法の顛倒

マルクスおよびエンゲルスは、辯證法に對する關係において、また歴史の解釋の仕方において、フョイエルバッハと異なる。彼等はこれらの點において、フョイエルバッハを乗り越えて進み、その唯物論を著しく深化せしめた。吾々は今、歴史の解釋に關する問題は次ぎの章に譲り、こゝでは主として辯證法を問題とするであらう。

前に一言したやうに、辯證法と唯物論とは、本來切り離すことのできないものである。だが前章において述べたフョイエルバッハは、その主力をヘーゲルの觀念論の批判に注いだため、他方においては、ヘーゲルの辯證法そのものの價値を認めることができなかつた。彼等は辯證法をたゞ無用のものとして無造作に片づけたのである。しかるに、マルクスおよびエンゲルスは、フョイエルバッハの唯物論を深化することにより、ヘーゲル哲學の革命的方面すなはち辯證法を完全に活かした。かくて唯物論は辯證的唯物論となり、辯證法は唯物論的辯證法となり、本來切り離すことのできない辯證法と唯物論とが始めて一個の統一に齎らされた。

それについてエンゲルスは次ぎの如く言つてゐる。(『フョイエルバッハ論』佐野文夫氏譯本、一〇四—一〇七頁)。  
『フョイエルバッハはヘーゲルを批判的に處理せず、ヘーゲルを無用のものとして無造作に片附けた。



……ところが、ヘーゲル學派の解體から、右の外になほ別の一派が現はれた。それは本統に果實を結んだ唯一のものであつた。そしてその一派は、主としてマルクスの名を頂いてゐるものである。……ヘーゲルは無造作に片附けられはしなかつた。反對にこの一派は、ヘーゲルの革命的方面すなはち辯證的方法を取り入れたのである。』(佐野文夫氏譯文による)

これと同じことを、ブレハーノフは更に次ぎの如く述べてゐる。『マルクス主義の根本問題』、恒藤恭氏譯本、四三頁)。

『マルクスおよびエンゲルスが唯物論のために贏ちえた最大の功績の一は、正しき方法の吟味にある。フイエエルバッハはヘーゲル哲學の思辨的分子の攻撃に全力を注いだため、その辯證的方面を利用することを、あまりしなかつた。彼れはいふ、「真正なる辯證法は孤獨の思想家の獨白ではない。それは我と汝との對話である」と。けれども辯證法はヘーゲルにおいて毫も「孤獨の思想家の獨白」たる意義をもつものではなかつた。それを除いて考へても、フイエエルバッハの言は、哲學の出發點については妥當するが、その方法については妥當するものでない。この缺陷を補填したマルクスおよびエンゲルスは、ヘーゲル哲學の思辨的分子に對する攻撃において、彼れの辯證法を無視するの過てるゆるゑんを悟つた。』(恒藤恭氏譯文による)。

私は次ぎに、ヘーゲルの觀念論的辯證法は如何にして唯物論的辯證法に轉化せしめられたか、辯證法は本來如何にして唯物論的基礎の上に立つてゐるか、等の問題を明かにするであらう。

マルクス主義の方法論は、ヘーゲル哲學から、實に多くのものを承繼してゐる。私の知るかぎりにおいては、マルクスが *Engel* (偉大なる) といふ形容詞を冠した學者は、『資本論』の全巻を通じて、たゞ三人しかない。その一人は、ロシアのニコライ・チュルヌシエヴスキであり、『資本論』第一巻、カウツキー版、前付四二頁)、いま一人は、『價值形態ならびに幾多の思惟諸形態を・社會諸形態および自然諸形態を・始めて分析したる、偉大なる研究家』アリストテレスであり、(同上、本文二四―二五頁)、最後の一人は、『辯證法の一般的運動形態を、始めて包括的な且つ意識的な仕方て叙述したる偉大なる思想家』ヘーゲルであるが、(同上、前付四八頁)、そのヘーゲルにマルクスが如何に負ふところ多きは、彼れ自ら『資本論』第二版の跋文において、『私はみづから公然かの偉大なる思想家の門人たることを認め云々』と言つてゐるのを見ても分かる。實に、辯證法の一般的運動形態は、マルクスが直接にヘーゲルから承繼したものである。

だが、辯證法は、觀念論者たるヘーゲルから唯物論者たるマルクスの手に移ることによつて、觀念論的辯證法から唯物論的辯證法に轉化せしめられた。そこにヘーゲルの辯證法とマルクスのそれとの根本的差異が横たはる。かゝる差異は、最も簡單には次ぎの如く言ひ現はされてゐる。

『私の *Entwicklungsmethode* は、ヘーゲル流ではない。私は唯物論者であり、ヘーゲルは觀念論者なのだから。』(一八六八年三月六日クーゲルマンへの手紙) (*Briefe an Kugelmann*, S. 38.)

なほ『資本論』第二版の跋文(一八七三年)には、この對立が、より詳しく言ひ現はされてゐる。

『私の辯證法は、ヘーゲルのそれと根本的に相違するばかりでなく、むしろその正反對である。ヘーゲルにとつては、彼れが理念の名のもとに一の獨立的主體にまで轉化せしめたる思惟過程は、現實的なるも



の創造主であり、現實的なものはたゞその外的現象を成すにすぎない。私にあつては、これと逆に、觀念的なものは、人間の頭腦のなかで移植され轉置されてゐる物質的なものに外ならぬ』、『資本論』第一卷、カウツキー版、前付四七頁。

【註】マルクスのこの言葉を「應簡單に説明しておかう。ヘーゲルにあつては、思惟過程が理念と名づけられる一個獨立の主體に轉化されてをり、そしてその理念なるものが一切の現實を創造するのであり、現實的な諸現象はその理念なるものが現象として現はれたものにすぎぬ、とされてゐるのである。しかるにマルクスにあつては、恰もそれと逆に、すべて觀念的なものは、物質的なものが人間の頭腦に反映したものに外ならぬ。觀念的なものから物質的なものが生まれるのではなく、逆に物質的なものから觀念的なものが生まれる、理念が外的現象の創造主ではなく、外的現象が理念の本源である、といふのである。『人間の頭腦のなかへ移植され轉置され云々』といふのは、外的現象の頭腦内における反映は、決して正しいわけではなく、右が左に移置されてゐたり、上が下に轉置されてゐたりするといふ意味なのである。

ヘーゲルにとつては、世界の發展は理念の自己運動である。「絶対理念なるものは、永久の昔から——どこか知らぬが——存在してゐるばかりでなく、それはまた、存立してゐる全世界の本統の生ける魂なのである。この絶対理念は、『論理學』のなかで詳細に論じられてあるところの、そしてそれは總て絶対理念のうちには包藏されてゐるところの、すべての階段を通つて、自己そのものに發展する。ついで絶対理念は、自己を「外化」して自然に轉化する。自然のなかでは、自己を意識することなしに、自然的必然性の姿を取つて、新たな發展をなし、遂に人間のなかで再び自己意識に到達する。この自己意識は、今度はまた、歴史のなかで再び荒

削りから段々と仕上げられる。そして最後に、絶対理念はヘーゲル哲學において再び完全に自己に歸るのである。故にヘーゲルにあつては、自然および歴史のなかに現はれる辯證法的發展——言ひ換へれば、すべてのジグザクな運動と一時的の退歩とを通して、低きものより高きものへと自らを貫徹する進展の因果的聯結——は、どこか知らぬが永久の昔から、しかし思考する有らゆる人間の頭腦とはいつでも獨立に、ひとりで行はれる理念の自己運動の寫しに外ならぬ』。(エンゲルス『フォイエールバッハ論』、スツットガルト版、一九〇七年、三七—三八頁。佐野文夫氏譯本、一〇七—一〇八頁)。しかるにマルクスにあつては、これと逆に、世界の發展は物の自己運動である。彼れは『頭のなかの觀念を、唯物論的に、實在の事物の模倣と見た』。どこか知らぬが永久の昔から自己運動をしてゐるといふやうな、ヘーゲルの手において神祕化された觀念は、マルクスにあつては、人間の頭腦の外に存在する物の自己運動が人間の頭腦に反映することによつて生まれたものに外ならぬ。思惟過程によつて現實的なものが創造されるのではない。それとは逆に、物的なものが人間の頭腦のなかで移植され轉置されて——例へばカメラにうつる物の映像のやうに、右と左とが置き換へられたり、上と下とが倒さになつたりして——それが人間の觀念となるのである。觀念的なものから物的なものが生まれるのではなく、その正反對に、物的なものから觀念的なものが生まれるのである。『ヘーゲルにあつては、辯證法がさかだちしてゐる。吾々は、神祕的な外皮のうちに合理的な核心を發見するため、これをひっくり返へさねばならぬ』と、マルクスが言つてゐるのは、そのためである。

物的なるものの運動が本來辯證法的な形態をとる。それゆゑに、かゝる運動の頭腦内における反映としての思惟過程もまた、辯證法的な運動形態をとる。そしてかゝる『辯證法的一般運動形態を、始めて包括的な



且つ意識的な仕方て叙述した」ものが、ヘーゲルなのである。たゞヘーゲルにあつては、かゝる運動形態の本源を思惟過程に求めた。その點において、『マルクスの辯證法はヘーゲルのそれと正反對』なのである。だからマルクスが斯く言ふは、ヘーゲルの辯證法を單に否定する意味ではない。もしさうであれば、マルクスの方法が、ヘーゲルのそれと共に、等しく、辯證法と稱されるはずはない。兩者はたゞに絶縁されてゐないのみならず、むしろ互に一定の形態——運動の辯證法的形態——を共通にすればこそ、その共同の地盤において相對立しうるのである。マルクス主義の哲學は、ヘーゲルの辯證法を單に否定することによつてはなく、これを止揚(アウフヘーベン)することによつて生まれたものである。

マルクスがヘーゲルから承繼したものは、神祕的な外皮を取り去つた後の辯證法の合理的な核心である。しかもかゝる神祕的な雲霧を拂ふことにより、そこに合理的な核心が発見されたのは、本來ヘーゲルの辯證法が、その觀念論的な外皮にも拘らず、その實質において、實に百科辭彙的な豊富さを有する(材料の詳細なる占有のもとに行はれた)唯物論的考察に基づいてゐたからである。

『デカルトからヘーゲルに・ホッブスからフイエールバッハに至るまでの、この長い時期にわたつて、哲學者たちは、決して彼等が信じてゐるやうに純粹思惟の力によつてのみ驅り立てられたのではなかつた。その反對である。彼等を眞に驅り立てたものは、特に自然科学および産業の強大にして急激なる進歩であつた。この事實は、唯物論者の場合には既に表面に現はれたが、觀念論的哲學體系もまた、ますます、唯物論的内容を帯びてきて、精神と物質との對立を汎神論的に調和しようとしてつとめてきた。かくて結局、

ヘーゲルの體系は、方法からも内容からも(nach Methode und Inhalt)觀念論的に顛倒された一の唯物論と看做さるべきものに外ならぬ。(エンゲルス『フイエールバッハ論』、前掲ドイツ本、一七頁。佐野文夫氏譯本、五一—五二頁)。

私の見るところによれば、辯證法の唯物論的性質は、辯證法にいふところの對立物が單なる思惟の産物にあらざるところに、最もよく現はれてゐる。後に至つて委しく説明するであらうやうに、辯證法は一切の世界の進行を對立物の闘争としての自己運動において把握することを、主要なる特徴の一つとするものであるが、今その謂ふところの對立物は、決して單なる思惟により思惟そのものから形式論理的に導き出されるものでなく、むしろ總て思惟の與件たる經驗的事實の分析のうちに見えざるべきものである。例へば、世界を人間と自然といへる對立物の闘争過程として認識するといふ場合に、吾々がもし單なる形式論理に踏み止まるならば、何が故に自然が人間の對立物であるかは、到底理解されぬであらう。なほ後段に至つて明らかにするやうに、唯物史觀は人間の歴史を生産力と生産關係といへる對立物の闘争過程として把握するものである。またかゝる史觀に立脚せるマルクスの經濟理論は、資本主義社會の運動過程をもつて、商品に含まれる對立物——使用價值と商品價值と——の闘争過程となすものであるが、すべてこれらの場合においても、生産力の反對物が何故に生産關係であるか、使用價值の反對物が何故に商品價值であるか等は、單なる形式論理をもつては到底説明されえない。それは専ら事實の論理——客觀的論理——に基づくのである。もしも吾々がたゞ單に吾々の思辨に訴へただけならば、『生産力』の反對物としては『すべて生産力にあらざるもの』が、『使用價值』の反對物としては『すべて使用價值にあらざるもの』が、考へえられるに止まる。し



かるに、生産力の反對物として生産關係が、使用價値の反對物として商品價値が、吾々のために現はれるのは、吾々が現實における人間の社會的生產や、現實における商品やを、經驗的事實について分析するからであり、その經驗的事實のうちにかゝる對立物が、吾々の思惟に先だつて、すでに與へられてゐるからである。レニンはその『辯證法に關する問題』のうちに、かゝる對立物の闘争の事例として、『數學においては、正數および負數、微分および積分。力學においては、作用および反作用。物理學においては、陽電氣および陰電氣。化學においては、アトムの結合および解離。社會科學においては、階級闘争』を擧げてゐるが、これらの對立物についても、以上述べたところは、すべて當てはまる。このことは、人間の頭腦——意識——から獨立せる外的世界の運動過程が、それ自身客觀的に辯證法的な形態で行はれてをり、それが人間の意識に反映することにより、始めて辯證法的論理を形成するものであるといふことを、明瞭に證據だてる。そこには論理が先づ存在するのではない。論理が先づ存在して、その論理から事實が生み出されるのではない。論理に先だつて事實が存在し、その事實が論理を生むのである。「吾々は悟性によつて如何なる意味をも始めて自然に持ち込むのではない。吾々はたい自然の書を翻譯し解説するだけだ」。『フイエエルバッハ『肉體と靈魂との二元論に抗して』、著作集第二卷、一八四六年版、三七九頁。』『唯物論は本質的には辯證法的である』。(エンゲルス『反デュリング論』)。人間の意識から獨立して存在せる外的世界を、人間の意識が忠實に反映するとき、そこに單なる形式論理からのみは生まれ出ることのできない辯證法的論理が生まれるのである。

此の如く、辯證法そのものが外的世界の運動過程の反映であるといふ點において、それは本來唯物論と不可分離な關係にあるのである。すなはちヘーゲルの辯證法は、その本質からいへば、外的世界から獨立せ

ル  
ル  
ル

る彼れの意識から生まれたものではなく、むしろ彼れの意識から獨立して存在せる外的世界が彼れの意識で翻譯されることによつて生まれたものなのである。實にブレハーフの言へる如く、『吾々の辯證法の根柢には、唯物論的自然觀が存在する。前者は後者によつて支へられ、後者が倒れるならば前者も倒れるであらう。』『マルクス主義の根本問題』、恒藤恭氏譯本、六〇頁。尤もヘーゲルが「體系」の有する諸々の必要に迫られて、しばしば無理やりの構想に逃げ路を求めねばならなかつたことは、言ふまでもない。そしてこれについては、ヘーゲルの小反對者共が、今に至るまでやかましく騒ぎ立て、ゐるところである。(エンゲルス『フイエエルバッハ論』、佐野文夫氏譯本、二六一—二七頁)。しかしかゝる無理やりの構想——單なる觀念的構成——に屬する部分には、もちろんヘーゲルの辯證法の「合理的核心」を成すものではない。かくてヘーゲルの謂はゆる絶對理念は、個人の精神といふが如きものでは決してなく、それは全く世界——物質世界——の運動を觀念的に獨立化せしめたものに外ならぬ。たゞそれが彼れにより神祕化されて、どことも知らず永久の昔から存在してゐたもの——『現實的なるものの創造主』としての「一の獨立的主體」——とされたがゆゑに、彼れの辯證法は逆立ちせざるをえざるに至つたのである。しかし『辯證法がヘーゲルの手で蒙つた神祕化は、彼れが辯證法の一般的運動形態を始めて意識的に且つ包括的に叙述せしことを、決して妨げはしなかつた』それは方法からも内容からも實は一の唯物論に外ならなかつたからであり、それゆゑにまた、マルクスによるこれが顛倒も可能だつたのである。

【註】 エンゲルスのシユミットあての手紙(一八九一年十一月一日づけ)には、次ぎの如く述べてある。(久留間鏡造氏『シユミットに與へたエンゲルスの手紙』、四一—四三頁)。



「如何なる場合にも、君は決して、バルト氏が讀んだやうにヘーゲルを讀んではならない、すなはちヘーゲルにとつて體系構成の手段として役立つたところの、背理と奸計とを發見する目的をもつて讀んではならない。そのやうなことは純然たる書生つぼうの仕事である。もつとく大事なこととは、不當の形式のもとに、また佯偽の聯繫のうちに、正當のものを、天才的のものを、見出すことである。例へば、一の範疇または對抗から次ぎから次ぎのものに至る推移は、殆どつれに無理おしに——屢々頓才によつてなされてゐる、例へば積極と消極とが（一二〇項）「没落する」(zu Grunde gehen) 場合に、それによつてヘーゲルが「根據」(Grund) の範疇に到達するが如き、すなはちそれである。だがそのやうなことを餘りに穿鑿する事は、時間の浪費にすぎない。……」

「ヘーゲルにおける辯證法の顛倒は、次ぎの事實に基づくのである。すなはち吾々の頭のなかの辯證法は、單に自然および人類史の世界のうちに自分を實現してゆくところの、辯證法的形式に循ふ事實的發展の反影にすぎないのに拘らず、ヘーゲルは却て、辯證法をもつて「思惟の自己發展」であるとなし、従つて事實の辯證法はそれの反影にすぎないとしたのが、それである。」

「試に君が、マルクスにおける商品から資本への發展を、ヘーゲルにおける「有」から「本質」への發展と比較するならば、前者が事實から生ずる具體的な發展にそつくりそのまゝ照應するものであるに反して、後者は抽象的な構成であり、その中では極めて天才的な思想と、時に甚だ重要な轉回(例へば質の量への轉回およびその反對の如き)とが、一概念の他概念からの外見的な自己發展に作り上げられてをり、そしてその自己發展たるや、その他になほいくらでも製造されうるやうな性質のものであることを、見出されるであらう。」

同じことが、翌一八九二年二月四日づけの手紙のなかにも、述べられてゐる。(前掲書、四九頁)。序ながら茲に抄録しておかう。

「概念發展の緊密な序列は、ヘーゲルにおいては、體系にすなはち經過的なものに屬するのであつて、僕はそれを最大の弱點だと思つてゐる——尤もそれは一番機智的な點でもあるが。といふのは、彼れは困難に當面する毎に、常に機智によつて切り抜けるからである。例へば、積極と消極とが没落(zu Grunde gehen)し、それによつて根據(Grund)の範疇に導くが如きは、それである(エンチクロペディ)。そのやうな論じ方をしようとするれば、國語が異なる毎に一異なつた方法によらねばならぬであらう。君がもし「本質論」中の系列を或る他國語に反譯するならば、推移は大部分不可能となるであらう。」

## 二 辯證法的思惟の本質

しからば辯證法的思惟の本質はどこにあるか？ この問題につきブレハーフは次ぎの如く言つてゐる。

「思惟の辯證法的方法の本質は、次ぎの點から成り立つ。すなはち、思想家「思考せんとする者の意ならん——補註」は、如何なる肯定的結論にも満足してはならない。彼れは、思惟の對象のうちに、最初一瞥したときに此の對象によつて表示されるころのものと矛盾する質と力とがありはしないかを、探求せねばならぬ。かくして思想家は、對象を全面から觀察せねばならぬことになつた。眞理は、彼れにとつては、あらゆる可能なる對立意見の闘争の結果に外ならぬものとなつた。そして、從來の一方的な對象概念の代りに、此の如き方法によつて、漸次に完全な全面的な研究が出現し、對象の一切の現實的な質に關する生ける概念が構成されるやうになる。現實の説明が哲學的思惟の本質的義務となつた。そして現實に向つて極力注意を拂ふといふことになつた。從來は、この現實に研究を加へずに、自己の一



「方的な偏見に好都合なやうに、これを無造作に曲歪したのである。」(『史的一元論』、川内氏譯本、一二三頁による)。

「如何なる肯定的結論にも満足しないで、必ずそれに矛盾するところのものを探求するといふ點に、辯證法的思惟の本質がある。」例へば私が今使つてゐる紙とペン、これらは先づ互に異なつたものとして現はれる。だから吾々は普通に、紙とペンとは異なつた物だといふ。だが、少し立ち入つて観察して見ると、この紙とペンとは、兩者とも工業品であり、文房具であり、日本内地での製品であり、商品として生産されたものであり、私の私有物であり、同じ机の上に存在してをり、同様に地球上に存在してゐる、等々、共に同一物だと言はるべき無数の方面をもつてゐる。だから紙とペンとは互に異なつた物だといふことが正しければ、それと同時に、紙とペンとは同じ物だといふこともまた正しいのである。吾々は斯く観察することによつて、始めて『對象を全面から觀察する』ことになるのであり、そしてそのためには『現實に向つて極力注意を拂はねばならぬ』ことになる。「如何なる肯定的結論にも満足してはならない」といふのは、この意味である。次ぎのレーニンの説明は、以上の點をより明白にするであらう。

「……コップは疑ひもなくガラス製の圓筒であり、水を飲む器具である。しかしながら、コップは、ただこれら二つの屬性・特徴・もしくはは方面をもつてゐるばかりではなく、無數の屬性・特徴・方面・他の全世界との相互關係および「媒介」をもつてゐる。コップは、なけつる道具としても利用しえられるところの・目方のある對象物である。コップは、紙おさへとしても、または捕へた蝶を入れる容器としても、役に立つことができるし、それはまた、それが水を飲むために使用されるとか・ガラス製であるとか・そ

の形態が圓筒形もしくははその他のものであるとか・等々のことから全く獨立して、藝術的彫刻もしくはは繪畫のついでにゐる物體として價值をもつこともできる。

「更に、私がある瞬間に、コップを水を飲むために使用するならば、私にとつては、その形態が圓筒形であるかどうか・また事實それがガラスから出來てゐるかどうか・を知ることが問題にならぬが、しかしコップの底が抜けてゐないこと、これを用ひる際に縁で唇を切るやうなことはないこと、等々は、重要なことに思はれる。だが、もし私がコップを水を飲むために用ひないで、そのガラス製の圓筒形が必要なことのために用ひるならば、底の抜けてゐるコップでも、もしくは全然底のない等々のコップでも、間に合ふのである。(此の如きが先きにいふところの、コップとそれ以外の『全世界との相互關係』なるものである。——河上補。)

「學校で吾々がそれに止まつてゐるところの(そして——附け加へて言つておくが——下級のクラスではそれに止まらざるをえないところの)形式論理は、形式的の諸定義を取上げ、できうるかぎり廣く使用されるもの・もしくははできうるかぎり頻繁に目につくもの・によつて導かれ、且つこれに止まつてしまふのである。そこで、もし吾々が二つの・もしくははそれ以上の・異なつた定義をとり、しかる後これを(例へば圓筒形といふことと水を飲む器具といふこととを)偶然的に統一するならば、吾々は、對象物の若干の方面を示すところの折衷主義的な定義を得るが、——しかしそれ以上の何物でもない。

「辯證法的論理は、吾々が更に前進することを要求する。對象を現實に認識するためには、人はそのあらゆる方面・あらゆる聯絡および「媒介」を把握し探究せねばならぬ。吾々は決してそのことを完全には



果しえないであらう、しかし全面性の要求は誤謬と硬化とに對して吾々を守る。……」(河上譯『レーニン・辯證法的唯物論について』、一〇三—一〇四頁)。

右に述べてあるやうに、單なるコップ一つを取つて見ても、それは實に無數の方面をもつてゐる。それがガラス製の圓筒であり、水を飲む器具であるといふのは、吾々にとつて『最も頻繁に目につく』方面である。普通には、此の如く最も頻繁に目につく二三の方面を取り上げ、それにより、コップとは『ガラス製の圓筒形をなした・水を飲むための・器具』である、として満足してゐるのである。だが實際には——すなはち現實的なコップは——決して斯かる二つの方面だけを有つてゐるのでなく、その外に無數の方面を有つてゐるのである。なほそののみでなく、それはそれ以外の全世界との間に無數の相互關係を有つてをり、そして斯かる關係の異なるにつれて、その度毎に重要とされる方面が異なつてくる。もしそれを紙押へにするのであつたなら、それがガラス製であらうが圓筒形をなしてゐるやうが、問題にはならぬけれども、捕へた蝶を入れるとか、金魚を入れるとかいふ場合には、それがガラス製で透明であるといふことが、問題にならう。縁が缺けてしまつたなら、唇を切るおそれがあるから、水を飲むための器具としては不適當になるが、草花を活けるためには尙ほ役立つであらう、等々。算へ上げてくれば實に際限がないが、しかも斯かる無限の屬性・特徴・方面・他の全世界との相互關係をもつてゐるといふのが、現實におけるコップの眞實である。『ガラス製の圓筒形をなした・水を飲むための・器具』といふやうなものは、吾々の頭のなかにあるコップの概念にすぎないのであり、純粹にその概念通りのものが現實に存在してゐるのではない。もちろん現實に存在してゐる一定のコップが有する無限の方面を知り盡くすといふことは、實際にはできはしない。例へば一定のコップ

を指して、それは圓筒形をなしてゐるといふ場合でも、精密に觀察すれば、それは決して單なる圓筒形をなしてゐるのではなく、その面には到るところに無數の微細なる凹凸が生じてゐるであらう。またそれは奇麗に掃除がしてあつて、何物も着いてゐないといふ場合にでも、もし吾々が顯微鏡を用ふるならば、それに多數の微菌が附着してゐることを發見するであらう。なほ將來において、今日の顯微鏡以上のものが發見されたなら、そのコップには、今日吾々が發見しえたよりも、遙に多くの微菌が附着してゐたといふ事實が、發見されることもあらう。すなはち『あらゆる方面・あらゆる聯絡・を把握し探究する』といふことは、吾々の『決して完全には果しえない』ところである。だが、眞實に近づかうと思へば、吾々は絶えず『あらゆる方面』を把握し探究しようとなつて努力せねばならぬ。さもなければ、吾々は既成の概念に捉へられて、その頭の中の抽象的な(無數の方面のうちの或るものだけを抜き出したのだから、それは當然に抽象的である)概念を現實の具體的な事物に押し付けることになり、必然的に觀念論に陥るのである。要するに、『辯證法における全面性の要求は、現實的な事物の眞實に對する要求に外ならぬのである。『眞理(眞實)はつねに具體的である』との命題も、こゝから生じるのである』

マルクスは『資本論』第二版への跋文において、彼れの探究の仕方を叙述するに際し、Die Forschung hat den Stoff sich im Detail anzueignen(探究は材料を詳細に占有すべきである云々)といふ言葉を用ひてゐる。こゝに im Detail (詳細に)とは、つまり全面的にといふことである。對象の或る一方面・或る一屬性・或る一特徴のみを抜き出してくれば、吾々はそれについて如何なる結論をでも作りうる。だが、實際には斯かる結論と逆な方面が(場合によつたら非常に多數)存在してゐることが在りうるのだから、かゝる一方的な觀察



にたよるといふことは、甚だ危険である。それはたかゞ、真理の一面を表示してゐるにすぎない。だから『探究は材料を詳細に占有すべきである』といふのであり、マルクスのこの一句は、つまり辯證法の全面的探究の要求を、別の言葉で言ひ現はしたものにすぎぬのである。

辯證法は如何なる肯定的結論にも満足せず、それは、最初一瞥したときに對象によつて表示されてゐる斷案と矛盾する方面がありはしないかと次ぎから次ぎへ探求しゆくことを、すなはち常に對象を全面的に觀察することを、絶えず吾々に向つて要求する。そして斯かる要求の完全なる遂行にできうるかぎり近接しようとする態度こそが、對象を科學的に取扱ふ唯一の方法であり、それゆゑにまた、科學者は實際において現にかゝる方法を用ひつゝ、あるといふことの一例として、私は最近に公けにされた足立(文太郎)博士の軟部人類學に關する研究を、『第二貧乏物語』と題する私の隨筆のうちに引用しておいた。しかるに、辯證法的思惟の本質を少しも理解してゐない。また少しでも理解しようともしない。人々は、これに對し様々の批評を、批評といふよりもむしろ感想ともいふべきものを、述べてゐる。私はそれらの批評または感想が如何に間違つてゐるかを明かにするため、一應私の隨筆の一節をこゝに引用しよう。――

レーニンは『統一的なるものの分解と、その矛盾に満ちたる構成分の認識とは、辯證法の本質である』といひ、且つ『辯證法の内容のかゝる方面の正しさは、科學の歴史の手において證明されねばならぬ』といつてゐるが、吾々は正にかゝる證明の一つを、軟部人類學に關する最近の成果の上にも見出しうるのである。

足立博士がその數十年にわたる研究の結果に基づいて言ふところによれば、(以下『東京人類學雜誌』第四十三卷第八號に載すところの博士の講演筆記による)、『人種的の違ひはすべて絶對的のものではない』、これがその根本的な結論である。

『解剖學の専門にわたる軟部の違ひを統計的に一々並べることは、却て諸君に倦怠を來さしめるのみでありますから、たゞおわかりになるだらうと思ふ點を、少し擧げて見ます』かゝる前置のもとに、博士の列擧するところは、次ぎの如くである。

#### 〔一〕筋系統

(1) 胸骨筋 胸の皮膚の下に、時として薄き筋がある、これを胸骨筋といふ。これが日本人には、百人に十人位あるが、西洋人には百人に二人位しかない。

(2) 長掌筋 腕相撲をすると、二の腕の前側に、細長き腱がとびだす。これは長掌筋の腱である。この筋が西洋人においては日本人におけるよりも屢々缺損してゐる。

(3) 長蹠筋 膨ら脛の内にある細長き筋である、これが日本人において西洋人におけるよりも屢々缺損する。

#### 〔二〕血管系統

(1) 二の腕の前側の皮膚の下に、時として脈を打つてゐる細長き血管がある。これは日本人には極めて稀にして、西洋人には屢々である。

(2) 膝のうしろを走つてゐる一本の血管の幹が二本の枝に分かれる場所が、通常よりも高い所で分かれ



ることがある。これが日本人には稀にして、西洋人には屢である。

〔三〕末梢神経

(1) 視神経が、日本人には、ヨーロッパ人よりも、長くて且つ紆りが少ない。

(2) 脊髄より上肢に向つて出發する許多の太き神経の幹は、先づ三つほどの束になつてゐるのが通常であるが、日本人にはこれが時々合して一束になつてゐることがある。西洋人にはこれは極めて稀である。

〔四〕目

日本人の内眦の粘膜の皺のなかには、時々小さな軟骨が見出される。これも西洋人には甚だ稀である。

〔五〕皮膚

西洋人は臭ひのある汗を分泌する大きな腺を、腋の下に澤山もつてゐる。それゆゑ西洋人には大抵腋臭がある。日本人にはその腺は甚だ少い。たゞ稀に腋臭のある人があるが、その人はやはりこの腺を多くもつてゐる。

『以上はたゞ例としておわかりになりそうな數ヶ所を掲げたのですが、此の如きもの尙ほ數十ヶ所を擧げることができます。いづれも確に人種の異なるによるものである。もし餘り確でないものまでも數へあぐれば、まだ非常に澤山ある。』

以上の諸特徴は何を意味するか？ 吾々は、種々なる動物との比較により(すなはち系統發生學的に)あるひは人間が母の體內に宿つてから生れるまでの歴史を調べることにより(すなはち個體發生學的に)それらの意味を確めることができる。

これを先きに掲げた諸特徴について見るに、〔一〕の(1)および(2)、〔三〕の(2)、〔四〕等の特徴は、人間よりも下等な動物において、より多く存在するところのものである。だからそれらの點においては、日本人は西洋人よりも下等な人種である。だが他方においては、それ以外のものは、日本人が西洋人よりも上等な人種であることを語る。

そこで博士は次ぎのやうに言つてゐる。『西洋人は、自分の體に、他人種よりも劣等な場所があるといふことを、知らなかつた。しかるに吾々は、日本人の軟部研究によつて、彼等の體において諸所に劣等の點あることを、見せつけた。彼等の間には、最初、大分不思議に思つた連中が多かつた。今日でもなほ不思議に思つてゐる人がないでもないが、しかし近來は彼等も大分悟つてきた。元來西洋の學者は、甲人種は乙人種よりも總ての點において優り、あるひは總ての點において劣ると考へてゐた。しかしこれは彼等の誤りである。現にさきに述べた長掌筋と長腕筋とは、同様の性質のもので、共に人類には漸次消滅すべき筋であるにも拘らず、長掌筋からいへば日本人が劣り、長腕筋からいへば西洋人が劣つてゐる。これらの適切なる例を見て、彼等も今日では、ある點は甲人種に、ある點は乙人種に、あるひは優りあるひは劣るといふことを知るに至つた。』

以上私が博士の講演を比較的詳細に引用したのは、それが數十年にわたる忠實なる科學的研究の結論であるといふこと、しかも博士はかゝる研究により辯證法的論理の正しきことを無意識的に證明されてゐるといふこと、およびかゝる事例は未だ西洋人の著述のうちに現はれてゐないといふこと、等のためである。』



私は嘗て以上の如く述べたのであるが、今これを、先きに掲げたブレハーノフの辯證法に關する説明と、對照して見よう。

西洋人は日本人よりも優れた人種であるといふのは、西洋人と日本人とを最初一瞥したときに生ずる一の肯定的結論である。だが辯證法は、吾々に命ずるに、かゝる肯定的結論に安んぜず、むしろ之に矛盾した方面がありはしないかを探求することを、もつてする。そこで吾々は、ある一部分——すなはち對象の或る一方面または一屬性——だけについてでなく、例へば筋、血管、神經、内臓、等々について、次ぎく／＼に研究して見る。さうすると、果して相矛盾した諸結果が出てくる。すなはち或る部分では、西洋人が日本人より優つてをり、また或る部分では、逆に日本人が西洋人に優つてゐる。そして吾々が研究を進めれば進めるほど、此の如き對立的な關係が無數に生じてくる。そしてそれらを總て綜合するときに、日本人と西洋人との人種としての異同が、全面的に理解される。このことは、吾々が現實に向つて極力注意を拂ふことによつてはじめて實現される。現に足立博士は、過去數十年間、數知れぬ屍體の種々なる部分にわたつて、極めて忍耐強き解剖學的研究を繼續されたのであり、且つそれゆゑにこそ、日本人は西洋人に劣つてゐると同時に優れてゐるといふ矛盾を含んだ、一の辯證法的結論に到達されたのである。辯證法は、ヘーゲルの手にあつては、觀念的な神祕の衣に蔽はれてゐた。しかし、その神祕の衣を取り去つて見れば、それは畢竟するに、客觀世界そのものの辯證法的性質が人間の頭腦に反映されることにより、人間の自覺に到達したものに外ならぬのである。

さて右に述べたる如き私の説明に對し、土田杏村氏は『中央公論』（四九八號、昭和四年七月一日發行）において、次ぎの如き批評を加へられてゐる。

「河上氏があげられた日本人の優劣云々の命題は、正しく唯物辯證法を説明する例であるか？ 唯物辯證法的命題は、「矛盾に充ちた・排斥し合ふ・對立した諸傾向」を含み、肯定はその反對物たる否定に轉化するものでなければならぬ。しかるに長掌筋に關して日本人が西洋人に劣ることと長蹠筋に關して日本人が西洋人に優れることは、如何なる點で矛盾し、相對立するか？ 長掌筋に關して日本人が西洋人に劣ることは、それ自身のうちに含む矛盾により、轉化して、長蹠筋に關し日本人が西洋人に優ることとなりうるか？ 河上氏は普通の形式論理をさへ知つてゐられない。河上氏は右の命題を「かくて我は彼に優ると同時に劣るといふところの・それ自身に矛盾を含んだ・一個の命題」と呼ばれるけれども、いつの間にか優劣の關說せられてゐる長掌筋と長蹠筋とは、わきへ打ち捨てられてゐる。二つの命題は全く別のものについての關說だ。これを合して一つの命題にしても、何等の矛盾をも含みはしない。河上氏は長い二本の足を持つてゐる、河上氏は短い二本の手を持つてゐる、この二つの命題が何の矛盾を含むか？ 河上氏は純粹のマルキシストにならうとする意識的努力を持つ、河上氏は觀念的經濟學者に止まらうとする無意識的傾向を持つ、この二つの命題にして初めて唯物辯證法的論理の對立になりうるのだ。『現實のものの性質を分析すれば、一つの命題に矛盾し對立する命題は、河上氏の例を取れば、必ずしも二つだけではなく幾つでも事實の分析に即して得られるはずである。例へば、鼻の高さに關しては日本人と西洋人との間に優劣がない、爪の色に關しては日本人と西洋人との優劣は無理であるともいへる



のである。河上氏の論理をもつてすれば、これらの命題もみなそれ／＼に矛盾し對立する辯證法的命題であるか？ 結局運動は何れの方向に起り、これらの命題の何れが消滅し他に轉化しなければならぬのであるか？』

私が足立博士の軟部人類學に關する研究の結果を引用して述べたことに對する・土田氏の批評は、以上が全部である。この土田氏の批評に答へておくことは、問題に對する讀者の理解を深めるために役立つであらうから、それに對し私はこゝに簡単な説明を加へておく。

右に引用した範圍内における土田氏の言説には、辯證法に關する二つの謬見が含まれてゐる。その一は、辯證法における對立物の何物たるやを理解せざるために生ずる謬見、その二は、タアルハイマアの言葉を用ふれば、事物の連絡を『状態として、または靜的に』觀察することにより、その『横断面』を示す場合と・事物の連絡を『過程として、進行として、または動的に』觀察することにより、その『縦断面』を示す場合との區別を理解せざるために生ずる謬見、これである。(これらの諸問題は、後の節に至つてなほ委しく説く。こゝには、土田氏の誤謬を明かにするため必要なかぎりにおいて、これに觸れるにすぎない。)

氏はいふ、『唯物辯證法的命題は、矛盾に充ちた・排斥し合ふ・對立した諸傾向を含み、肯定はその反對物たる否定に轉化するものでなければならぬ』と。私はいふ、これが先づ間違ひである。最も解かり易い例を示さう。『商品は、使用價值と交換價值との・この二つの對立物の・直接的な統一である』。これはマルクスが商品について立言した『唯物辯證法的命題』である。辯證法は、統一的なものを分解してその矛盾に充ちたる構成成分を認識することを、要求する。商品は一個の統一物である。これを分解して、使用價值および交換價值

といふ二つの對立物を發見するのは、その矛盾に充ちた構成成分を認識するゆゑである。かくて『商品は、使用價值と交換價值との・この二つの對立物の・直接的な統一である』といふ一の肯定的な辯證法的命題が生まれる。だが、如何にそれが辯證法的命題であり、従つて如何にそれが事物のうちに含まれてゐる矛盾を指摘してゐようとも、この命題それ自身が矛盾を含んでゐるのではなく、従つてこの肯定的命題がそれ自身のうちに含む矛盾により、轉化してその反對物に推移するはずはないのである。(私が『日本人は西洋人に劣つてゐると同時に優つてゐるといふ・矛盾を含んだ・一の辯證法的命題』と言つたのは、言葉が不正確であつた。正確には『矛盾を含んだ』の代りに『矛盾した事實の認識を含んだ』とあるべきだ。これは土田氏を誤解せしめるための一助となつたかも知れないが、もしさうであつたらお氣の毒なことであつた。)

土田氏は私に向つて、『長掌筋に關して日本人が西洋人に劣ること、長蹠筋に關して日本人が西洋人に優ることとは、如何なる點で矛盾し對立するか。二つの命題は全く別のものについての關説だ。これを合して一つの命題にしても、何等の矛盾を含みはしない』といふ疑問と、『長掌筋に關して日本人が西洋人に劣ることとは、それ自身のうちに含む矛盾により、轉化して、長蹠筋に關し日本人が西洋人に優ること、なりうるか』といふ疑問と、これら二つの疑問を提出することにおいて、『河上氏は普通の形式論理をさへ知つてゐられない』と斷定されてゐるが、氣温のせいも、さすが土田氏の頭腦も茲では混亂を極めてゐる。

私は氏の第一問に答へていふ、長掌筋に關して日本人が西洋人に劣るといふことと、長蹠筋に關して日本人が西洋人に優るといふことは、氏の言はれる如く『全く別のものについての關説』ではなく、双方とも西洋人との比較における日本人の人種的特徴といふ同一の對象についての立言である。たゞ異なるところは、



日本人を西洋人と比較するために抽出された方面のみである。すなはち前者は日本人が西洋人に劣る方面の事實を指摘してをり、後者は逆に日本人が西洋人に優る方面の事實を指摘してゐるのであり、(かく種々なる方面について觀察することにより、吾々の認識ははじめて全面的になる)、かくてこれらの二つの事實は、一方は日本人の劣つてゐる方面を、他方はその優つてゐる方面を、指摘してゐるといふ點において、互に相對立し矛盾してゐるのである。この場合、對立と矛盾とは、これら二つの事實の間に存する。しかるに土田氏がその第二問において、『長掌筋に關して日本人が西洋人に劣ることは、それ自身のうちに含む矛盾により、轉化して、長腕筋に關し日本人が西洋人に優ること、なりうるか』と質問されてゐるのは、何としても滑稽である。もし唯物辯證法的命題といふものが左様なことを要求するものであるならば、例へば、『商品は使用價值であり交換價值である』といふ命題の前半、すなはち商品は使用價值であるといふことは、『それ自身のうちに含む矛盾により、轉化して』商品は交換價值であるといふこととなりうるのでなければならぬ。もしさうでなかつたなら、『商品は、使用價值と交換價值との』この二つの對立物の、直接的な統一である』といふマルクスの命題は、辯證法的な命題ではないといふことになる。これはなんと馬鹿けた話であらう。

土田氏が斯かる馬鹿けたことを持ち出されるに至つたのは、氏が辯證法における『反對物への轉化』の問題を知つてゐながら、しかも極めて不十分にしか知つてゐられないためである。それ自身のうちに含む矛盾により一定の事物がその反對物に轉化するといふのは、事物の連絡を『過程』として、進行として、または動的に觀察することにより、その『縦断面』を示す場合のことである。例へば、幼蟲がそれ自身のうちに含む矛盾のために、成長して蛹となり、更に蛹がまたそれ自身のうちに含む矛盾のために、發育して成蟲となる、といふ

が如きが、すなはちそれである。そしてこの場合、發展過程の全體(それ自身がまた一個の統一物)についていへば、蛹は幼蟲の否定によつて生ずるところの、幼蟲の反對物であり、また成蟲は蛹の否定によつて生ずるところの、蛹の反對物なのである。

かゝる見地からすれば、使用價值および交換價值といふ二つの矛盾物によつて構成されてゐる商品そのものは、それ自身のうちに含む矛盾のために、運動するものたらざるをえない。諸商品の交換過程は、すなはち斯かる矛盾の展開であると同時に、かゝる矛盾の一部分な且つ一時的な解決である。この解決は、一定の商品が貨幣となることによつて實現される。この場合、貨幣は商品の反對物である。すなはち一定の商品は普通の商品たることを否定することによつて、その反對物たる貨幣に轉化するのである。だが、此の如きはすべて商品そのものの發展過程に關する問題である。もしこれを、商品を分析してその矛盾に充ちた構成成分を認識することによつて成立つた命題と混同し、かゝる命題自體もまたそれ自身のうちに含む矛盾のために動かねばならぬもの如く考へたならば、それはめちやくちやくといふものである。

もちろん一定の事物に關する命題も、その事物に關する吾々の認識が窮極的に完全なものでないかぎり、一定の矛盾のために運動して、最初のものとは異なつた或る他のものに轉化するであらう。すべて運動を生むものは何等かの矛盾であるがゆゑに、運動を理解するためには、吾々はいつもその源泉たる矛盾を理解せねばならぬ。かくて一定の命題は、あるひはそれ自身のうちに含む矛盾により、あるひはその命題と現實の事物との間に存する矛盾により、轉化して自分自身以外のものとなるであらう。ヘーゲルの哲學體系は、それ自身の内容全體を絕對的眞理であると主張することにおいて、あらゆる獨斷的なものを拒否する彼れの辯



證的方法と矛盾してゐた。そしてかゝる矛盾のために、ヘーゲル哲學の體系は否定された。久しく西洋人の間に行はれてゐたところの・日本人はすべて人種的に西洋人に劣つてゐるといふ命題は、實際には現實の事實と矛盾してゐる。だからそれは、この矛盾のために否定されて、日本人は西洋人に劣つてゐると同時に優つてゐるといふ命題に置き代へられた、等々。

およそこれらの場合は、事物の發展過程を『對立物の闘争過程』として把握することにより、『反對物への轉化』を一の『自己運動』として理解する場合に屬するのである。そして土田氏の奇妙なる質問は、——『長掌筋に關して日本人が西洋人に劣ることは、果してそれ自身のうちに含む矛盾により、轉化して、長掌筋に關して日本人が西洋人に優ることとなりうるか?』『結局運動は何れの方向に起り、これらの命題の何れが消滅し他に轉化しなければならぬのであるか?』等々は、——以上述べ來つたやうな・事物の連絡を進行または過程として動的に觀察する場合の問題を、少しばかり嚙つて、これを變なところへ應用されたことから、生じたものに外ならぬのである。

土田氏の疑問の第三は、『現實のものの性質を分析すれば、一つの命題に矛盾し對立する命題は、河上氏の例を取れば、必ずしも二つだけではなくて幾つでも事實の分析に即して得られるはずである。例へば鼻の高さに關しては日本人と西洋人との間に優劣がない、爪の色に關しては日本人と西洋人との優劣は無記であるともいへるのである。河上氏の論理をもつてすれば、これらの命題もみなそれぞれに矛盾し對立する辯證法的命題であるか。結局運動は何れの方向に起り、これらの命題の何れが消滅し他に轉化しなければならぬのであるか』といふのだが、これはつまり前述の第二疑問と同じ誤解に立脚してゐるのだから、特に取り上げ

て説明する必要はない。たゞ新たな問題は『一つの命題に矛盾し對立する命題は必ずしも二つだけではなく幾つでも得られるはずである』といふ點にあるかと思ふが、これはそれで一向差支ないのである。例へば、日本人は西洋人に比して人種的に劣等であるといふ一つの命題があるとき、それに對して、長蹠筋に對しては日本人が西洋人に優るといふ命題、血管のしかくの點に對してはやはり日本人が西洋人に優るといふ命題、更にまた視神經に對しても同じく日本人が西洋人に優るといふ命題、腋臭腺に對してもまた日本人が西洋人に優るといふ命題、等々が對立しうるのである。もしさう澤山にならぶのが氣になるといふのなら、これを一纏めにして、日本人は長蹠筋、血管系統の或る部分、視神經、腋臭腺、等々に對して西洋人に優るといふ一つの命題となし、それをば、日本人は西洋人に劣るといふ命題に對立せしめてもよからう。そんなことは、事物の本質からいへば、どうでも可いことだ。元來、矛盾だの對立だのいふ言葉を形式論理的に解釋すればこそ、かゝる疑問が生ずる。かゝる疑問を提出するものは、何故使用價值と交換價值とが對立物であるか、何故生産諸力と生産諸關係とが對立物であるか、使用價值の對立物は非使用價值であり生産諸力の對立物は非生産諸力ではないか、等々の疑問をも提出するであらう。これらの疑問はすべて辯證法における『事實の客觀的論理』を理解しなければ解けないのであるが、その委細はなほ後の節に至つて述べるであらう。

たゞ一言注意しておく。吾々が事物の連絡をその發展に對して動的に觀察する場合には、すでに述べたやうに、これを對立物の闘争として見るのであるが、すでに問題が對立物の闘争である以上、それはいつでも『二者闘争的』(zweischlächtig)である。例へば源平は紅白に分れ、圍碁は黑白に分れ、相撲にあつては東西



に分れる、等々。その関係をレーニンは次ぎの如く指摘してゐる。「數學においては、正数および負数、微分および積分。力學においては、作用および反作用。物理學においては、陽電氣および陰電氣。化學においては、アトムの結合および解離。社會科學においては、階級闘争。〔すなはち搾取階級と被搾取階級との對立、あるひは生産關係と生産力との對立。——河上補〕。かゝる場合にはいつも二つのものが對立する。土田氏が、「一つの命題に矛盾し對立する命題は、河上氏の例を取れば、必ずしも二つだけではなくなるはずだ」といふことを、不都合に感じられたのは、あるひは前記の如き場合の問題を履き違へられたのかも知れないが、その問題ならば、やはり吾々が後の節において詳論するところであるから、こゝにはこれ以上の説明を省略しておく。

### 三 對立物の統一と統一物の分解

レーニンは、ロシア語の雜誌「マルクス主義の旗の下に」(一九二四年一月二號)に現はれた彼れの哲學上の論文において、次ぎの如き辯證法の定義を掲げてゐる。(河上譯「レーニンの辯證法」、改訂版、六八頁)。

「辯證法とは、如何にして對立物が同一でありうるし且つあるか、(如何にして對立物はさうなるのか)如何なる條件のもとに對立物は互に轉化して同一となるか、何故に人間の悟性はこれらの對立物を死んだ凝固的なものとしてでなしに、むしろそれらを生きた・條件づけられた・運動的な・相互に轉合し合ふものとして觀察するか、といふことの學理である。」

彼れはまた「辯證法の問題に關して」(彼れの死後公けにされた貴重なる斷章)の冒頭において、次ぎの如く述べてゐる。

「統一的なるものの分解(Spaltung)と、その矛盾に満ちたる構成成分の認識とは、辯證法の本質(本質的なもの)の一、たとひ唯一の基礎的または根本的特性ではなくとも、基礎的諸特徴の一)である。……

「辯證法の内容のかゝる方面の正しさは、科學の手において證明されねばならぬ。……

「對立物の同一性(より正しくいへば、むしろその「統一」——もつとも「同一性」と「統一」との表現の區別は、この場合さして本質的なものではない、ある意味においては兩者とも正しい)は、(精神および社會を含めての)自然のすべての現象と進行とにおける、矛盾に充ちた・相互に排斥し合ふ・對立した・諸傾向の認識(發見)を意味する。」(河上譯「レーニンの辯證法」、八七—八九頁)。

右に掲げたる如きレーニンの言葉は、如何なることを意味するか? 本節においては、主としてそれを問題とするであらう。

私はすでに前節において、辯證法的思维の本質は、如何なる肯定的結論にも満足しないで、思维の對象のうち、最初一瞥したとき此の對象によつて表示されるものと矛盾する質と力とがありはしないかと、探究する點にある、と述べたが、こゝに掲げたレーニンの言葉も、これを詮じつめるならば、私が前節において述べたところと、結局は同じ事柄を指示することになるのである。

一二の實例について之を説明しよう。私はすでに前節において、次ぎの如く述べた。——例へば私が今使つてゐる紙とペン、これらは互に異なつたものとして現はれる。だから吾々は普通に、紙とペンとは異なつた物だといふ。だが、少し立ち入つて觀察して見ると、この紙とペンとは、兩者とも工業品であり、文房具



であり、日本内地での製品であり、商品として生産されたものであり、私の私有物であり、同じ机の上に存在してをり、同様に地球上に存在してゐる、等々、共に同一物だと言はるべき無数の方面をもつてゐる。だから紙とペンとは互に異なつた物だといふことが正しければ、それと同時に、紙とペンとは同じ物だといふこともまた正しいのである。

右の例をレーニンの言葉に當てはめれば、紙とペンとは對立物であり互に異なつた物である、だがこの對立物は、以上の如き意味において、互に同一でありうるのである。

たゞに紙とペンとは限らない。吾々の眼にするとところの一切の物は、實に多種多様を極めてゐるけれども、それらの物はすべて自然の一部であるといふ點において同一であり、あらゆる多種多様の對立物が一個の自然に統一されてゐるのである。

今吾々の見方を以上と逆に統一物そのものから出發させたならば、今度は、統一物を分解してその矛盾に満ちた構成成分を認識するといふことが、吾々の仕事になる。例へば大自然を取つて見よう。この大自然は、狹義の自然と人間とから構成されてゐるのであり、そしてその自然と人間とは廣義の自然に含まれてゐる對立物である。人間は自然に向つて對立してゐるのであり、その意味において人間と自然とは對立物である。だが、すでに第一章で述べたやうに、人間そのものがまた自然の産物であり、自然の一部であるから、その意味においては、人間と自然といへる對立物は、『同一でありうるし且つ同一である』。大自然と反對に、極めて小さなもの例へば商品を取つて見よう。それは最初の一瞥においては單なる使用價值物であると見える。試に市場(例へばデパートメント・ストア)に行つて見るに、そこに陳列されてゐるところの衣服類・食料

品・家具・文房具・書籍等々、それらはいづれも吾々の必要とする物であり、謂はゆる使用價值物である。だが、少し立ち入つて見ると、それらの商品は、たゞ使用價值物であるといふ一面をもつてゐるばかりでなく、更に商品價值としての他の一面をもつてゐる。すなはち商品である以上、それらのものは皆な一定の價值(商品としての價值——商品價值)をもつてをり、いづれも何圓または何十圓に値するものである。だからマルクスは商品进行分析して、使用價值および(商品)價值をその構成成分として發見したのであるが、この場合、使用價值と價值とは——マルクスが『資本論』において委しく説明してゐるやうに——商品なる統一物を構成してゐるところの・相互に排斥し合ふ・對立物である。すなはちマルクスが『資本論』において試みてゐる商品の分析は、レーニンのいふ「統一的なるものの分解と、その矛盾に充ちた構成成分の認識」なるものに、恰も相當してゐるのである。

ところで、この商品の場合について見ても分かるやうに、吾々がもしその商品の或る一面をのみ見るならば、前に言つたやうに、それは單なる使用價值として吾々の眼に映じる。そこで例へば、商品は使用價值であるといふ一個の肯定的命題が成り立つ。しかるに辯證法的思惟は、すでに前節で述べたやうに、如何なる肯定的結論にも満足せず、思惟の對象のうちに、最初一瞥したとき此の對象によつて表示されるものと矛盾する質と力とがありはしないかと、探究することを要求するのであるが、今この要求に従つて、吾々が、商品は使用價值であるといふ肯定的命題に満足せず、思惟の對象たる商品には、それと矛盾する方面がなほ他にありはしないかと探究するとき、吾々は更に、商品は價值であるといふ他の命題を得ることになるのである、かくして商品は使用價值であり同時に價值であるといふことが發見されるのである。



私が以上述べ來りたるが如き對立物の統一を、タアル・ハイマアは對立物の融合と名づけてゐる。序ながら彼れ自身の言葉を引用しておかう。

『辯證法の最も一般的な・最も包括的な・それから一切爾餘のものが導き出されるところの・法則は、對立物の融合の法則 (das Gesetz von der Durchdringung der Gegensätze) である。この法則のうちには一個の二重物が横たはつてゐる。第一には、一切の物・一切の進行・一切の概念は、結局において一個の絶對的統一に齎らされるといふこと、言ひ換へれば、如何なる對立・如何なる差別も、結局において一個の統一に齎らされえないものはないといふことが、そのうちに含まれてゐる。第二の・同じやうに無條件的に妥當することとは、一切の物は、それらのものが同一であると同じやうに、同時にまた絶對に異なり・しかも絶對にまたは無限に對立してゐる、といふことである。吾々はこの法則を、一切の物の對極的統一の法則と名づけることもできる。』(『辯證法的唯物論入門』——二種の譯本あり、——ドイツ本、一一二頁)。

#### 四 差別の相對性

以上述べたる如く、辯證法の本質は、事物に對する全面的觀察(そのことは第二節で述べた)または對立物の同一性の認識(そのことは第三節で述べた)といふ點に存するが、この根本特徴から種々なる結果が生じる。こゝではその最も主なるもののみを述べておく。

先づ第一に、事物の境目すなはちAとBとの差異は、すべて相對的なものである、といふ認識は、その一つである。

私は先きに、足立博士が多年にわたり日本人の屍體を解剖することにより、日本人と西洋人との人類學的比較をなした結果、博士自身の言葉によれば、『人種的の違ひはすべて絶對的のものではない』といふ結論に達せられたことを述べたが、これがすなはち物の差別はすべて相對的であるといふことの一つの實例である。すでに引用した博士の言葉から、當面の問題に關係のある部分を、今一度引用して見よう。博士は次ぎの如く述べてゐられるのである。

『西洋人は、自分たちのからだに、他人種よりも劣等な個所があるといふことを、知らなかつた。しかるに吾々は、日本人の軟部研究によつて、彼等のからだにおいて諸所に劣等の點あることを、見せつけた。彼等の間には、最初、大分不思議に思つた連中が多かつた。今日でもなほ不思議に思つてゐる人がないでもないが、しかし近來は彼等も大分悟つてきた。元來西洋の學者は、甲人種は乙人種よりも總ての點において優り、あるひは總ての點において劣る、と考へてゐた。しかしこれは彼等の誤りである。現にさきに述べた長掌筋と長蹠筋とは、同様の性質のもので、共に人類には漸次消滅すべき筋であるにも拘らず、長掌筋からいへば日本人が劣り、長蹠筋からいへば西洋人が劣つてゐる。これらの適切な例を見て、彼等も今日では、ある點は甲人種に、ある點は乙人種に、あるひは優りあるひは劣るといふことを知るに至つた』。

辯證法なるものは、頭の中からたゞ考へ出したものではなく、事物それ自身が辯證法的になつてゐるために、それを忠實に吾々の頭腦へ反映して見ると、そこには必ず辯證法的な命題——例へば人種的の違ひはすべて絶對的のものではないといふやうな命題——が、期せずして成立することになるのである。



以上述べたところは、ほんの一例である。およそ人種の問題に限らず、世の中の一切の事物は、甚しく多面的なものであり、複雑極まりなきものであるから、すべての事物の境目なるものは、充分に探究して見ると、普通に考へられてゐるやうにはつきりしてゐる筈のものではないのである。

エンゲルスは吾々に向つてそのことを種々の機會に注意してゐる。「反デューリング論」への一八八五年度の序文においては、彼れは自然科学との關聯において次ぎの如く述べてゐる。

『多量に集積される・純經驗的な・諸發見を整理するといふだけの必要によつて、理論的自然科學に強要された革命は、最も頑強な經驗家にすら、自然現象の辯證法的性質をますます意識せしめずにはおかない種類のものである。古くからの凝固的な對立、鋭い・乗り越すことのできない・限界は、段々に消滅する。最後の「真正な」ガスをすら液体化せし以來、ある物體が液體形かガス形か區別することのできない状態におかれうるものが證明されて以來、凝集状態も以前の絶對的な性質を残らず失つてしまつた。完全なガスにあつては、個々のガス分子が運動する速力の自乗が、同じ温度のもとでは分子重量と逆比例する、といふ力學的なガス理論の命題によつて、熱すらが直接に測定のできる運動諸形態の一種となつた。十年以前にはまだ、新たに發見された運動の大原則は、單にエネルギー保存の法則として、單に運動の不滅不生の表現として、すなはち單にその量的方面からのみ考へられてゐたが、この狹隘な消極的の表現は、次第々々にエネルギーの轉化なる積極的の表現によつて排除され、かくて過程の質的内容がはじめて正當に理解され、世界外の創造者に對する最後の想起が消滅したのである。力學上のエネルギー（謂はゆる機械的の力）が電氣や熱や潛勢状態のエネルギー等々に轉化することがあつても、また逆に

後者が前者に轉化することがあつても、運動（謂はゆるエネルギー）の量は變化しないものである、といふことは、今日ではもはや何等か新たなものとして説法される必要はない。……また生物學が進化論の光をもつて研究されるやうになつて以來は、有機界の領域においても、分類の凝固的な境界線は次第に消滅した。殆んど何れへも分類することのできない中間體が日々増加し、より精密な研究は有機體を一の種類から他の種類へ移し、かくて殆んど信仰箇條となつてゐた區別の標準は、その無條件的な妥當性を失つた。今日吾々は産卵する哺乳動物を知つてをり、もし報告が確かであれば、匍匐する鳥をすら知つてゐる。……だが、近世の理論的自然科學にその狹隘な形而上學的性質を賦與したものは、宥和することも融合することもできぬと考へられた兩極的な對立、無理に固定された境界線と種類別とである。かかる對立や區別は、自然のなかにはあるが、しかしたい相對的な妥當性をもつにすぎない、といふことの認識——かかる認識が自然の辯證法的把握の核心をなす。人々は、自然科學において集積される諸々の事實に強制されつゝ、かかる認識に到達しうる。もし吾々が斯かる事實の辯證法的性質に對し、辯證法的思惟の法則の意識を持ち合はして行くなれば、吾々は一層容易にかゝる認識に到達しうる。いづれにせよ今や自然科學は、もはや辯證法的な總括を免れえないほどに發展してゐる。（ドイツ本、前付、一七一—一九頁。河野・林兩氏譯本、一五一—一八頁）。

私が先きに引用した足立博士の人類學的研究は、エンゲルスがこゝに言つてゐることの好適例である。足立博士が數十年にわたる人體の解剖によつて『多量に集積された・純經驗的な・諸發見』は、果して『分類の凝固的な境界線』を消滅せしめてゐる。人種的な對立や區別は、事實あるにはあるが、『しかしたい相對的な



妥當性をもつにすぎないといふことの認識」か、る種類の認識は、研究の如何なる領域においても、吾々が事實をより多量に集積し、研究対象をより多面的に観察すればするほど、吾々の到達せざるをえざる結果である。何故なれば、すでに繰り返し述べる如く、現實の事實そのものが無限に複雑であり無限に多面的であるために、吾々が眞實に近づけば近づくほど、事物の境目は決して、コンクリートの壁で仕切つたやうにはつきりしてゐるものではないといふことを、発見せざるをえないからである。辯證法はそれが辯證法なるがゆゑに正しいのではない。自然でも社會でも、吾々はその眞實に近づけば近づくほど、形而上學的な・觀念的な・頭の中で作り上げた・概念は、役に立たなくなるのであり、これに反し、現實に即して出來うるかぎり客觀的な事實を忠實に頭腦に反映しようとする・唯物的な・現實的な・非形而上學的な・すなはち辯證法的な・見方が、正しいといふことが、一步毎に発見されてくるのである。だからエンゲルスも言つてゐるやうに、辯證法的な思惟といふものは、『經驗的な自然研究と全く同じだけの極めて長い經驗的な歴史をもつ思惟』の歸着點なのであり、(前掲書、ドイツ本、一五頁)、辯證法なるものは、『人間の思惟の發展史において一貫した絲條をなしながら、思惟する人間をして次第に意識するに至らしめたところの、その法則』に外ならぬのである。(前掲書、ドイツ本、一五頁)。

彼れはなほ、(一八九五年三月十二日づけのシュミットあての手紙のなかで)、同じ問題を異なつた視角から次ぎの如く述べてゐる。

『吾々が進化論を承認する際間から、有機的生命に關する凡ての吾々の概念は、單に近似的にのみ現實に照應する。もしさうでないならば、變化といふものは全然ないことになるであらう。有機界において

概念と現實とが絶對的に一致するときは、すなはち進化の終りを告げるときである。例へば、魚の概念は、水中の生活と腮による呼吸とを包含する。この概念を打壞することなくして、如何にして君は魚から水陸兩棲動物に達せんとするか？ そしてこの概念は實際に打壞された、そして吾々は、浮袋を肺臓に進化せしめて空氣を呼吸してゐる多數の魚を知つてゐる。また如何にして君は、一方もしくは双方の概念を現實と衝突せしむることなくして、産卵する爬虫類から産兒する哺乳類に到達することができるか？ そして現に吾々は、單孔類において、産卵する哺乳類の一の全小綱をもつてゐる、——僕は一八四三年にマンチニスタアで、鴨嘴類の卵を見たことがある、そして高慢ちきな狭い量見で、哺乳動物が産卵しうるなどといふ馬鹿な話があるものかと、嘲笑つたものだが、しかしそれは、今では明かに證明されてゐる。……』(久留間敏造氏譯『エンゲルスの手紙』、五八―五九頁)。

私は次ぎに社會現象の領域について、一二の實例を挙げよう。今我國では新勞農黨の樹立の計畫に對し、『プロレタリアートの黨はたゞ一つしかない』のであり、それ以外の黨はすべて似而非無產黨であるとの一般理論に基づき、樹立さるべき新勞農黨は當然に似而非無產黨となるの外はないとの斷定から、強い反對論が或る一部に起つてゐるが、この問題についても、吾々が單に一般的理論に捉はれることなしに、——か、る理論はそれが一般的であるといふの故をもつて當然に抽象的であるが、——より具體的に觀察したならば、プロレタリアート黨と他の諸黨との境目もまた、決して截然としてゐるものではないといふことを、発見するに至るであらう。私は次ぎにその一實例を挙げよう。



エジプトの社會黨は、コミンテルン第四回世界大會で、コミンテルンへの加盟を條件づきで許されたが、そのときの條件は、——一九二二年十一月三十日の會議で我が片山潛氏がそれを朗讀してゐられるが、——委員會の決議の第二項に次ぎの如く誌されてゐる。

『しかし委員會は、つぎの諸條件が實現されるまで、エジプト社會黨の加盟が延期されることを、必要であるとした。』

(a) 黨は一定の好ましからざる分子を排除すること、

(b) 黨は大會を召集し、その大會において、現在では黨外に存在してゐるエジプト内の共產主義的分子にしてコミンテルンの二十一箇條を承認する人々をば、エジプト社會黨に入黨せしめるやう、努力を試むべきこと、

(c) 黨はその名稱を「エジプト共產黨」と改めること。『プロトコール』、八二五頁。

すなはちエジプトの社會黨は、一九二二年末には、その構成分子の若干の取捨によつてプロレタリアート黨となるべき實質を備へてゐたのである。これによつて見ても、プロレタリアート黨と他黨との差別は決して絶對的なものでないことが、承認されるであらう。

更に他の一例を擧げるならば、商品と貨幣とは對立物である。だが、マルクスが『資本論』において委しく展開してゐるやうに、貨幣は商品的一種に外ならない。(拙著『經濟學大綱』、上篇第一章第三節參照)。商品世界のうちの或る特種の商品が、他の一切の諸商品のために一般的等價物たる地位を獨占することになれば、それによつてその特種の商品は貨幣に轉形するのである。そのみでなく、資本に轉形した貨幣は、例へば利

附資本として機能する場合に、資本としての資格において商品となる。(拙著『經濟學大綱』、上篇第十四章、三四四頁以下參照)。私は先きに、『辯證法とは、如何にして對立物が同一でありうるし且つあるか、如何なる條件のもとに對立物は互に轉化して同一となるか、……といふことの學理である』といふレーニンの言葉を引用したが、この言葉の意味は、こゝに述べた商品對貨幣の關係について見ても、明かであらう。しかし、それはともかくもとして、すでに一定の商品が貨幣となるのは、その商品が他の一切の諸商品のために一般的等價物たる地位を獨占することによつてであるとするならば、一般的とか獨占するとかいふことには無論程度の差異があるのであるから、一般商品と貨幣との限界もまた決して絶對的なものではないのである。一定の商品が貨幣となるのは、商品生産の——従つてまた商品流通の——發展の結果であり、貨幣なるものは商品世界の進化の産物である。そして吾々が一たび斯かる進化論的な見地に立つならば、先きに引用したエングルスの手紙にも述べてあるやうに、吾々の概念はたゞ近似的にのみ現實に照應するのである。従つて概念の上では普通の商品と貨幣とはつきり區別することができても、實際における一々の商品を取つて見れば、みな何程かの程度において貨幣たる機能をもつてゐないものはないのである。かゝる意味において商品と貨幣との差別もまた全く相對的なものなのである。かくて『一切の限界は、自然においても、また社會においても、すべて可動的なものであり、一定程度まで條件づきのものである』。(レーニン『急進主義の小兒病』ドイツ本、六〇頁。和田哲二氏譯『共產主義左翼の小兒病』、九六頁)。

序ながら述べておくが、吾々は以上の事實から、謂はゆる定義なるものの不可避的な缺點を知ることがで



きる。エンゲルスは『反デューリング論』において生命の定義を下した後に、吾々に向つて次ぎの如く注意してゐる。

「もちろん生命に關する吾々の定義は、すべての生活諸現象を包括するどころの話ではなく、むしろこの上もなく最も一般的な最も簡單なものに限られなければならぬので、甚だ不十分なものである。一切の定義は科學的には價値の少いものである。生命とは何であるかを、眞に残すところなく知り盡さうと思へば、吾々は、最も低級なものから最も高級なものに至るまでの生活に關する一切の現象諸形態を涉獵せねばならぬのである。尤も日用のためには斯かる定義は極めて便利であり、往々にして缺くべからざるものである、吾々がその不可避的な缺點を忘れさへしなければ、定義もまた害をなすものではない。』(『反デューリング論』ドイツ本、七六頁。河野・林雨氏譯本、一一九—一二〇頁)。

定義とは此の如きものである。だから吾々が『資本論』をひもとくとき、吾々の氣付くところの極めて特徴的な點の一つは、そこには全巻を通じて、資本の定義もなく、商品や貨幣やの定義もない、といふことである。その點において、それは俗流經濟學者たちの著はしてゐる通俗的な教科書類と全く選を異にしてゐる。そのことを、エンゲルスは、『資本論』第三卷の序文のうちに、次ぎの如く述べてゐる。

「諸々の事物およびそれら相互の關聯が、固定的なものとしてでなく、可變的なものとして、把握される以上、その思考映像たる諸概念もまた、同様に變化と轉化とを蒙るべきであるといふこと、吾々はそれらを凝固的な定義のなかへ押し込めず、むしろそれらにその歴史のない論理的の形成過程のうちで展開するといふことは、實に自明のことである。」(ドイツ本、前付、一六頁)。

私は先きにレーニンの次ぎの言葉を引いた。『學校で吾々がそれに止まつてゐるところの形式論理は、形式的の諸定義を取上げ、できうるかぎり廣く使用されるもの。もしくはできうるかぎり頻繁に目につくもの。によつて導かれ、且つこれに止まつてしまふのである。そこで、もし吾々が二つの。もしくはそれ以上の。異なつた定義をとり、しかる後これを偶然的に統一するならば、吾々は、對象物の若干の方面を示すところの折衷主義的な定義をうるが、——しかしそれ以上の何物でもない。辯證法的論理は、吾々が更に前進することを要求する。云々』。定義といふものは、對象物の若干の方面を示すにすぎない。それは一面的なものであるがゆゑに、當然に「甚だ不十分なもの」なのである。

以上吾々は、先づ自然現象について、次ぎに社會現象について、諸對立の相對性を見て來たが、最後にこれを吾々の思惟について見よう。例へば、眞理と誤謬との對立につき、エンゲルスは『反デューリング論』において次ぎの如く述べてゐる。

「眞理と誤謬とは、兩極的な對立をなしてゐる總ての思惟規定と同じく、たい極めて限定された領域に對してのみ、絶對的妥當性をもつにすぎない。……吾々が眞理と誤謬との對立を、先きに表示したる如き狹隘なる限界以外へ適用するや否や、それは相對的となり、従つて正確な科學上の表現法には用ひられなくなる。しかるにもし吾々がそれを前記の領域以外へ絶對的に妥當するものとして適用せんとするならば、吾々は正しく破綻に陥る。對立の兩極はその逆に變はる、眞理は誤謬となり、誤謬は眞理となる。一例として有名なボイルの法則をとつて見よう。この法則によれば、溫度が一定不變であれば、ガス



の容積はそれに加へられる壓力に逆比例する。レーノールは、この法則がある場合には適合しないことを發見した。さて彼れがもし現實哲學者であつたならば、彼れは次ぎの如く言はねばならなかつたであらう、ボイルの法則は手頼たよりにならぬ、すなはち本當の眞理ではなく、従つて一般的に眞理ではなく、つまり誤謬であると。かくて彼れは、ボイルの法則に含まれてゐる誤謬よりも、遙に大なる誤謬を犯したのであらう、この法則に含まれてゐる一粒の眞理は、誤謬の砂丘のうちに影を消したであらう、すなはち彼れは、この法則の本來は正常な結論を一個の誤謬に加工してしまふのであり、それに比すれば、ボイルの法則は、それに纏まとひ着いてゐる若干の誤謬をもつてしても、なほ眞理と考へられることになるであらう、だがレーノールは、科學者として、そんな兒戲に類することはしなかつた、却て彼れは更に研究を進め、そしてボイルの法則は一般的にはたゞ近似的にのみ正しい、なかんづく壓力により液體とされたガスに對しては、しかも壓力が液化點に近づくや否や、その妥當性を失ふ、といふことを發見した。すなはちボイルの法則は、一定の限界内においてのみ正しいといふことが、分かつたのである。しかしこの法則は、かゝる限界内においては、絶對的なものであり、究極的に眞理であるのか？ 如何なる物理學者も斯かることを主張しないであらう。彼れは次ぎの如く言ふであらう、それは一定の壓力および氣溫の限界内で、しかも一定のガスに對して、妥當性をもつのであると。かくて彼れは、かくまで狭く限られた限界内においてすら、將來の研究によつて、より狭い限界もしくは變はつた見方の生ずる可能性を排斥しないであらう。究極的の眞理といふものは、物理學を例にとつて言へば、結局此の如きものである。だから眞實に科學的な勞作では、誤謬とか眞理とかいふが如き獨斷的な道德的な表現を避け

るのが常である。『反テューリング論』、ドイツ本、八五―八七頁。河野・林兩氏譯本、一三四―一三五頁。

レーニンもまた之と同じことを屢々吾々に注意してゐる。こゝにはその著『急進主義の小兒病』から、その一例を抄録しておく。

『一の新たな政治上の思想を(何も政治上の思想に限つたわけではないが)不信用ならしめ傷けるための最も確實な手段は、それを擁護するといふ名のもとに、極端まで引つ張つてゆくことである。何故なれば、如何なる眞理でも、もし吾々がそれを(老ディーツゲンの言つたやうに)「過度」なものたらしめるならば、これを誇張するならば、それが本當に應用されうる限界以外にこれを擴張するならば、みな之を荒唐無稽なものたらしめるのであり、かゝる條件のもとではそれは正に不可避に荒唐無稽なものとなるからである。』(前掲書、ドイツ本、五二頁。和田哲二氏譯『共產主義左翼の小兒病』、八三頁)。

吾々は先きに、第一章の第十節「相對的眞理と絶對的眞理」と題する個所において、如何なる眞理も或る意味においては相對的であるといふことを述べたが、(しかしそれが相對的であるといふこともまた相對的なのであり、従つてそれは、或る意味においては相對的であると同時に、或る他の意味においては絶對的であるが、そのことは茲では問題外におく)、すでに如何なる眞理も相對的であるといふ以上、眞理と誤謬との對立もまた相對的でなければならぬのである。

吾々はまた、第一章の第九節「思惟と存在との適應關係」と題する個所およびその他において、吾々の思惟は結局のところ何等かの仕方における存在の反映にすぎざること述べたが、もしさうだとするならば、吾々の思惟は、それが如何なるものであらうとも、存在の或る一面を何等かの仕方において反映してゐないも



のではないであり、従つて絶対的に誤謬だとさるべきものは一つもありえないはずである。だから、吾々は唯物論を取り觀念論を排斥すると言つたところで、吾々の立場から見れば、その觀念論もまた決して絶対的の誤謬ではない。「哲學的觀念論は、粗野な簡單な形而上學的唯物論の見地からのみ、無意義である。辯證法的唯物論の見地からすれば、それと逆に、哲學的觀念論は、認識の諸特徴の—が、諸方面の—が、諸境界の—が、物質や自然から切り離されたる・神化されたる・絶対に至り、一面的に・逸脱的に・誇大に(ディッゲン)發展され(擴大され膨大され)たものである。觀念論は僧侶主義を意味する。もちろん! しかし「より正確にいへば」且つ「その外になほ」哲學的觀念論は、(辯證法的なる)人間の無限に錯綜せる認識の諸段階の一つを越えて僧侶主義へ登りゆく一つの道なのである。…僧侶主義(哲學的觀念論)は疑ひもなく一つのあだ花であるが、しかし生ける・多實なる・眞の・力に充ちた・全能な・客觀的な・絶対的な・人間の認識の生ける樹に咲き出でた一つのあだ花なのである」。(レーニン「辯證法の問題について」) 觀念論者は、現象の總體からその一断片を引きちぎり、それを物質との關聯から奪ひ去ることによつて、同時にまた彼等はその一断片を全體にまで膨大させ、それをして絶対の位を取らしめる。そこに彼等の誤謬がある。だが、ともかくもそれは現象の總體からその一断片を引きちぎつてゐる限りにおいて、一つの地盤をもつてゐる。たとひあだ花ではあつても、「人間の認識の生ける樹に咲き出でたもの」であり、それゆゑに觀念論ですらも決して絶対的な誤謬ではないのである。

これを要するに、自然においても、社會においても、また吾々の思惟においても、一切の差別はすべて或る程度まで條件づきのものである。私はそれを簡單に「差別の相對性」に關する法則と名づける。

## 五 事物を發展過程において(運動の流れに

おいて)把握すること

### その一 序 説

すでに前節に述べたる如く、事物を全面的に觀察するといふことの結果は、一切の事物の差別は相對的なものであるといふ認識を生むのであるが、此の如きは、言はゞ靜的に・場所的に・事物を觀察する場合のことである。もし吾々がこれを動的に・時間的の關係において・云ふならば、事物を全面的に觀察するといふことは、これを「運動の流れにおいて」すなはち變化しゆくものとして把握するといふ結果になる。

先づ分かり易いやうに、一つの比喩を設けて、それにつき以上のことを説明して見よう。例へば茲に一本の糸があつて、それが段々延びるにつれて色が變はつてゆくものと假定する。すなはち最初の部分は眞赤であるが、それは延びるにつれ次第に青色味を帯びて紫色となり、なほそれ以上は、益々赤色味を失うて青色味を増し、最後には眞青になつてゐるとする。この場合に、もし吾々が、この一本の糸の僅かな部分づゝを切れ／＼に觀察するならば、吾々はその如何なる部分を觀察する場合にも、その糸の色が變化してゐるといふことを看取することはできない。そして最初の部分のみ觀察するものは、これをもつて赤色であるとなし、中央に位する部分のみ觀察するものは、これをもつて紫色であるとなし、更に最後の部分のみ觀察するものは、これをもつて青色であるとなす等々、種々の觀察が生じるであらう。そしてそれらの觀察は部分的には確かに正しいのであり、その限りにおいては、それらは何れも絶対に誤謬だといふわけではない。



しかし眞實のところは、その糸の色は赤でもなく紫でもなく青でもないものであるから、その點からいへば、いづれの説も皆な間違つてゐると言はなければならぬ。此の如きが謂はゆる部分的觀察であり、一面的觀察であり、そして斯かる觀察の仕方をもつてしては、その糸の色が前後を通じて變化をしてゐるといふこと、それは赤から次第に紫になり更に紫から次第に青になつてゐるといふことを、看取することは到底できないのである。

事物をその發展の過程において觀察するといふことは、種々なる著作のうちに辯證法の一つの主要な特徴とされてゐるものだが、それは、以上の例によつても明かなやうに、畢竟事物を全面的に觀察するといふことの一つの現はれである。

私は先づ、事物を發展過程において觀察することを辯證法の主要なる一特徴となせる若干の著者を、我國における新刊書の中から例示しよう。

ブレハーノフの『史的一元論』（川内唯彦氏譯本、一〇五頁）には、次ぎの如く述べてある。

『ヘーゲルは、觀念論者たると唯物論者たるとを問はず、現象の發展過程を理解することが出來ずに、その現象を凝固した・無連繋的な・また或るものから他のものへ轉移できない・ものとして自ら考へ、また他人に左様考へさせた思想家の見地を指して、形而上學の見地と呼んだ。彼れは、現象を正にその發展において・従つてまたその相互連繋において・研究するところの辯證法を、この形而上學の見地に對立せしめたのである。』

またアドラトスキの『レーニン主義の理論と實踐』（北野・河野兩氏譯本、八―九頁）には、辯證法的唯物論の

特徴の第三としてあるところに、次ぎの如く述べてある。

『辯證法の要求するところは、發展過程を研究することである。すなはち現象の生成・發展・消滅を研究すること、これである。吾々は決して斯かる運動のあることを忘れてはならぬ。運動は常に存在してゐること、たとひ所與の現象が最初の一瞥においては靜止せる如く見えるとしても、決して如何なる靜止的なもの・不動なもの・永久に固定せるものも存在しないことを、記憶してをらねばならぬ。辯證法は、如何にして運動が生ずるか、また如何にして一つの狀態から他の狀態への推移が行はれるかに、注意を拂ふことを要求する。あらゆる發展過程を全體的に把握するやう努めること、對立勢力の闘争に眼をそ、ぎ且つ矛盾は何かの變態的なものではなくて現實の除きがたき本質を形成するものだといふことを記憶すること、此の如き思想は、マルクスおよびエンゲルスのあらゆる著作の根底に横たはつてゐるのであり、それは、マルクス主義者たらんとする・意識的な・すべての勞働者の肉となり血とならねばならぬところのものである。』

タアルハイマアはその著『辯證法的唯物論入門』第十一講において、以上の法則を『否定の否定の法則』または『對立における發展の法則』と名づけ、それについて次ぎの如く述べてゐる。

『この法則は、一切の事物の一切の運動と變化に對して、すなはち現實的な事物ならびに斯かる事物の頭脳内における映像たる概念に對して、妥當する。それは第一に、一切の事物および概念が運動し變化し發展するといふこと、言ひ換へれば一切の事物は過程であり進行であるといふことを、主張する。』

（ドイツ本、一一九頁。廣島氏改譯本、一五七頁。）



「この法則は、對立物の融合に關する第一の主要命題と、如何なる關聯をもつものであるか？もちろんそれは、對立物の融合に關する法則と、直接に關聯してゐる。それは、時間のうちに・繼起のうちに・行はれる過程または進行としての、對立物の融合である。……第一の根本命題たる對立物の融合の法則は、事物の最も一般的な關聯を状態として、靜的に表示する。否定の否定なる第二の命題は、事物の關聯を、過程または進行として、動的に表示する。二つの命題は互に關聯してゐて、あらゆる進行とあらゆる事物に對し同時に且つ同じ範圍に妥當する。二つの命題は相互に融合し、兩者は一個の聯絡せる全體を形成する。第一の根本命題は世界の横斷面を提供し、第二のものはその縦斷面を提供する。」(ドイツ本、一二六―七頁。廣島氏譯本、一六七―八頁。)

以上の引用文のうち、タアルハイマアは、對立物の統一の法則と發展の法則との關聯に觸れてゐる。吾々もまたこの點を、より立ち入つて考察して見よう。

## その二 反對物への轉化

吾々が先づ問題とするところは、先きに第二節および第三節において觀察した辯證法の特徴と・こゝに述べんとする辯證法の特徴との關聯如何、といふことである。吾々はすでに第二節において、辯證法は事物に對する全面的觀察を要求するといふこと、吾々がすでに一定の肯定的命題を有つてゐる場合には、辯證法は吾々に向つて、それと矛盾する別の命題が同一の對象について定立されはしないかを探求することを、要

求するものであるといふこと、等を明かにし、更に第三節においては、以上の要求を實際に貫徹するならば、吾々は辯證法の基礎的な法則として『對立物の統一と統一物の分解』といふ法則を得るといふことを、述べたのであるが、今こゝに問題とするところは、以上の如き法則とこゝに述べんとする發展の法則との關聯如何の問題である。吾々はすでに斯かる關聯の見地から本節の冒頭を説き起したのであるが、こゝでは更に進んで、それにつきもつと立ち入つた觀察をして見ようとするのである。

後に二三の實例を擧げて説明する如く、吾々がもし事物をその發展過程において觀察するならば、吾々は常に『反對物への轉化』なる現象に出逢ふのであり、かくてこの反對物への轉化なる法則は、事物の發展または變化に關する最も一般的な法則を形成してゐるのであるが、今吾々が、何故かくの如き反對物への轉化なる現象が常に起るかを説明するならば、こゝに吾々の提起した問題はおのづから解決されることになる。

すでに述べたやうに、如何なる事物でも、吾々がそれについて全面的な觀察を施すならば、吾々は自然および社會の一切の事物の上に、相對立した・互に排斥し合ふ・矛盾に充ちた・諸々の方面または屬性ないし傾向を發見するのであるが、このことがそれらの事物が發展過程において反對物への轉化を實現するに至る契機である。

例へば、私は食物を食ふことにより、あるひは煙草を喫することにより、一定の快感を感じる。これがこの場合の肯定的な・積極的な・方面である。だが、一層立ち入つてこれを考察すれば、私はこれらの場合に純粹に快感のみを享受するのではない。事態はもつと多面的であり、肯定的な方面の裏には否定的な方面が



潜んでゐる。例へば煙草をのむために、眼に煙がはいつたり、舌に苦味を覺えたり、齒が脂で染まつたり、机の上や疊の上へ灰が落ちたりすることなどは、すべて私が不快とするところである。だが、私が喫煙の分量を適度に調節するかぎり、私はニコチンの魔睡的作用のために多くの快味を感じるがゆゑに、それに伴うて同時に起る種々の不快はこれを相殺することができ、總體の効果としては確に一定の快感を覺えるのである。けれども、もし私が引續き過度の分量の喫煙をなすならば、喫煙によつて蒙る不快の方が強く前面に現はれ、その總體の効果として私はたゞ不快のみを感じることになる。かくして、嗜好された物が嫌悪される物へ（すなはち反對物へ）轉化するのであるが、しかし實際には、煙草そのものの中に、嗜好される屬性と嫌悪される屬性とが、すなはち『矛盾に充ちた・相互に排斥し合ふ・對立した・諸傾向』が、最初から含まれてをり、それらの諸傾向のうちの或るものが、例へば消費される分量の増加といふが如き事情の變化につれて、次第に勢力を得てくるために、かゝる結果が生じるのである。

多くの俗流經濟學の教科書中に説明されてゐる・謂はゆる効用遞減の法則なるものは、私が以上煙草について述べたやうな・物の消費量を増加することによつて生じる・その物の効用の變化を法則化したものである。吾々は、人間の何等かの種類の欲望を充たす物の屬性を、その物の有用性または効用と名づける。ところで、かくの如き物の効用なるものは、一切のものがさうであるやうに、決して一定不變のものではない。私は先きにそのことを煙草について述べたが、これを食物について見ても同じことである。例へば、飢えたときの一碗の飯は、何人にとつても大なる効用を有する。だが、すでに一碗の飯を食ひ終つた後に、更に二碗、三碗、四碗と食ひ續けてゆくと、その効用は次第に減じる。そしてすでに飽滿し切つた後、更に同じ

飯を食ひ續けよといふことであつたならば、何人も苦痛を感ぜざるをえない。かくて食物もまたその飽滿點に達したるところを境として、その効用は非効用（すなはち効用の反對物）に轉化するのであるが、この場合でも、實は食物を食ふことによつて生じる結果のうちに、最初から矛盾したものが含まれてをり、たゞ最初比較的軽い意義しか有たなかつたものが、後には比較的重い意義を有することになるために、全體の上以上の如き結果を生じるのである。詳しく言へば、喫煙の場合と同じことで、吾々が食物を攝取する場合でも、吾々はそれにより決して純粹の快感のみ感じるのではない。例へば、食物を食ふために口を動かすといふことも、胃袋のなかへ物を詰め込むといふことも、それ自身を獨立させて見たならば、それには必ず若干の苦痛が伴つてゐるのである。だが最初飢えてゐるときには、食物の攝取に伴うて起るこれらの苦痛は、飢えを充たすことに伴うて起る快感のために相殺されて、吾々の意識には上ほらない。けれども、引續き食物を攝取してゐると、一方では飢えを充たすために生じる快感が次第に減少すると同時に、他方では口の筋肉が疲勞を感じてくるとか、胃袋に對する食物の壓迫が次第に加はるとかといふことのために、種々なる不快感が増大するのであり、そのために總體の結果は前と逆になるのである。

煙草や食物の場合と同じやうな今一つの例を擧げるならば、謂はゆる藥物の人體に及ぼす結果である。例へば睡眠劑は、吾々が睡眠し能はざるために苦む場合に、その睡眠を可能ならしめることによつて、吾々の健康の維持に貢獻するのであり、それゆゑにそれは藥物であると稱される。だが、一定の藥物が藥物であると稱されるのは、全く相對的の意味においてであり、もしその服用の分量が度を越したならば、如何なる藥物でもその反對物たる毒物に轉化しないものはない。睡眠劑が屢々自殺用に供されるのは、吾々の知るところ



であるが、かゝる場合に自殺者はたゞ、藥物の分量を増加することによつて之を毒物に轉化するのである。謂はゆる劇薬において分量上の規定が非常に嚴密なものも、單なる分量上の變化によつて、起死回生の薬が忽ちその品質を逆轉して、人を殺すための毒となるからである。

吾々は更に方面を變へて、有機物の生命について觀察して見よう。「門松や冥土の旅の一里塚」と誰かが言つた通り、吾々が一ヶ年無事に生きたといふことは、取りも直さず一ヶ年だけ死に近づいたといふことを意味する。かくて吾々が生き切つた頂點には死が待ち構へてをり、生命活動の過程はその反對物たる死に轉化する。だが、この場合にでも、一定の有機體の生命活動を一層立ち入つて觀察して見ると、それは一方においては、當該有機體を絶えず維持する作用から成り立つてゐると同時に、他方においてはまた、當該有機體を絶えず破壊する作用から成り立つてゐるのである。エンゲルスの『反デュリング論』には、それについて次ぎの如く述べてある。

『あらゆる生物に一樣に存在する生活現象なるものは、何に基づくのであるか？ それは先づ何よりも蛋白質物がその周圍から他の適當な物質を攝取し、それを同化すると同時に、その蛋白質物の古い他の部分は、分解して排泄される、といふことに基づくのである。他の生命のない個體も、やはり自然物の運行の間に、變化し、分解し、もしくは結合する。だがこの場合には、それは嘗て在つたところのものは別の物になつてしまふ。風化された岩石は、もはや岩石ではない。酸化した金屬は、錆になつてしまふ。しかるに、生命なき個體にとつて、壞滅の原因であるものは、蛋白質にあつては生存の根本條件である。』

ある。蛋白質物における構成成分のかゝる不斷の轉換が、攝食および排泄のかゝる継続的な代謝が、休止する瞬間から、蛋白質物はその終りを告げ、分解し、死亡する。すなはち蛋白質物の存在の仕方たる生命なるものは、何よりも先づ、それが如何なる瞬間においてもそれ自身であり、しかも同時に他のものである、といふ點に存するのである。』『反デュリング論』ドイツ本、七五頁、河野・林兩氏譯本、一一八一—一九頁。

すなはち生命を有する・生命活動をなしつゝある・個體には、その個體の或る部分を絶えず破壊する作用と、その反對に同一の個體の他の部分を絶えず再生産する作用と、かゝる對立的な傾向が存在してゐるのである。すなはち一個の有機體といへる統一物を分析して見れば、そこには矛盾に充ちた、相互に排斥し合ふ・對立した・傾向が存在するのであり、その有機體の生命活動なるものは、畢竟するに斯かる對立物の鬭争過程に外ならぬのである。かくて吾々は、『生命そのものが死の萌芽を自己のうちに句藏してゐる』ことを理解するのである。

吾々は更に經濟現象を一瞥しよう。資本主義的社會は自由競争を原則とする社會である。だが、資本主義の最後の段階は帝國主義であり、そして帝國主義の主要特徴の一つは獨占である。それにつき、レーニンはその名著『帝國主義』第七章の冒頭において、次ぎの如く述べてゐる。

『帝國主義は、資本主義一般の根本的特徴の、一層の發展および直接の繼續として生じた。しかし、資本主義が資本主義的帝國主義となつたのは、やうやく、ある一定の極めて高度の發展段階において、資



本主義の二三の根本的特徴が、その反對物に轉化しはじめ、そして、資本主義からより高度の社會的・經濟的・秩序への過渡期の諸形態が到るところに發生し顯現したときのことである。この過程における根本的な特徴は、經濟上では、資本家的獨占が資本家的自由競争に取つて代つたことである。自由競争は資本主義的商品生産および商品生産一般の本質的特色であり、獨占は自由競争の正反對のものである。しかし自由競争そのものは、大規模生産を生み出だし、小經營を驅逐し、大經營を更に一層の大經營により置き換へることによつて……吾々の目前で獨占到轉化しはじめた。しかも吾々は同時に、獨占はそれを生み出した自由競争を驅逐してしまはないで、自由競争の上に且つ自由競争と相並んで存在し、且つかくして、特に激烈にして重大な矛盾・軋轢・および鬭争の一系列を生ぜしめてゐることを見る。(長谷部文雄氏譯本、一二六―七頁。―引用文は、一二の文字を變更しただけで、すべて長谷部氏の譯文に據る。)

レーニンの言つてゐるやうに、『獨占は自由競争の正反對のものである。』しかも自由競争そのものが、それ自身とは正反對の獨占を生むに至るのである。斯様にすべての對立は、相對的であり、條件づきであり、一方のものが他方のものへ推移しえないといふやうな・乗り越越すことのできない・深い淵によつて隔てられてゐるのではない。一定の條件のもとにおいては、對立物は同一でありうるし且つ同一である。形而上學的思惟に捉はれてゐるものは、例へば自由競争と獨占といふが如き對立物を、全く懸け離れた・互に無縁な・ものの如くに觀念してゐるが、それは事物を全面的に觀察することを理解せざるがために生ずる偏見である。

吾々がもし事物を全面的に觀察するならば、吾々は如何なる事物についても、それは自分自身の存在を絶滅せしめて・自分をその對立物へ轉化せしめるところの・一定の要素を、それ自身のうちに包含してゐる點

において、如何なる事物もこれを互に矛盾せる構成分に分解しうることを、發見するのである。例へば自由競争といふことは、各々の生産者がその競走者を驅逐し、自分獨りが市場の獨占的支配者となることの自由を意味するといふ點において、自由とは正反對の獨占といふ傾向をそれ自身のうちに包含してゐるのであり、それゆゑにこそそれは、それ自身の發展によつてその反對物に轉化するのである。

私は同じく經濟現象につき、今一つの例を擧げよう。商品と商品との交換といふ平等關係が、一たび勞働力が商品として賣買されるやうになると、その正反對の搾取關係に轉化するといふことは、マルクスが『資本論』において詳細に論證してゐるところである。それにつきプレハーノフは次ぎの如く述べてゐる。

『吾々は次ぎに、吾がナロードニキ派の文獻が稱讚して止まないところの・謂はゆる財産勞働説(財産がその所有者の勞働に基づくかぎり、それは正義に合すとなす説)が、何を導き出だすかを、考察して見よう。私に屬するものは、私の勞働によつて作り出されたもののみであると。これは最も正常な事である。ところで次ぎの事も、これに劣らず正常である。すなはち私は自分の作った品物を自分の自由裁量に任せて使用する、かくて私はそれを自分で使つたり、あるひは私の欲しいと思ふ他の品物と交換したりする。最後にまた、私が自分で交換してえた品物を、再び自分の自由裁量に任せて、私にとつてより望ましく・より善く・より有益に・利用するといふことも、同様に正常な事である。そこで今私は、自分自身の勞働の成果を賣つて貨幣に代へ、その貨幣をば勞働者を雇ひ入れるために使つた、すなはちその貨幣で他人の勞働力を購買した、と假定して見よう。

『私はこれらの他人の勞働力を利用した後、一定の價値の所有者となる。ところでこの價値は、私が他人



の勞働力の購買のために費した價值よりも、著しく大である。このことは、これを一方から見れば、極めて正當なことである。何故なら、私は私が交換によつて得た物を、より善く・より有益に・利用するといふことが、すでに是認されてゐるのだから。だが、他の方面より見れば、このことは甚だ不當である。何故なら、私は他人の勞働を搾取してをり、且つそれによつて私の正義觀念の根底にある原則を否定することになるのだから。かくて私の個人的勞働によつて獲得された財産が、他人の勞働によつて作り出される財産を私の所有物として生み出すといふことになるのである。』(川内唯彦氏譯『史的一元論』一〇九—一〇頁。引用文は二三箇所改めたところがある。)

もし私有物の交換が認められてゐるならば、その交換によつて他人の物を自己の私有物となしうるがゆゑに、私有財産制すなはち個人の私有物はこれを私有する者の勝手な處分に一任されるといふ制度の中には、同時に他人の所有物たりしものに對する支配が含まれてゐる。すなはち交換が行はれてゐるかぎり、私有財産制は社會的なものを個人が私有しうることを意味するのであり、制度そのものの中に個人的な方面と社會的な方面との矛盾が含まれてゐる。だからそれは、商品所有者と商品所有者との間における物の交換といふ平等關係から出發しても、一定の條件のもとでは、一方の者の他方の者による搾取關係(すなはち平等關係の反對物)に轉化しうるのである。マルクスはそのことを『商品生産ならびに商品流通に基づく占有または私有の法則が、それ自身の・内在的な・不可避的な・辯證法的發展により、明かにその正反對のものに轉化する』のであるとし、それについて次ぎの如く述べてゐる。

『この結果は、勞働力が勞働者自身により商品として自由に販賣されるに至るや否や、避くべからざる

ものとなる。しかもまた、さうなつて後〔勞働力が商品として賣買されるやうになつて後——河上補〕、商品生産は始めて一般に行き渡つて基型的の生産形態となり、あらゆる生産物は始めて最初から販賣のために生産され、また生産された總ての富が流通界を通り抜けるやうになる。賃勞働が商品生産の基礎となつたとき、商品生産は始めて全社會に推し擴がるのであり、またさうなつたとき始めて、商品生産はその一切の潛勢力を展開するのである。だから、賃勞働が介在し來たる商品生産を變質するといふならば、それは取りも直さず、商品生産は自身を變質さすまいと思へば發展してはならぬといふに等しい。商品生産がそれ自身の法則に従つて資本家的生産に推し進めば進むほど、それと同じ程度に、商品生産の所有權法則は資本家的領有の法則に轉化する。』(『資本論』第一卷、カウツキー版、五二二頁。)

商品生産ならびに商品流通に基づく私有の法則は、商品生産ならびに商品流通が充分に發展するならば、(これらのものが充分に發展するためには賃勞働の介在が條件とされるのであるが)、『それ自身の・内在的な・不可避的な・辯證法的發展』により、明かにその反對物たる『資本家的領有の法則』に轉化する。マルクスはいふ、最初、所有權は己れ自身の勞働に基づくものとして、吾々の眼に映じた。少くとも斯かる假定は許されねばならなかつた。何故なれば、たゞ同等の權利を有する商品所有者が對立してゐるばかりであり、他人の商品を領有するための手段としては、たゞ己れ自身の商品を讓渡するより外なく、しかもそれは勞働によつてのみ生産しえられるものだからである。しかるに今や所有權は、資本家の側にあつては、支拂はれざる他人の勞働またはその生産物を領有するための權利として現はれ、勞働者の側にあつては、彼れ自身の生産物を領有することの不可能性として現はれる。所有權と勞働との間における分離は、外見上兩者の一致



から出發する一法則の必然的結果となる。』(『資本論』第一卷、カウツキー版、五一九頁) 此の如きが謂はゆる反對物への轉化である。(すでに指摘したる如く、此の如き結果は、商品生産ならびに商品流通が充分なる發展をなしたる場合に始めて起る。けだし商品生産が、從つてまた商品流通が、充分なる發展をなすためには、勞働力が商品として賣買されるやうにならなければならぬのであるが、しかも一たび勞働力が商品として賣買されるやうになれば、單なる商品生産は轉化して資本家的商品生産となり、それと同時に、等價と等價との交換は一方の者による他方の者からの無償なる價値の搾取に轉化するのである。だから、この場合における反對物への轉化は、同時に、後に述べるところの量から質への轉化の一つの場合に屬するのである。商品生産は、大量的に發展すれば、必ず單なる商品生産から資本家的商品生産へ變質せざるをえない。この場合、分量の増加は必ず品質の變化を伴ふ。それを指してマルクスは、『商品生産は自身を變質すまいと思へば發展してはならぬ』と言つてゐるのである。)

私は今一つの例を、資本と剩餘價値との關係について、指摘しておかう。形而上學的な考方によれば、原因と結果とは對立したものであり、それが同一だといふことは在りえない。だが、より正確に觀察すると、一定の條件の下では、原因はその對立物たる結果に轉化し、逆に結果はまたその對立物たる原因に轉化し、かくてこれらの對立物は同一となる。ここに述べようとするところは、原因と結果といへる斯かる對立物の轉化に關する一般的な法則の一つの現はれとしての、資本と剩餘價値との關係についてである。言ふまでもなく、剩餘價値は資本から生まれる。すなはち資本は剩餘價値の發生原因となるものであり、剩餘價値は資本の產物である。だが、資本によつて生産されたこれらの剩餘價値は、蓄積され資本化されることによつて

新たに資本となるのであり、かゝる方面より見れば、剩餘價値は資本増殖の原因であり、剩餘價値そのものが(資本によつて生産されるものが今度は逆に)資本を生産することになる。すなはち先きには剩餘價値が資本の生産物であつたのに、今度は資本が剩餘價値の生産物だといふことになる。マルクスが『資本論』において、資本の生産過程を説明せんとするにあたり、吾々は『この場所(すなはち生産過程)で、資本が如何に生産するか』といふことを知るばかりでなく、『また資本それ自身が如何にして生産されるか』を知ることができると言つてゐるのは(カウツキー版、一三二頁)、そのためである。(その詳細に至つては『資本論』第一卷第二十二章『剩餘價値の資本への轉化』または拙著『資本論略解』第一卷第三分冊、四一頁以下参照)鳥から生まれた卵子は、孵化してそれ自身が獨立の鳥となり、自ら卵子を生むことになる。かくて結果は原因となり、原因は結果となる。

私は最後に眞理と誤謬との關係について一言しよう。すでに前章の第十節で述べたやうに、如何なる眞理も皆な相對的な眞理にすぎないのであるが、このことは、如何なる藥物でもそれが藥物であるといふのは皆な相對的な意味においてあるといふ前述の事例と、同じ性質の事柄である。レーニンが『ほんの一步——明かに同一方向へ——行きすぎただけで、眞理は誤謬に轉化する』と言つてゐるのは、恰も同じ劇薬が、ほんの僅かばかりその分量を増しただけで、忽ち毒藥に轉化するのと同じである。レーニンは、吾々がすでに前章において引用したる如く、次ぎの如くにも言うてゐる。

『一つの新しい政治的思想(政治的思想にのみ限るわけではないが)を不信用にし傷けるための最も



確實な手段は、これを擁護するといふ名のもとに、これを極端にまで走らせるといふことである。何故なれば、如何なる真理でも、吾々がもし（老デイーツゲンが言つてゐるやうに）それを「過度」に走らせ、それを誇張し、その實際に應用されうる限界以上にこれを押し擴げるならば、吾々はそれを荒唐無稽のものとするのが出来るのであり、上述の條件のもとでは、それは不可避的に荒唐無稽のものとなるからである（レーニン『共產主義左翼の小兒病』ドイツ本、五二頁。和田哲二氏譯本、八二―三頁。）

此の如く、如何なる真理も、一定の條件のもとにおいては、その反對物たる誤謬に轉化する。しからば何故か、轉化が生じるか？ それは、他の一切の場合におけると同じやうに、この場合においても、謂ふところの真理には最初から何程かの誤謬が含まれてをり、そして一定の條件のもとにおいては、その誤謬とさるべき方面が擴大するからである。如何なる真理も相對的真理であるに過ぎないと云ふのは、それが絕對的真理でないといふ意味であり、そしてそれが絕對的真理でないといふことは、それが完全な真理でなく、従つてそれには何程かの缺陷または誤謬が含まれてゐる、といふことを意味するのである。

これを要するに、事物は一定の條件のもとではそれ自身の反對物に轉化するといふこと、對立物は或る條件のもとでは同一でありうるし且つ同一であるといふこと、これらのことが明確に把握されねばならぬ。「形而上學者にとつては、物とその思考映像たる概念とは、孤立した・一つ一つ他と關係なしに觀察せらるべき・固定した・凝結した・永久不變な・研究の對象である。彼れは全く媒介を缺いた諸對立の中でのものを考へる。彼れの言葉は、然りといへば然りといふだけの意味であり、否なといへば否なといふだけの意味であつ

て、それを越しては困つたことである。彼れにとつては、ある物は存在するか存在しないかの何れかであり、それはそれ自身であり同時に他のものであるといふことはできぬ。消極と積極とは絕對的に排除し合ふものであり、原因と結果ともやはり相互に凝固的な對立をなすものである。この考方は、謂はゆる健全な常識の考方であるから、一見すると極めて尤もなものに見える。しかしながら常識は、その四つ壁の日常の領域でこそ尊敬すべき伴侶であるが、一たび探究の廣い世界へ踏み出すや否や、全く驚くべき冒險を冒すことになる。形而上學的な考方は、對象の性質に應じ、かなり廣い領域において、是認せらるべきであり必要ですらあるが、しかしいつでも早かれ晚かれ一つの限界に衝きあたるのであり、その限界の彼方では、それは一面的な・狹隘な・抽象的な・ものとなり、自ら解くべからざる矛盾に陥る。何故なれば、それは個々の事物に捉へられてそれら事物の關聯を忘れ、その存在に捉へられてその生成と消滅とを忘れ、その靜止に捉へられてその運動を忘れ、畢竟單なる樹を見て森を見ないからである。例へば、日常の場合ならば、吾々は或る動物が存在するか否かを知つてゐるし、確實にそれを言明することができる。しかしより正確に觀察すると、吾々はこの問題が屢々極めて錯雜した問題であることを見出す。これは、胎兒の殺害が殺人罪となるべき合理的な限界を發見せんため、無益な苦惱をした法律家のよく知つてゐるところである。同様に死の瞬間を確定することは不可能である、生物學は、死といふものは一時的の瞬間的の現象ではなく、極めて長きにわたる一過程であることを立證してゐる。同様にあらゆる有機體は各瞬間において同一であり、しかも同一でない。それはあらゆる瞬間において、外部から攝取した物質を消化しつゝ、他の物質を排泄してゐる。あらゆる瞬間において、その身體の細胞は死滅するが、しかも新たな細胞が生まれる。早かれ晚かれ一定の時期の



後には、その身體の物質は完全に更新され、他の元素によつて更代され、かくて如何なる有機物も常に同一物であり而かも別物である。吾々はまた、よく正確に觀察すると、積極と消極といふが如き對立物の兩極は、對立してゐると同時に互に不可分的なものであること、それらはあらゆる對立性にも拘らず互に融合するといふこと、更にまた原因と結果とは、個々の場合に適用する場合にのみ斯かるものとして妥當性を有する觀念であるといふこと、しかし吾々が個々の場合を世界全體とのその一般的關聯において觀察するならば、原因と結果とは一緒になり、普遍的な交互作用といふ見解のうちに解消し、そこでは原因と結果とが絶えずその地位を轉換し、今または茲で結果であつたものが、他の時または他の場所では原因となり、逆にまた原因は結果となるのである。(エンゲルス『反デュリング論』、ドイツ本、六一―八頁。河野・林兩氏譯本、九―一二頁。)

吾々は事物を一面的に(極めて多種多様の方面を具へてゐるものたゞ一面だけを)觀察するがゆゑに、またはこれを一方的に(極めて複雑な相互關係を有するものをたゞ一方からのみ)觀察するがゆゑに、辯證法の指示するが如き複雑微妙の關係を看取することができないのである。だが、より正確に觀察すれば、すでに繰り返し述べてゐるやうに、如何なる事物も、矛盾に充ちた・相互に排斥し合ふ・對立した・諸傾向をそれ自身のうちに含んでゐる。だから吾々がもしその發展過程を全體的に(一面的にはなく、その全面にわたり、また一方的にはなく、その全體の相關關係において)把握するならば、吾々は當該事物が必ずその發展過程の中において、それに關聯する諸條件の如何によつて、一の状態から他の状態へ推移し、一定のものからその反對物へ轉化することを、常に發見するに至るのである。かくて「如何なる現象も自己の存在を制約する力そのものの作用によつて、早かれ晚かれ・しかし必然的に・自分自身の對立物へ轉化する。」

(プレハノフ『史的元論』、川内氏譯本、一一一頁。)吾々はこれを名づけて『反對物への轉化の法則』といふのである。

### その三 發展は對立物の闘争である

レーニンの『辯證法の問題について』の中には、次ぎの如く述べてある。

『對立物の同一性(より正しくいへば、むしろその「統一」、もつとも「同一性」と「統一」との表現の區別は、この場合特に本質的なものではない、ある意味においては兩者とも正しい)は、(精神および社會を含めての)自然のすべての現象と進行とに對しての、矛盾に充ちた・相互に排斥し合ふ・對立した・諸傾向の認識(發見)を意味する。一切の世界の進行をその「自己運動」において・その自發的發展において・その生ける實在において・認識するための條件は、それらをば對立物の統一として認識することである。發展は對立物の「闘争」である。』

『發展(進化)に關しては、二つの基本的な(または可能的な、あるひは歴史に現はれた)見解がある。縮小および擴大としての・反覆としての・發展、および對立物の統一としての發展。(統一的なもの互に排斥し合ふ對立物への分裂とそれらの相互的關係)』

『第一の見解は、死んだ・貧しい・ひからびたものであり、後者は生きてゐる。たゞ後者のみが、すべての實在せるものの「自己運動」の理解に對する鍵を提供する。たゞそのみが、「跳躍」の・「連續」における斷絶」の・「反對物への轉化」の・古きものの廢滅と新たなるものの發生との・理解に對する鍵を



提供する。

『對立物の統一（合一、同一性、作用平衡）は、條件的、一時的、過渡的、相對的である。相互に排斥する對立物の闘争は、發展が運動が絕對的であるやうに絕對的である』（河上譯『レーニン、辯證法的唯物論』について、九四―九五頁。）

右は一句一句みな善美をつくしてをり、盡く千金に値すと考へられる。私は少しくそれに蛇足を添へておかう。

レーニンはいふ、『一切の世界の進行を、その自己運動において、その自發的發展において、その生ける實在において、認識するための條件は、それらをば對立物の統一として認識することである。發展は對立物の闘争である』と。その意味は、如何なる事物の發展も、これを對立物の闘争として見なければ、それをその『自己運動』において認識することができず、従つてまた之を根本的に把握することができない、といふのである。

ヘーゲルは『すべての事物はそれ自身に矛盾してゐる』と言ひ、且つ彼れと同時代の論理學の根本的な偏見——本來矛盾は同一性よりも『より深き且つより本質的なもの』に値するに拘らず、『矛盾は同一性ほどに本質的な且つ内在的な規定ではない』かの如く看做してゐる偏見——に對し、激しく反對した。『何故なれば同一性は矛盾に對して、たゞ單一なる直接性の・死せる實在の・規定たるに過ぎないが、矛盾はすべての運動と生活性との根源であり、何等かのものは、それ自身のうちに一の矛盾をもつかぎりにおいて、自ら動き、動因と行動とをもつかからである』（河上譯『レーニンの辯證法』六八―六九頁）。こゝにヘーゲルの言へる如く、矛

盾はすべての運動と生活性との根源であり、何等かのものは、それ自身のうちに一の矛盾をもつかぎりにおいて、始めて自ら動く。

このことは、エンゲルスもまた、その著『反デュリング論』の中で、詳細に説明してゐるところである。彼れがそこで説明してゐる如く、すでに單なる機械的の運動ですら、それはそれ自身のうちに矛盾を含んでをり、その矛盾のために運動それ自身が起るのである。けだし運動しつつある物體は、與へられたる一瞬間においては一定のポイント（點）の中にある。だが、それは同時にまた、そのポイントの外にある。何故なら、その物體がもし一定のポイントの中のみあるならば、少くともその瞬間には、それは非運動的のものとなるのだから。すなはち或る物體は、それが一定の瞬間において、一定のポイントの中に存在すると同時に、またそのポイントの中に存在しない、といふ矛盾をもつかぎりにおいてのみ、運動するものとなるのである。或る物體の單なる機械的な位置の移動すら、此の如く一の矛盾をそれ自身のうちに含んでゐるとすれば、物質のより高度の運動、殊に有機體の生命およびその發展に至つては、尙更のことである。吾々は先きに蛋白質物の生命活動が、その個體の或る部分を絶えず破壊する活動と、その反對に同一の個體の他の部分を絶えず再生産する活動と、かゝる對立した二様の活動から構成されてゐることを述べた。すなはち生命とは、何よりも先づ、或る存在が各瞬間に同一であり、しかも同時に他のものである、といふことのうちに存するのである。その存在は、かゝる矛盾をもつかぎりにおいてのみ、はじめて生命體としての活動をもつ。ヘーゲルが『矛盾はすべての運動と生活性との根源である』と言つてゐるのは、それを指すのである。かくて吾々は、一切の事物はそれ自身のうちに矛盾を包蔵するかぎりにおいて『自ら動く』ものとなるこ



とを、理解することが出来る。「一切の世界の進行をその「自己運動」において認識する」とは、このことである。しかも事物の運動は、かく把握されることによつて、始めて根本的に理解される。何故ならば、吾々が事物の動因（それが運動するに至る原因）を當該事物のうちに求めず、これを何等かそれ以外のもの（例へば神）に求めるならば、それ以外のものが更に説明されねばならず、かくて吾々の説明は果てしなき循環に陥ることを免れないからである。

レーニンの言へる如く、「發展（進化）に關しては、二つの基本的な見解がある。」例へば、資本主義的社會をもつて古代社會の單なる擴大と看做すが如きは、その第一の見解に屬する。これは「死んだ・貧しい・ひからびた」ものである。この問題については、マルクスの『政治經濟學批判』に次ぎの如く述べてある。

『ブルジョア社會それ自體が發展の一對立的形態にすぎないのだから、それ以前の諸形態における諸關係は、しばしく、たゞ全然萎縮してそのうちに見出されるか、あるひは、例へば公共團體の財産のやうに、全然滑稽に改作されてゐる。だから、ブルジョア經濟學の諸範疇が、すべての他の社會諸形態に對して一の眞理を有すといふことは眞實であるとしても、それはたゞ割引して理解するべきである。ブルジョア經濟學の諸範疇は、すべての他の社會諸形態をば、あるひは發展せしめたり、あるひは萎縮せしめたり、あるひは戲畫化したりなどして、すなはちいつも本質的な差異のもとに、それらを包含することが出来る。謂はゆる歴史的發展なるものは、一般に、最後の形態が過去の諸形態をば自己に對する階段と看做し、それらを常に一面的に理解するといふことに基つてゐる。』（河上・宮川共譯本、五八頁。）」

右の引用句の最後に述べてある事柄は、今日もなほ普通の教科書に散見する『經濟發達段階説』なるものに妥當するのである。例へば、すべて從來の歴史を分かつて、物々交換の時代、貨幣經濟の時代、信用經濟の時代となすが如きは、謂はゆる經濟發達段階説の一例であるが、此の如き見方は、今日までの經濟的諸社會をば現代の資本主義的社會に對する階段（樓上へ登るための梯子段）と看做すものであり、すべて從來の歴史をば同じ本質のものが次第に發展向上した過程と看做すものである。かういふ見地に立つと、過去の諸社會を現代の眼でのみ見ることになる。例へば前記の一例は、たゞ生産物の交換といふ方面（これは現代の資本主義的社會では最も基礎的な・最も大量的な・關係となつてゐるが）からのみ、過去の諸社會を觀察したものである。『最後の形態（この場合に當てはめて言へば、資本主義的社會）が過去の諸形態をば自己に對する階段と看做し、それらを常に一面的に理解する』といふのは、以上の如き場合を指すのである。他の一切の事物と同じやうに、現代の資本主義的社會も『それ自身が發展の一對立的形態にすぎない』のであり、それは過去の諸形態を次ぎ／＼に止揚することによつて成立したものであるから、それには『それ以前の諸形態における諸關係』が多かれ少かれ残存してゐる。それらのものうち或るものは『全然萎縮して』をり或るものは非常に發展してゐる。生産物の交換關係の如きは、後者に屬するのである。いづれにしても現代社會の諸範疇は、何等かの程度において過去の諸社會に通用するものである。現に生産物の交換關係の如きも、それが古代共產體と共產體との境目に發生したのは、何千年かの昔に屬するのであり、それ以來あるひは奴隸社會の一隅において、あるひは封建社會の或る部分において、引續き發展して來たものであるから、生産物の交換關係といふが如き或る一面を捉へて、その方面からのみ觀察するならば、過去の社會諸形態は



すべて現代社會への梯子段の如きものに見え、その關係は譬へば子供が成育して大人となつたものの如くに見えるのである。此の如き歴史の見方が、レーニンの言葉によれば、『縮小および擴大としての・反覆としての・發展』觀なるものである。

ブレハーノフは、以上の如き見解を批評して、次ぎの如く述べてゐる。

『形而上學者は、自然においても歴史においても飛躍は存しない、と斷言する。彼等は、或る現象または或る社會制度の發生を論ずる場合には、この現象または制度が、嘗ては極めて微小なものであり、全く眼につかぬものであるが、後になつて徐々に成長するものであるかの如く考へる。そしてこの現象および制度の消滅を問題とする場合には、彼等は、これと反對に、顯微鏡的の如く考へる。そしてこの現象おとの不可能になるまで、現象および制度の漸次的減少が繼續することを假定する。かういふ風にして理解された進化なるものは、全く何物をも説明しない。それを説明しなければならぬところの現象そのものの存在を前提してゐるのである。そして現象の中に行はれる量的變化しか考慮に入れてゐない。』(川内唯彦氏譯『史的一元論』二二一—二二二頁)

それは同じ現象の分量上の増減しか見ない、そして後に説明するが如き『量から質への轉化』(すなはち單なる分量上の變化が品質上の變化を惹き起すに至ること)を認めず、従つて事物の發展過程における『跳躍』連續における斷絶『反對物への轉化』等は、全くこれを説明することができぬのである。

以上の見地と異なり、辯證法にあつては、自然においても人間社會においても、漸次的な量的變化と共に

品質上の飛躍的變化が、發展(進化)の契機をなすことを、主張する。例へばこれを人間社會について言ふならば、今日までの歴史に現はれたところの互に異なる經濟的構造を有する・それ／＼の社會は、各々本質を異にする特殊なる有機體であつて、それはその成立・發展・およびより高級なる他の形態への推移・について、各々特殊なる法則を有するものであり、或る社會形態とより高度の社會形態との差異は、例へば、嬰兒または未成年者と大人との相違ではなく、猿と人間との相違の如きものである。そして、猿と人間との全體の生理的構造が異なるにつれて、手とか足とかいふやうな・外見上はほぼ同じやうに見えてゐる・それこれらの器官の機能が、全く別種の法則に従へられることになる。『資本論』第二版の跋文に引用してある『ヴェーストニツク・エヴロブイ』の次ぎの言葉は、正に以上のことを指すのである。

『人あるひは言ふであらう、經濟生活の一般的法則は一個同一のものであり、吾々はそれを現在に適用しようとして過去に適用しようと、どちらでも可いはずだ、と。ところが、これこそ正にマルクスの否定するところである。……彼れの意見に従へば、これと反對に、各々の歴史時代はそれ特有な法則を有してゐる。……人類の生活なるものは、一定の發展時代を生き盡すや否や、ある一定の段階から他の段階へ移りゆくや否や、それはまた他の法則によつて支配されはじめ。一言にして云へば、經濟生活は生物學といふ他の領域における發展史と類似な現象を呈するのである。……古き經濟學者たちが經濟法則を物理學や化學の法則と類似したものとしたのは、經濟法則の性質を誤解したのである。現象をより深く分析して見ると、社會的有機體は、諸々の動植物の有機體と同じやうに、互に根本的に異なるものである。——實に一個同一の現象が、右の有機體の全構造が異なるために、その個々の器官が相違してゐる



ために、これらの器官の作用する條件が同じくない等々のために、全く異なる法則に従ふのである。

(河上・宮川共譯、岩波文庫本、第一分冊二九頁)

右の如き見解が、先きに述べた『縮少および擴大としての・反覆としての・發展』觀と、全くその本質を異にすることは、言ふまでもない。それは、レーニンの謂ふところの・發展に關する二つの基本的な見解のうち、第二のものに屬するのであつて、この見地からすれば、事物の發展は『對立物の統一としての發展』であり、かゝるものとしてそれはまた『自己運動』であり、『自發的發展』である。

レーニンは、かゝる見地のみが、吾々に向つて、『跳躍の・連續における斷絶の・反對物への轉化の・古きものの廢滅と新たなるものの發生との・理解に對する鍵を提供する』といふのである。『反對物への轉化』とは、すでに述べた如く、藥物がその分量の増加のために轉化して毒物となるが如き・一定の事物の本質的變化を指す。『跳躍』といひ、『連續における斷絶』といふも、また同じ事柄を指すのである。私はこゝにその説明として、エンゲルスが自然現象について言つた言葉を、次ぎに引用しておかう。

『如何に徐々に行はれるとも、一の運動形態から他の運動形態への推移は、常に依然として一の跳躍であり、一の決定的な轉換である。例へば、天體の機械學から・個々の天體の上におけるより小なる物體の機械學への・推移が、さうであり、また物體の機械學から・分子の機械學——吾々が謂はゆる物理學において研究するところの諸運動、すなはち熱、光、電氣、磁氣を包含せるもの——への・推移が、同様にさうである。同様にまた、分子の物理學から・原子の物理學——化學——への・推移も、一の決定的な跳躍によつて行はれ、特に通常の化學的作用から・吾々が生命と名づける蛋白質の化學的作用への・

推移に至つては、尙更のことである。』(反テューリング論、ドイツ本、五七頁。河野・林兩氏譯本、八九—九〇頁)

以上吾々は發展に關する二様の見解を述べたが、そのうち辯證法が立脚するところの第二の見地のもとにあつては、すでに所々で示唆した如く、發展は『對立物の闘争』の過程として現はれる。何故なれば、かゝる見地のもとにあつては、統一的なものが矛盾に充ちたその構成成分に分解され、そして斯かる構成成分の間における矛盾によつてのみ、當該事物の運動(變化、發展、進化)が説明されるのであるから。

例へば、これを人間社會の進化について言ふならば、吾々が次ぎの章において悉く見るであらうやうに、辯證法は、かゝる進化の動因を、一定の生産諸關係と生産諸力との矛盾撞着のうちに見出す。一定の生産諸關係は、それが社會の生産諸力の發展を助長するものとして役立ちつ、ある限りにおいては、それ自身が一つの生産力である。すなはち、かゝる條件のもとにおいては、生産諸關係は生産諸力と同一である。だが、一定の生産諸關係のもとで社會の生産諸力が或る程度以上の發展段階に達すると、從來は生産諸力の發展に貢獻してゐた生産諸關係が、逆に生産諸力のより以上の發展を阻害する桎梏に轉化する。かくなるときは、問題の生産諸關係は、嘗ては一つの生産力であつたけれども、今はその反對物たる破壊力に轉化するのである。かくて生産諸力と生産諸關係との間に矛盾撞着が起り、そしてそれらの矛盾撞着が、古き生産諸關係の廢滅と・新たなるより高度の生産諸關係による之が代位とを、不可避的なものたらしめるのである。なほ以上の如き生産諸關係と生産諸力との間における矛盾は、社會の表面においては、一の階級と他の階級との間における闘争となつて現はれる。だから『すべて從來の歴史は階級闘争の歴史である』とも言ふのである。



現代社會にあつては、それはブルジョアとプロレタリアートの間における闘争となつて現はれる。そして斯かる闘争のみが、現代社會をより高度の組織へ前進せしめるための根本的な動力である。ブルジョアとプロレタリアートとは現代社會を構成してゐる對立物である。かゝる對立物の闘争のうちに現代社會を改造するに至る動力を見出すといふことは、現代社會の進化を一の『自己運動』として認識するといふことである。プロレタリアートをたゞ同情に値する弱者とのみ見來つた從來の空想的社會主義者と異なり、マルクスがこのプロレタリアートの肩上に社會改造の歴史的使命が負擔されてをり、プロレタリアートこそが社會改造の原動力となるべきものであることを、發見したのは、周知の如く實にマルクスの偉大なる功績であるが、かゝる發見は、以上述べ來つたところによつて明かなる如く、マルクスがその科學的研究の方法として採用した辯證法的唯物論の賜物に外ならぬのである。

レーニンは、この點につき、『マルクス主義の三つの源泉と三つの構成部分』と題する論文の中で、次ぎの如く述べてゐる。社會の發展を『自己運動』として把握せるマルクス主義の特徴が、そこには最もよく描き出されてゐると信するので、私は若干の重複を厭はず、やゝ長きにわたつてその一節を引用しておく。

『農奴制度が顛覆され、この神聖なる世界に「自由なる」資本主義社會が現はれるや否や、この自由なるものは、勞役人民の抑壓と搾取との一の新らしき方式にすぎぬことが曝露された。種々の社會主義的學説は、この抑壓の反映として、またそれに對する抗議として、直ちに發生した。だが最初の社會主義は空想的社會主義であつた。それは資本主義社會を批評し、非難し、呪咀し、その廢絶について空想し、より善き組織について幻想し、富者に搾取の不正なることを説教した。しかし空想的社會主義は、眞の

活路を指示することができなかつた。それは資本主義の下における賃銀奴隸制度の本質を説明することもできなければ、資本主義の發展の法則を發見することも、新らしき社會の創造者たりうべき社會的勢力「すなはち「自己運動」の根本的動因——河上補」を見出すこともできなかつた。

『そのうちに、ヨーロッパの到るところにおける・殊にフランスにおける・封建制度農奴制度の崩壊を伴つたところの狂猛な革命は、諸階級の闘争「すなはち對立物の闘争——河上補」が、あらゆる發展の基礎であり、その原動力であることを、益々明かにした。

『農奴所有階級に對する如何なる政治的自由の勝利も、絶望的な抵抗なくしては獲得されなかつた。如何なる資本主義國家も、資本主義社會の階級の間における生死の闘争なくしては、多かれ少かれ自由な、民主主義的な・基礎の上に立つことはできなかつた。

『マルクスの天才は、誰よりも先きに、世界歴史の教へるところの結論を、こゝから導き出し、これを徹底せしめたところにある。その結論とは階級闘争の學説「すなはち發展は對立物の闘争であるとの見解を人間社會に具體化せしめたもの——河上補」である。

『人々が耳觸りのよい道徳的・宗教的・政治的・社會的の文句や宣言や約束やの背後に、どの階級かの利害を發見することを學ばないかぎり、彼等は政治における欺瞞および自己瞞着の愚劣なる犠牲となつてきたし、また常になるであらう。また改良および改善に與みする人々は、一切の古き制度は如何に野蠻で腐敗してゐるやうに見えても、それは何れかの支配階級の力によつて支持されてゐることを、彼等が理解しないかぎり、古き制度の擁護者によつて愚弄されるであらう。しかし斯かる支配階級の抵抗



を粉碎するためには、たゞ一つの（レニーン傍點）手段があるのみ。「發展を對立物の鬭争となす吾々の見地からは、實際のところ「たゞ一つの手段があるのみ」である。——河上補」。古き制度を一掃して新らしき制度を打建てる能力のある勢力を形成しうる——そしてそれ自身の社會的地位によつて當然かゝる勢力を形成すべき——勢力をば、吾々を圍繞する社會自體のうちに見出し、「社會發展の原動力を當該社會自體のうちに見出すことが、社會的發展を一の「自己運動」として、一の「自發的發展」として、他に依存せざるものとして、把握するための根本條件である、——河上補」、これを鬭争のために啓蒙し組織することである。

『たゞマルクスの哲學的唯物論「辯證法的唯物論」のみが、今日までの總ての被抑壓階級がそのうちに呻吟し來つたところの、精神的奴隸からの活路を、プロレタリアートに指示した。たゞマルクスの經濟理論のみが、全資本主義制度のうちにおけるプロレタリアートの眞實の地位を、「その歴史的使命を——河上補」説明した』（瓜生・直井兩氏譯『マルクス・エンゲルス・マルクス主義』八〇—八二頁）

#### その四 量から質への轉化

量から質への轉化（ならびに質から量への轉化）の問題と、否定の否定の問題とは、エンゲルスが『反デューリング論』の第一篇の第十二章「辯證法、量と質」および、第十三章「辯證法、否定の否定」において、詳細に論述してゐるところである。こゝでは以上述べ來つた諸問題との連絡に注意しつゝ、先づ量から質への轉化について述べよう。



欠

**MISSING**



私は更に、貨幣の資本への轉形につき、今一つの例を擧げておかう。(私は先きに反對物への轉化を説明せし際、『資本論』の中から、單なる商品生産の資本家的商品生産への轉化に關する一例を引用した。それはそこで附言しておいたやうに、量から質への轉化の一適例であるが、こゝでは重ねてそれに言及することを省略しておく。『資本論第一卷第九章(カウツキー版、二五六—二五七頁)に説明してある次ぎの事實は、そこでマルクス自身が言つてゐるやうに、『單なる量的變化は、ある一定の點に達すると、質的變化に急變するといふ法則』——『ヘーゲルがその論理學のうちで發見したこの法則』——の正しいことを、確證するものである。私はその全文を引用しておかう。

『剰餘價値の生産に關する以上の觀察から明かなことであるが、任意の貨幣額または價値額がいつでも資本に轉形されうるといふわけではなく、むしろかゝる轉形の行はれるためには、一定の最小限度の貨幣または交換價値が個々の貨幣所有者または商品所有者の手に存在してゐなければならぬのである。可變資本の最小限は、剰餘價値獲得のために一年中毎日使用される個々の勞働力の費用價格である。もしもこの勞働者が彼れ自身の生産手段を有つてをり、しかも彼れが勞働者として生活することに甘んじてをるものとすれば、彼れにとつては、彼れの生活資料を再生産するために必要な勞働時間——例へば毎日八時間——だけで充分であらう。従つて彼れはまたたゞ八時間の生産手段を必要とするにすぎぬであらう。これに反して、この八時間以外に例へば四時間の剰餘勞働を彼れに行はしめる資本家は、附加的生產手段を調達するために附加的貨幣額を必要とするであらう。ところが上述の假定の下においては、彼れは、毎日占有する剰餘價値によつて勞働者の如く生活しうるためにすら、すなはち彼れの必要な諸欲望を充足しうるためにすら、すでに二人の



労働者を使用せねばならないであらう。この場合には、彼れの生産の目的は、單なる生活の維持であつて、富の増殖ではないであらう。しかるに資本家的生産においては後者が前提されてゐるのである。そこで彼れは、普通の労働者より二倍よく生活し、且つ生産される剩餘價値の半分を資本に再轉形するためには、労働者数と同時に前貸資本の最小限をもまた、八倍に増加せねばならぬであらう。もちろん彼れ自身も、彼れの労働者と同様に、直接に生産過程にたづさはることができ、だがその場合には、彼れは、資本家と労働者との中間物たる「小親方」である。「資本家と労働者とは對立物である、しかしこれら對立物の境界は決して不動的な・凝固的な・截然たる・ものではない。そこには親方なる中間物が介在する。——河上補」資本家的生産がある一定の高度に達すると、資本家は、彼れが資本家として・すなはち人格化したる資本として・機能する時間全部を、他人の労働の占有と従つてその管理とのために、使用しえねばならぬ。中世の同業組合制度は、個々の親方が使用しうる労働者数の最大限を極めて小さく制限することにより、手工業の親方が資本家に轉形することを、強制的に妨げようと試みた。貨幣所有者または商品所有者は、生産のために前貸される最小額が中世のこの最大限を遙かに越えるときにのみ、はじめて現實に資本家に轉形するのである。單なる量的變化は、ある一定の點に達すると、質的差異に急變する、——ヘーゲルがその論理學のうちで發見したこの法則の正しいことは、自然科学におけると同様に、こゝでもまた確證されるのである。」

レーニンもまた種々の機會に、この量から質への轉化の法則を指摘してゐる。私はこゝに政治現象に關する一例として、『國家と××』の中から、次ぎの一節を引用しておかう。彼れは、マルクスがその著『フラン

スの内亂』の中において、『バリー・コンミュンの經驗につき、僅かではあつたけれども、最も精確な分析』をなしたことを引用した後、次ぎの如く言つてゐる。

『コムミュンによつて破壊された舊國家の諸機關は、外觀上では「單に」より完全なデモクラシーによつて——常備軍の廢止、すべての官吏に對する完全なる選舉權および罷免權によつて——置き換へられたかに見える。だが、この「單に」は、實際のところは、一つの制度に代ふるに原則的に他の性質をもつ制度をもつてする巨大なる更代を意味する。こゝにこそ「量から質への轉化」の一つの場合が認めらるべきである。此の如き考へえられる最大の完全さと徹底さとをもつて實現されたデモクラシーは、ブルジョアのデモクラシーからプロレタリア的デモクラシーへ・（一定の階級の××のための特殊なる××としての）國家から、もはや本來の國家ではないところの或るものへ・轉化するのである。』（一九二六年、ルリン版、四一頁）

以上吾々は自然現象および社會現象について量から質への轉化を生ずる二三の實例を擧げたが、形而上學者の發展觀における主なる缺陷の一つは、此の如き轉化を到るところにおいて看過する點に横たはる。吾々は先きに、發展に關しては二つの基本的な見解があること、そしてそのうち「死んだ・貧しい・ひからびた」見解は、「縮少および擴大としての・反覆としての・發展」の見解であること、等を述べたが、事物の發展をたゞ同一品質の反覆的連續と見るこの見解は、取りも直さず一定の事物の發展過程のうちに、單なる分量の増減をのみ見て、その品質の變化を看過するものであり、しかるかぎりにおいて（すなはち分量の方面をの



み見てゐるといふ點において）その觀察は、一面的である。しかるに辯證法は、事物に對する全面的觀察を要求する。そして斯かる要求の一つの現はれは、吾々が一定の事物の變化を觀察する場合には、吾々はそのものの量の變化をのみ見るに止まらず、同時にその質の變化にも留意せねばならぬ、といふ要求となる。量から質への轉化の法則は、かくして發見されるのである。

なほこの量から質への轉化の法則は、如何に對立物が同一であるかを明白にする。すでに述べたやうに、全く同一の化學的藥品が、ある條件のもとでは（すなはち服用の分量が適度であつた場合には）有用物となり、ある他の條件のもとでは（すなはち服用の分量が適度な程度を超過した場合には）明かに有害な毒物となる。この場合、藥品としての有用物と、毒藥としての有害物とは、明かに對立物であるが、しかもこれらの對立物は、實際においては同一の化學的藥品たるにすぎない。此の如きを對立物の同一性といふのである。

元來單なる分量上の變化が品質上の變化を齎らすといふことそれ自身が、品質的差異を有するものの品質的同一を意味してゐる。何故といふに、單なる分量上の變化とは、同一なる品質を有する事物の量的變化を意味するのであるが、しかもその單なる分量上の變化がある品質的差異を生むに至るものとするならば、それは畢竟、同一なる品質を有する事物が、或る條件のもとでは品質を異にする方面を有することになる、といふことを意味するに外ならぬからである。單なる貨幣と資本とは對立物である。しかし剩餘價值を生む貨幣は資本となるのであり、しかるかぎりにおいて貨幣と資本とは同一物である。

吾々はすでに、本章第四節において、一切の事物の差異は、すべて相對的であり條件づきである、ことを述べた。單なる分量上の變化が品質的變化を生ずるといふことは、取りも直さず事物の品質的差異なるものが

相對的のものであり條件づきのものであることの一つの現はれである。

### その五 否定の否定

すでに指摘したやうに、『否定の否定』に關する問題は、エンゲルスが『反デューリング論』第一篇第十三章で詳論してゐるところである。こゝに否定の否定といふは、事物の辯證法的發展の過程において、例へばAの否定によつてBが生まれ、次ぎにはBの否定によつて再びAが生まれ、從つて或る方面から見れば、かかる否定の否定によつて最初の出發點への復歸（それが單なる復歸でないことは後に述べる）が行はれることを、意味するのである。私は具體的な例によつてそれを説明する前に、先づ何が故に否定の否定によつて

此の如き一種の出發點への復歸が行はれるかの理由を述べよう。  
すでに述べたやうに、事物はその發展過程において『反對物への轉化』をなす。だから、例へばAがその反對物たるBに轉化したとすると、そのBがそれ自身の發展過程において再びその反對物へ轉化するならば、それは最初の出發點たるAに復歸するといふことになる。

『資本論』においては、資本主義社會から共產主義社會への進展をもつて、『否定の否定』の一つの場合に屬するものとしてゐる。『資本論』第一卷第二十四章の有名なる最後の結びがそれである。私はその全文を次ぎに引用しておかう。

『資本の本原的蓄積は、すなはち資本の歴史的起原は、結局何に由來するか？曰く、それは奴隸および農奴の賃労働者への直接の轉化・すなはち單なる形態變化・にあらざるかぎり、それはたゞ、直接生産者



に對する剝奪を・すなはち自己の勞働に立脚する私有財産の崩壊を・意味するにすぎぬ。

『社會的・集會的・財産に對立するものとしての私有財産なるものは、勞働手段およびその他の外界の勞働條件物が私人に屬する場合にのみ成立する。しかるに、この私人が勞働者であるか非勞働者であるかに従つて、私有財産もまた異なつた性質をもつ。一見するとき、私有財産制は無限の相違を呈するが如くであるが、それらはたゞ此の兩極端の間に横たはる中間状態を示すにすぎざるものである。

『勞働者がその生産手段に對して有してゐる私有財産は、小經營の基礎であり、またこの小經營なるものは、社會的・生産の・ならびに勞働者自身の自由なる個性の・發生のため、缺くべからざる條件である。もちろん此の如き生産の仕方は、奴隸制、農奴制、およびその他の隷屬關係の内部においても、存在してゐたものである。しかしながら、それが能く繁榮し、その全力を張り切り、それに相應した典型的の形態をとるに至つたのは、勞働者が彼れ自ら使用する勞働條件物の自由なる私有物たりし場合に、すなはち農民ならばその耕作しつゝ、ある土地の私有者であり、手工業者ならば彼れが熟技者として使用しつゝ、ある器具の私有者である場合に、限られるのである。かゝる生産の仕方は、土地およびその他の生産手段の分散を前提とする。それは、これら生産手段の集積を排除すると同じやうに、また協業・同一過程の内部における分業・自然に對する社會的の支配および制御・社會的生産力の自由なる發展・を排除する。それはたゞ、生産および社會の・狹隘なる自然發生的の限界とのみ、兩立しうるに止まる。……それは、一定の高度に達すると、それ自身の××のための物質的手段をこの世に齎らす。その瞬間以後、社會の母胎内には、その母胎のため束縛を感じざるをえざる諸々の力と情熱とが生動することになる。

その母胎は破壊されねばならぬし、また破壊されてしまふ。かゝる母胎の破壊、個人的な分散的な生産手段が社會的に集積されたる生産手段へ轉化すること、従つて多數の者の微細な財産が少數者の巨大な財産に轉化すること、従つてまた多數の衆民に對する土地や生活資料や勞働具やの剝奪、衆民に對するこの恐るべく且つ困難なる剝奪、此の如きが資本の前史を形成する。……かくて、自己の勞働によつて得たる私有財産、言はゞ個々の獨立せる勞働者とその勞働條件物との融合に立脚せる私有財産は、他人の・しかし形式的には自由な・勞働の搾取に立脚するところの、資本家的な私有財産により、驅逐されることとなつたものである。

『此の如き變革の過程が、深さにおいてまた廣さにおいて、舊社會を充分に分解し了はるや否や、勞働者がプロレタリアに轉化されて彼等の勞働條件物が資本に轉化されるに至るや否や、資本家的な生産の仕方がそれ自身に立脚地を得るに至るや否や、勞働のなほそれ以上の社會化、土地その他の生産手段の社會的に利用される共同的な生産手段への・なほそれ以上の轉化、従つて私有財産の所有者に對するなほそれ以上の剝奪は、こゝに一つの新たな形態をとる。今や剝奪さるべきものは、もはや自營の勞働者ではなくて、多數の勞働者を搾取しつゝ、ある資本家である。かくて私有財産××の過程は、それが充分の深さと廣さにおいて舊社會を分解し了はるや否や、言ひ換へれば、その量的發展が或る程度以上に達するや否や、それ自身において一の質的變化を起す。獨立勞働者に對する剝奪は、變じて資本家に對する××となる。——河上補』

「かゝる剝奪は、資本家的生産それ自身の内在的法則の作用によつて、資本の集中によつて、行はれる。



一の資本家は常に多数の資本家を打ち殺しつゝある。なほこの集中と共に、すなはち少数の資本家により多数の資本家に對して行はれる剝奪と共に、絶えず擴大する規模における勞働過程の協業的形態、技術上における科學的意識的な應用、土地の計画的な利用、勞働手段のたゞ共同的にのみ利用されうべき勞働手段への轉化、結合的・社會的・勞働の生産手段としてこれを使用することに基づく有らゆる生産手段の經濟的利用、すべての國民が世界市場の網に絡まると、且つこれに伴ふところの資本主義的制度の國際的性質が、手に手をとつて益々發展することになる。かゝる變革過程の一切の利益を横領し獨占するところの資本長者の數は絶えず減少すると共に、困窮・壓制・隸屬・墮落・搾取の量は益々増大ししかもまた、絶えず膨大するところの・且つ資本家的生産過程それ自身の機構により訓練され結合され組織されるところの・勞働者階級の反抗も益々増大する。かくて資本獨占は、嘗てそれと共にまたその下において花を開きたる・その生産の仕方に対する桎梏となる。生産手段の集中と勞働の社會化とは、遂にその×××の外被と兩立しがたき一點に達する。その外被は××する。資本家的私有財産の××××る。剝奪者が××される。

『資本家的の生産の仕方から生まれ出た資本家の領有の仕方は、すなはち資本家的の私有財産は、個人的な・自己の勞働に基づける・私有財産の第一否定である。だが資本家的生産は、自然過程の必然性をもつて、それ自身の否定を造りだす。それは否定の否定である。それは勞働者の私有財産を再び恢復するものではないが、しかし資本主義時代の成果たる協業や、土地の・ならびに勞働そのものによつて生産された生産手段の・共同所有やを、基礎とする個人的財産はこれを造りだす。』

自己の個人的勞働に基づく私有財産の否定、これは第一の否定である。かゝる否定によつて、自己の勞働に基づく私有財産は、その反對物に・他人の勞働の搾取に基づく私有財産に・すなはち資本家的の私有財産に・轉化する。だが、かゝる資本家的の私有財産は、更に自己を否定することによつて、社會の共同財産に轉化する。これは否定の否定である。その結果、社會は『共同の生産手段をもつて勞働し且つ彼等の個人的勞働力を自ら意識しつゝ、社會的勞働力として支出するところの・自由人の組合』すなはち共產主義的社會に轉化する。かゝる場合、組合の全生産物は社會的生産物である。かゝる生産物の一部は再び生産手段として役立つ。この部分は社會的なものとして残る。だが他の部分は組合員の生活資料として消耗される。だからそれは彼等の間に配分されねばならぬ。『資本論』第一卷、カウツキー版、四二頁。それは、かく配分されることによつて、各人の個人的財産となる。だから、否定の否定の結果は、最初に存在してゐたやうな自己の個人的勞働に基づく・私有財産を、再び恢復するものではないが、しかし社會全員の共同勞働と土地および生産手段の共同所有とを基礎とする・個人的財産をば、新たに造りだすのである。それは單に最初の出發點に立ち歸へるのではないが、以上の如き意味において、言はゞ最初の出發點に立ち歸るのである。

なほエンゲルスが『反デューリング論』で用ひた麥粒の例は、種々の著作に引用されてゐる。私もここにそれを引用しておかう。

『否定の否定は、甚だ簡単な・到るところ日々行はれてゐる・進行であり、もし吾々がそれを被ひ隠くしてゐる秘密箱を取り去るならば、それは如何なる子供でも理解しうるものである。一つの麥粒を例に

那那那那那



とらう。かゝる麥粒の無數のものは、粉にひかれ、炊がれたり醸造されたりして、消費される。だが、一つの斯かる麥粒がそれにとつて正常的な諸条件を見出し、それが適當な土壤の上に落ちたならば、熱度と濕氣とのために、その上に特有な一變化が起る。それは發芽する。麥粒は麥粒としては消滅する、それは否定される、それから發生した植物が——麥粒の否定が——取つて代はる。しからばこの植物の正常な生涯はどうであるか？ それは成長し、開花し、結實し、最後には再び澤山の麥粒を生産する、そしてこれらの麥粒が熟するや否や、莖は枯死し、その莖の方は否定される。かゝる否定の否定の結果として、吾々は再び最初の麥粒を得る、だが單一のものではなく、十倍、二十倍、三十倍の數を得る。穀物の種類は非常に緩漫に變化する、だから今日の麥粒は百年前のそれと依然として殆んど同じである。だが、もし吾々が變形し易き觀賞植物、例へばダリヤまたは蘭をとつて見るならば、吾々はかゝる否定の否定の結果として、たゞにより多くの種子を得るばかりでなく、より美しき花を開くべく改良された種子を得るのであり、かゝる過程の反覆毎に、新たな否定の否定毎に、かゝる完成は高まるのである。(『反テューリング論』、ドイツ本、一三八頁。)

右の麥粒の場合には、否定の否定の結果として、『吾々は再び最初の麥粒を得る』のであり、しかるがぎりにおいては、吾々は最初の出發點に立ち歸るのである。だが、この場合にでも、吾々はたゞ單に最初の出發點に立ち歸るのではない。少くとも量において、最初の一粒は十倍、二十倍、三十倍に増加してゐる。それのみでなく(尤も麥粒の場合には極めて微小な程度においてしか行はれないが)そこには何程かの程度において質の變化が行はれてゐる。すなはち事態は單なる循環をなしてゐるのではなく、螺旋形を描いて發展するのである。

エンゲルスは、かゝる否定の否定をもつて、『到るところ日々行はれてゐる進行』だとなしてゐる。しかるば經濟現象について如何なる例があるか？ 先きに掲げた私有財産に關する否定の否定は、日々繰り返へされてゐるわけではない。吾々はもつと日常的な・何回となく繰り返へされてゐる・現象を指摘しておかう。『資本論』において詳細に論究してあるやうに、資本の運動の最も一般的な形態は次ぎの如くである。

G (貨幣) — W (商品) — G' (より多くの貨幣)

すなはち一定額の貨幣は商品に轉形し、しかる後再び貨幣に轉形する。この場合第一段の過程の (貨幣) — W (商品) は、第一の否定である。これによつて、貨幣は自己を否定して、その對立物たる商品に轉形する。第二段の過程 W (商品) — G' (より多くの貨幣) は、否定の否定である。貨幣の否定たる商品は、そこでは自己を否定して、その對立物たる貨幣に轉形する。かくて吾々は、否定の否定の結果として、再び貨幣を得る。しかるがぎりにおいて、吾々は最初の出發點に立ち歸る。だが、この場合においても、吾々はたゞ單に最初の出發點に立ち歸るのではない。上記の如き運動が行はれた結果として、吾々はGの代りにG'を・すなはち最初の貨幣よりも多額の貨幣を・入手しうるのである。これが謂はゆる否定の否定であり、そして資本は間斷なしに斯かる否定の否定を行つて自らを増殖することにより始めて資本として存立しうるのであり、従つてその生涯は全くかゝる『否定の否定』の連鎖から成るのである。

以上の事例が明示する如く、辯證法にいふところの否定は、事物の單なる排斥・または事物の單なる破壊・



を意味するものではない。それについては、更にエンゲルスが、次ぎの如く説明してゐる。

『辯證法における否定は、單に否などいふことでもなく、一つの物を存在してゐないと斷言することでもなく、またそれを勝手な仕方で破壊することでもない。既にスピノーザは *Omnis determinatio est negativus* すなはち一切の限定もしくは規定は同時に否定であると言つた。更に否定の様式は、辯證法にあつては、第一には過程の一般的な・第二にはその特殊的な・性質によつて規定されてゐる。私はたゞ否定するばかりでなく、また否定を更に止揚すべきである。だから私は、第二の否定が依然可能であるか又は可能になるやうに、第一の否定を整へなければならぬ。然らばそれは如何にしてか？ 各個の場合々々の特殊な性質に應じてである。例へば私が麥粒を砕いたり、昆虫を踏みにじつたりしたならば、なるほど私は第一の行爲を完成するに相違ないが、しかし第二の行爲を不可能にする。あらゆる種類の物は、否定によつて或る發展が生じ來たるやうに否定されるために、各々特有の様式をもつてゐる、それはあらゆる種類の觀念や概念について見ても同じことである。微分においては、負の根から正の自乗を作る場合とは、異なつた仕方で否定される。すべての他の場合におけると同じく、そのことは事實について學ばねばならぬ。麥の莖も微分も否定の否定に屬するといふだけの・單なる知識をもつてしては、私は麥の栽培に成功することもできねば、微分も積分もできはしない。』『反テューリング論』ドイツ本、一四五頁。河野・林兩氏譯本、二二五—二二六頁。

否定の否定が如何にして行はれるかは、エンゲルスの言つてゐる通り、『すべての他の場合におけると同じく、事實について學ばねばならぬ。』辯證法は何よりも現實を重んずるのであり、その使命は思惟をして現實

の忠實なる反映たらしめることに盡きる。すべての問題は事物について觀察さるべきであり、たゞ頭の中で考へ出さるべきではない。たゞ頭の中で考へ出されたものは、辯證法にとつては一切無用のものである。もし吾々が辯證法のこの根本的な性質をさへ充分に理解してゐるならば、吾々は否定が如何に行はるべきかの當面の問題についても、それを頭の中から考へ出すべきでなく、専ら事實について學ばねばならぬ、といふことは、言ふまでもない。

假にこれを麥粒について見るに、もしそれが粉に挽かれたり醸造されたりして、パンやビールに變化し、人間によつて飲食されるならば、麥粒そのものの發展過程は妨げられる。それは適當な土壤の上に落ち、適度な温度と濕氣とのもとに置かれる場合にのみ、それ自身のうちに含んでゐる自己否定の機能を發揮することができ、自分自身で發芽する。かゝる仕方によつてのみ、麥粒の『自己運動』は行はれるのである。更にこれを貨幣について見るに、もしそれが前に述べた運動とは逆に、商品の運動を媒介することにより、

$W$  (商品) —  $G$  (貨幣) —  $W'$  (他の商品)

なる運動をなすに止まるならば、それは單なる貨幣として支出されるのであり、運動はそれきりで終りになる。例へば私が農夫として自分の作つた米 ( $W$ ) を賣りて之を貨幣 ( $G$ ) に代へ、しかる後その貨幣 ( $G$ ) をもつて織物 ( $W'$ ) を買ふならば、貨幣は私の手を離れたきりで再び手に歸つては來ない。この場合における第二段の過程  $G—W'$  (一定の貨幣を支出して商品を買ふこと) は、前に資本の運動について述べた場合の第二段の過程  $G—W$  (資本としての貨幣が商品に轉形すること、例へば資本家が轉賣の目的をもつて或る商品を買入れること) と、その形式は同じであるが、しかし前の場合は後の場合と異なり、貨幣は資本として